
Mr.Justice ~ 真実と現実

奥山メイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Mr. Justice 真実と現実

【Nコード】

N2675I

【作者名】

奥山メイ

【あらすじ】

* episode 2・連載開始！*

新人刑事ヨーコは、利害の一致から、泥棒・山川とタッグを組んだ？！

二人のコメディ、揺れる心、アクション、そして切ない恋。「本当の正義」とは何なのか…犯罪者と向き合う中、真実が見えてくる。

…どうして。

どうしてそんな事が出来るの??

私は、彼の細かく動き回る指先から目を離せずにいた。
ヘアピンの青い光。

彼の動き。

その一つ一つが扉の封印を解き放っていく。
ガチツと音がして、扉が少しだけ開いた。

「…できた」

彼はニツと笑った。不思議な、表情だった。

「行こうか。ヨーコ」

*

コンクリートだらけの、灰色の街。春の朝の冷たい空気に、淀んだ雨が降る。

黒いレシーバーを濡らさないように気を付けながら、桐原ヨーコは傘を持ちなおした。

たまに吹き付けてくる風のせいで、卸したてのスーツからは雨の珠が滴っている。

手は寒さにかじかみ、感覚が無くなりそうだ。

ここは、吉祥寺本町署近くの大通り。朝なので人も車も、ほとんど通らない。信号だけが、赤から青へ、青から赤へと虚しく色を変

える。

シャッターを下ろしたデパートの前の歩道に立つヨークは、通りの向かい側にある電話ボックスを見つめていた。黄緑の公衆電話は、携帯電話の普及によってだんだんその姿を消しつつある。ヨークが見つめるボックスも、利用する人が減ったせいか、何だかたびれて見えた。

『いいか、ぬかるなよ!』

イヤホンが破裂するのではないかと思うほどの大声が響く。

『もうすぐ予告の時間だ!取り逃がしたら承知せんぞっ、いいな!』

何の脅しよ、岩波さん…。

上司に呆れてため息をつくとき、ヨークは改めて通りの向かい側を見つめた。

ガラスにヒビが入った電話ボックス。中に誰かがいる気配はない。

「はあ…」

ここに、被疑者が現れる可能性は殆どない。

何しろ、警察署から100メートルも離れていないのだから。

こんなこと早く終わらせて、帰りたい。

お風呂に入ってたまって、ゆっくり熱い紅茶でも飲んで…

あ、この間課長に貰ったジンジャーケーキを食べるってのも良いな。

スパイスが効いてて、美味しかった。

そんな事をぼんやり考えながら、ヨークは鼻をすすった。

何気なくシルバーの腕時計に目をやる。

午前5時42分。

もうすぐだ…。

ズルツ。

不意にシヨルダーバッグが下がった。

「はあ……」

面倒臭そうにため息をつく。

傘を持ちながらバッグを元の位置まで戻すのは、けっこう大変だ。

ヨーコは、電話ボックスから目を離さないまま、バッグの持ち手を探して右肘の辺りをまさぐった。

『被疑者から着電！！全捜査員、公衆電話を重視！！』

イヤホンから岩波の喝が聞こえる。署内にいるであろう他の刑事達
がワサワサと慌ただしく動く音も交じってヨーコに届いた。

ヨーコは、何とかバッグの持ち手を掴み、グツと引き上げた。

イヤホンの奥から、捜査員が受話器を取り上げた音がした。

『…もしもし』

ヨーコはイラついていて。いくら持ち手を引っ張っても、やけに重
いカバンが、なかなか上がってこないのだ。

『…警察か？』

犯人のものらしき声。

変声機を使っているのか、異様に低い。

まだ、カバンを持ち上げられない。

スーツにでもひっかかったのだろうか？

ヨーコはキツとなってカバンに目を落とした。

警察署の一室に、刑事達が群がっている。

巨大なスピーカーから、犯人の声が響きわたった。

『身代金の件なただけだよお。』

5000万で良いってことにしてやるよ』

チャラチャラした口調だ。「ご…せんまん!？」

刑事に囲まれ、受話器を握っていた女性捜査員が驚いた声を上げた。メモをとったりしていた周りの刑事達も、息を呑む。『うん、5000万ね。警察庁長官の息子が人質なんだから、コレくらい大丈夫つしよー? ねえ、刑事サン』

「!!!」ヨーコは動けないままでいた。

いくら引っ張つても持ち上がらなかつたシヨルダーバッグ。

目を落としてみると、バッグに自分以外の手がかかっていたのだ。

…男の手。

その手が、驚いて硬直したヨーコから、素早くバッグを奪いとった!!!

『用意できないのお?? 5000万』

犯人の声は、楽しそうに漏れてくる。

『警察つて以外にピンボーなんだあ』

「…んだとコラア!？」

ひとときわ体格のデカイ刑事が、受話器を捜査員から奪いとった。

「もういつペン言ってみる!!!」

「いつ、岩波さん、落ち着いて…!!」

周りの刑事達が、慌ててなだめる。誰かが取り落としたりらしい書類の山が、バラバラと床のカーペットの上に舞い広がった。

『明日の午後4時、井の頭公園内の稲荷に持って来い。じゃないと』

…』

岩波は黙って受話器を握り締めた。

『人質殺しちやうかもよお…』

シオルダーバッグが、完全に肩から離れた。

ヨーコは啞然として、ただバッグを掴んだ男を見つめる。

黒のミリタリーコート、茶色のサングラス…

「…バッグ」

ヨーコは擦れた声を絞りだした。

「返してください」雨が傘から流れて散る。

男は、全身から水を滴らせながらバッグを抱えた。

「聞こえないんですか？」ヨーコの声が震える。

「返してください！！」

男の口元が、微かに上がった。

次の瞬間、男は猛然と走りだした。

ブツツ。

ツー、ツー、ツー…

電話が切れた。

岩波は震えながら受話器を耳から離す。

ガシャーン！！

凄まじい音と共に、受話器が電話に叩きつけられた。「岩波さん！

！電話、壊れちゃいますう！」

女性捜査員が慌てて叫ぶ。「知るか！そんなこと」

岩波は吐き捨てるように言った。

「5千万だあ？そんぐらい用意してやるうじゃねえか。ナメてんじ

やねえ、警察をー！！」

はつきり言って、犯人よりガラが悪い。

「長官の息子を殺すだあ？百億年早いんだよっ！！」刑事たちは、

どうして良いかわからない。

互いに顔を見合わせた。

「…ふみはる…」

ふいに、奥から弱々しい声がした。

刑事たちはハツとして声の主　　警察庁長官を見つめた。

椅子に力なく座り、両手に顔を埋めている。

「佐倉長官」

女性捜査員が、床に落ちた書類の山を何とか避けながら、彼に歩み寄った。

「文春くんは、私達が必ず救出します。しっかりして下さい」

「筑摩くん…ありがとう」佐倉長官は、筑摩と呼ばれた女性捜査員に、少しだけ笑いかけた。

「そうだな。私が頑張らなければ。文春の方が辛い思いをしているのだから…」「我らにお任せを」

岩波が静かに言った。

その時。

「逆探知できました!!!」長髪の刑事が叫んだ。

「ナニ!?!」

刑事たちは一斉にパソコンの周りに集まる。あまりに急きこんで駆け付けた刑事などは、躓いてドサアツと倒れ、他の刑事達を突いて“ドミノ倒し状態”を生み出した。

ブワツ、と書類の山が再び舞い上がり、無秩序にはらはらと床に落ちる。

「おいおい。落ち着いてくれよ?」

長髪刑事は呟くと、キーボードを軽やかに叩いた。

壁にかけられた巨大なスクリーンに、吉祥寺の街の地図が現れる。

「今回も、公衆電話からの着電でした。場所は…」

彼の指が、再度キーボード上を走る。

ピコピコツと音がして、スクリーンに映された地図がぐぐつと拡大された。

「武蔵野市吉祥寺本町…ここですぐ近くですね」

「高橋、よくやった。そこに配置されてる捜査員は?!」

岩波が咳き込むように尋ねる。

「ええと…」

高橋が長髪を掻き上げた。思わず苦笑いする。

「桐原ヨーク。新人です…」

目の前を、ミリタリーコートの方が走り去る。

「あー!!」

ヨーコは思わず声を上げた。

一瞬とまっていたかのような時間が、彼女の中で再び動きだす。

「ひったくり!!」

慌てて後を追う。

風が雨粒と共に頬を打った。

「待ちなさい!!」

必死に叫ぶが、男に止まる気配はない。

…そのバッグ、シャネルなのよ!!アウトレットで買ったけど…

全然安くなかなかかったんだから!!

ひったくりなんか盗られてたまるもんですか!

第一、刑事のあたしを襲おうなんて、百億年早いっつーの!!

上司と同じようなセリフを思い浮かべているとは、ヨーコが知るはずも無い。

とにかく、走る、走る。

パシャーん!!

足元で水が撥ねる。

「とまりなさーい!!」怒鳴ると、ヨーコは赤い傘を道端に放り投げた。

傘は柄を空に向けて転がる。

ひったくり男の方も、随分しぶとい。

ヨーコが追ってくるのに気付くと、脚にターボをかけた。

一気にヨーコとの距離を引き離す。

「女だからってナメてんじゃないわよ!!」

ヨーコも必死に追う。

途中でヒール靴を脱ぎ捨て、ストッキングのまま全力疾走に入った。足が冷たいけれど、我慢しなきゃ。

あのバッグには、携帯も家の鍵も、カードも入ってる。

絶対に盗られる訳にはいかない。

しかも、刑事である自分がひったくられるなんて恥ずかしい…!!
「待ってって言ってるでしょおー！ー!!」

猛然と走ってくるヨーコを見て、犯人は少し怖気づいたようだ。

男のスピードがフツ、と落ちる。

それに怯まず、ヨーコは一気に突っ込んだ。

バシヤアツ…

見事な水飛沫が飛ぶ。

ヨーコのスライディングが男の足をすくい、ひったくり犯はズサアツと歩道に倒れこんだ。

おまけに、街路樹に衝突するというオマケつき。

「イツテエ…」

男が呻く。

サングラスが割れ、額には血が滲んでいた。

息を切らしながら、ヨーコはびしょ濡れのバッグを奪い返した。

「あんた、私が誰だかわかってんでしょうね」

凄味のある声を轟かせる。ナイスなタイミングで、ピカッと稲妻が光った。

「知らねえよ…」

男がぶつけた頭をさすりながら呟く。

茶色に染まった髪は、根元がプリン状態だ。

「私は桐原ヨーコ。吉祥寺本町警察署の刑事よ」

セリフを決めると、ヨーコは水の滴るスーツのポケットから手錠を取り出した。ハツと男が身を堅くする。「窃盗、公務執行妨害で逮

捕するわ」

すかさず、男の腕をグイツと捻りあげ、手錠をかけた。

「!!!」

信じられない、という顔で男が目を丸くする。

「さあて、署まで来てもらいましょうかね」

冷たく言い放つと、ヨーコは男を立たせようとした…

『桐原!!!桐原、応答しろ!!!』

突然、レシーバーから岩波の声が響いた。

余りの大音量に、ヨーコも男もビクツと飛び上がる。走っている最中にイヤホンが抜けてしまったらしく、周りに音が筒抜けだ。

『桐原あ!!!』

「はいっ！私です」

慌てて答える。

『電話ボックスの中にいる人物を至急確保だ!!!今、そっちに他の刑事も向かってる！急げ!!!』

「電話ボックス…？かくほ？」

突然のことに、ヨーコはたじろいだ。

『何とぼけてるんだ、ボケ!!!お前の担当してる電話ボックスに、今犯人がいたんだよ!!!』

「犯人…あっ!!!」

ヨーコは息を呑んだ。

…私、ひつたくりを追うことに一生懸命になって、自分の職務をほったらかしてる！

『おい聞いてんのか桐原あ!!!』

岩波の怒鳴り声が、頭の中にキンキン響く。

…どうしよう!?

「戻れば??」

プリン頭の男が言った。

「まだいるかもよ？犯人」言い返す余裕も無かった。パニックで泣

きそうになりながら、ヨーコは今来た道を走り去っていく。

「あーあ……」

プリン頭の男が、うずくまったまま、ため息をついた。

「俺、これからどうなるんだろう……」

シャネルのカバンが、雨に打たれながら、そこに残されていた。

「…どういうことですか」いつもは優しい角川の声が震えていた。ヨーコは雨の中うつむき、顔を上げられずにいる。「桐原さん。あなたは、持ち場を離れた。そういう事ですか」

「はい…」

ヨーコは力なく頷いた。

降りしきる雨の中。

空の電話ボックスの横に、ただ座り込んでいる。

傘もヒール靴も、放り出されたままにあっただけれど、誘拐事件の犯人だけは見つけれなかった。

数人の刑事達が、今も辺りを走り回っている。

でも、ヨーコにも、他の刑事達にも、わかってる。もう手遅れなのだ。

犯人は逆探知されること位知っている。

いつまでも近くに留まっている筈がない。

動き回る仲間を見つめながら、ヨーコは気を遣わせている事を感じていた。

おまけに、ひったくり犯にも逃げられた。

ヨーコの剣幕に驚いたせいか、カバンだけは無傷で残されていたけれど。

…私は、何をしていたんだろう。

何の為に、刑事やってたんだろう。

全ては、犯人逮捕の為だったのに…。

「あなたは、刑事として失格です」

角川が続けた。

「この事件には人命がかかっている。もし、被疑者確保が遅れて、手遅れになったら…」

角川はそこで言葉を切った。

ヨーコの肩が、細かく震えだしたからだ。

「…私のせいよ。もし、文春さんに何かあつたら、私…」

ヨーコの黒髪から、雫がゆっくりと落ちていく。

彼女に傘をかけてやっている角川の肩も、大分濡れてしまった。

「…でも」

角川が、少し優しい口調になった。

「とにかく、あなたに怪我が無くて良かったです。…あなたは、不運だった。それだけです」

ヨーコが小さく鼻を嚙った。

「…角川くん、慰めてくれてんのお？」

「いえッ！いや…まあ、そうですね」

角川が口籠もったので、ヨーコは少しだけ微笑んだ。

角川と一緒にいると、心が落ち着く。

同い年で、一緒にこの署に配属された同期。

なぜか敬語キヤラだけれど、いつもヨーコの支えになってくれる。

「角川くんはさア…」

ヨーコは拳で顔を流れる雫を払いながら呟いた。

「きつと、すぐ昇進しちゃうんだろうね。しっかりしてて、私みたいなミスもしないで…」

「何言ってるんですか」

角川が怒ったようにヨーコを見る。

「ミスの一回位で、弱気になってちゃダメですよ。先は長いんですから」

ヨーコは答えず、ただ笑うしか無かった。

…こんな重大なミス、取り返せる筈ないじゃない…

それでも、フォローしてくれる角川が、ヨーコは好きだった。

「桐原アー!!」

灰色の街に、ドラ声が響き渡る。

…来たか。

ヨーコは肩をすくめた。

「角川くん、もう行ってて。ボスが来た」

「で、でも…」

角川は不安げにヨーコを見つめる。

小柄で細い彼の、くりくりとした瞳。

思わず微笑まずにはいられない可愛らしさだ。

「私と一緒にいたら、角川くんまで怒鳴られちゃうよ。早く行って」

「すみません」

角川は小さく敬礼した。

「おわつたら、コーヒーでも飲みましょう。凍えちゃいますよ」

そして、気掛かりそうに離れていった。

自分の傘を、ヨーコの手押しつけて。

途端に、気温が下がったように感じる。

ヨーコは身震いしながら、ゆっくり立ち上がった。

寒い。

全身がぐしょ濡れなせいか、はたまたこれから訪れる雷の予感のせいか…。

「桐原あー!!お前っ!!」叫びで自らの喉を詰まらせながら、岩波が登場した。薄くなった髪が風で乱れ、自由の女神並につっ立っている。

「お前」

岩波がヨーコの真っ正面にズン、と立ちふさがった。「お前!!」

「…はい」

答えながら強いポマードの匂いを感じて、ヨーコは思わず顔をしか

める。

「泣いて済む問題じゃねえんだよ!!」

ヨ一コのしかめっ面を泣き顔と勘違いしたらしく、岩波が怒鳴った。「被疑者を取り逃がした!一晩かけて、武蔵野中の公衆電話を張った苦労は何なんだ!?水の泡だ!!」

「すみませんでした」

「すみません、だあ!」岩波の目が見開かれている。

「どの面さげて言ってるんだ?!すみませんじゃあ、被疑者は捕まねえんだよ!!」

ヨ一コは、うすいルージユの引かれた唇を噛み締めた。

黙っていた方が良さそうだ。

「お前のミスのせいで、刑事全員が責めを負うんだよ!!」

「…」

「ひつたくりだあ?!ふざけるんじゃない!どつかのちんまいバツグと人命と、どっちが大事なんだ、エ?」

「…人命…です…」

ヨ一コは擦れた声を絞りだした。

怒鳴り疲れたらしく、岩波は息を切らしたまま、数回辺りを見回した。

刑事たちが、どうなることかと、2人を取り囲んでいる。

それを見て、岩波は少し理性を取り戻したようだった。

「…とにかくだ」

彼が呟いた。

「お前は、暫く来なくていい」

ヨ一コはビクツと顔を上げる。

「…え??」

「来るなつつつてんだよ。刑事やめる覚悟が出来たら戻ってこい」吐き捨てるように言うと、岩波は背をむけ、肩を怒らせながら去っていった。

…どういこと??
私、クビなの…??

頭が真っ白になった。
何も考えられない。

…私は…

プリン頭の青年が、物陰からじっと彼女を見つめていた。

コンクリートに、雨が打ち付けるのが見える。ただ、ひたすらそれだけ。それしか見えない。体が震えている。

…これは、寒さのせい？

仲間達に、何か声を掛けられたような気もする。

でも、答えた記憶は無い。頭がガンガン打ち付けられるようだ。けれど、身体はどこかフワフワした世界を漂っている気がする。

…私、どうしたら良いの？

私は…。

「…らさん。桐原さん！」急に肩を揺すぶられ、ヨーコはハッと顔を上げた。

「…角川くん…」

レインコート姿の角川が、いつの間にかヨーコを見下ろしていた。

「戻りましょう」

冷えきった腕を掴まれる。「ヨーコさん。風邪引いちゃいますよ」

ヨーコは、力なくうなだれた。

「…ない…」

ルージユを引いた唇から、微かな眩きが漏れる。

「エ？」

角川が怪訝そうにヨーコを見た。

ヨーコは俯いたまま続けた。

「…もう、私は、戻れないよ…」

「…」

「ボスに…暫く来るなって…」

ヨーコの肩が震える。

「私は、角川くんの言った通り…刑事失格なの」

「桐原さん、」

「ごめんね、心配かけて。落ち着いたら、帰るから…角川くんは、もう…」

「桐原さんっ!!」

角川が大声を出した。

ヨーコはピクツと動き、恐る恐る彼を見上げた。

角川は、雨を滴らせながら、ヨーコをじっと見つめていた。

その目の厳しさは、まるで氷柱のようだ。

「…戻りますよ。一緒に」有無を言わさぬ、強い言葉だった。

「ずっと、ここでしゃがみこんでる訳にはいかないんです。あなた自身も、あなたの気持ちも」

「角川くん…」

「さあ。立って」

角川はヨーコの背中に手を回して支えた。

少しよろめきながら、ヨーコが立ち上がる。

「行きましよう。大丈夫です。きつと…」

ヨーコの背を抱いたまま、角川は言った。

小さく、本当に小さく、ヨーコは頷いた。

頬を、雨と塩辛い涙がこぼれた…。

「フーン」

プリン頭の青年　　ひったくり犯が、ニヤリと笑った。

「刑事失格、ねえ…」

雨はしきりに降り続ける。青年のビニール傘からも、ポタポタと雫が落ちる。

「すげえ女っ」

クスクスと笑うと、彼は手の甲を見つめた。

かすり傷から血がにじみ、ほんの少し腫れている。

ヨーコにスライディングされた時についた、傷だった。

シャワーを浴び、ピンクのフワフワしたタオルで身を包む。

冷えきった全身が、ほんのりと暖かくなる。

「ぶえつくしゅんっ!!」女とはとても思えないくしゃみをして、

ヨーコは鼻をすすった。

「誰かが噂してるのかなあ…」

小さく呟く。

「そりゃそうだよね。あんな失敗したら、みんな怒ってるよね…」

トントン、と洗面所のドアがノックされ、わずかに開いた。

「ヨーコ、着替え持ってきたよ」

落ち着いた声。

「入っていい？」

「はいッ」

明るい声を作って、ヨーコが答えた。

キィ、と音をたてて入って来たのは、ショートカットの若い女だ。

凛々しく整った顔つき、白い肌。

手足はスラリと細く、黒いシンプルなTシャツとジーンズに包まれ

ている。

彼女は、新潮ザザ。^{しんちゆうざざ}

ヨーコの2年先輩で、フランス人のハーフだ。

「はい、これ」

渡されたのは、バナナ色のロングTシャツと、真っ赤なフレアスカ

ートだった。「あたしの趣味だから、こんな凄い色しか無いんだ」

困ったようにガザは笑う。ボーイッシュだが美しいその笑みに、ヨ

ーコはついつい見とれてしまった。

睫毛、長いなあ…。

目も綺麗な二重だし。

私みたいに腫れぼったくない。

「なーに見てんのよっ」

ヨーコの視線に気付いたザザが、軽くヨーコの肩を突いた。

「あんた女でしょうが」

「すっ、すいません！あんまり綺麗だったんで…」

ヨーコは慌てて彼女から目を離す。

「あ、そう。」

あっさりとザザは許した。「まあ、無理もないわね。あたし確かに美形だし」がくっ。

ヨーコはヨロツとした。

いつもの、お決まりのパターンだ。

こういう性格でなければ、ザザはモテたと思うのだが…。

「ほら、早く着て。また冷えるよ」

ザザが指摘する。

「あ、はいっ。ありがとうございますーすー!!」

ヨーコはピョコツと頭を下げた。

…ちなみに、カラフルなザザの服は、典型的な日本人であるヨーコの身体に、あまりマッチしなかった。

おまけに、ザザはヨーコよりずっと細い。

ヨーコは二の腕と腰の布地が裂けやしまいかと心配しながら、洗面所を出る羽目になった。

あれから。

雨でぐしょ濡れになったヨーコは、角川と共に署に戻った。

岩波はヨーコの方をチラッと見ただけで、もう怒鳴り付けようともしなかった。

…怒鳴ってくれた方が、まだ楽なのに。

自分のミスを思うと、胸が苦しくなる。

泣きそうになりかけた所で、ザザが声をかけてきた。2人は普段からとても仲が良い。

明るくてノリの良いヨークは、ザザのお気に入りだ。めずらしく俯いている彼女を目にしたザザは、有無を言わずに自宅に連れてきた。

ヨークが元気を取り戻すには、岩波の態度は冷たすぎたのだ。

「…じゃあ、私は署に戻るから」

ザザが声をかける。

「お腹すいたら、その雑誌の下にカップ麺があった筈だから。ヤカンは流しの中ね」

「あ、どうも」

ヨークは苦笑いする。

ザザの部屋は、一言で表現するなら「カオス」だ。

散らばった洗濯物、雑誌、手錠、スナック菓子。

その下からわずかにフローリングが除いている。

陽に焼けた窓辺に、ベッドがある。

ゴチャゴチャの山は、ベッドとほぼ同じ高さまで積み上がっていた。

「鍵は持つて出るから、外には出ないでね。んじゃ」ザザが朗らかに告げた。

「行つてらっしゃい」

苦笑いしながら、ヨークが見送る。

ボタン、と玄関ドアが閉まると、急に部屋は静かになった。

「はあ…」

ヨークはため息をついた。シャネルのバッグに目を落とす。

私が、もっとしっかりしてればなあ…

ひったくりなんか逢うことも無かつただけだ。

ヨーコはバフン、とベッドに身を投げた。
いつの間にか雨は止んで、明るい昼の光が差し込んでいる。
その暖かさの中で、ヨーコは目を閉じた。

ちよつとだけ寝よう。

そしたら、少しは気持ちになるかも知れない…

ヨーコは、ふうつと眠りの中に落ちていった。

カチャ…

…チャ…

ヨーコはまどろみながら、少し動いた。

カチツ。

カチ。

「…んー…」

軽く寝返りをうつ。

カチャツ。

カチャ、ガチャン！！

「！！！？」

ヨーコは跳ね起きた。

パツと腕時計を見る。

時刻は12時ちょうど。

そんなに長いこと眠っていた訳ではない。

ヨークはまわりを見回した。
相変わらずの力オス。
何も変わっていない。

…それなのに、何か違和感を感じる。
何だろう、これ。

誰かに、見つめられているような感覚。
それに、さっきの、あの音…

ヨークは、気配を感じた。恐る恐る、ゆっくりと後ろを振り向く。
明るい光を投げ掛ける、日焼けした窓辺へと。

プリン頭の青年が、窓枠に腰掛けていた。

「いやああああっッ!!」

悲鳴が空気をつんざいた。

窓枠に腰掛ける青年。

サングラスにはヒビが入り、鈍く光を反射する。

ヨーコが声を上げると、青年が部屋の中に飛び降りるのは同時だった。

ザザが作り上げたゴミの山が、青年の着地と共に勢いよく跳ね上がる。

ベッドが大きく軋んだ。

ヨーコがパツと動いたからだ。

彼女の動きは素早かった。わずかに見えているフローリングに着地すると、ガラクタに足を滑らせてバランスを崩している男の手首を掴み、一気に捻り上げる。

「いつ!!」

男が苦痛の声を洩らした。間髪いれず、ヨーコは落ちていたザザの手錠を拾い上げる。

しかし、男も負けてはいなかった。

手錠を拾う、わずかの隙を見逃さない。

自分を捻り上げるヨークの腕を、空いている方の手で振りほどいた。
ガターンッ!!

大きな音を立てて、男がヨークから飛び退いた。
ザザの洗濯物が部屋中に散る。

弾みでヨークはベッドの上になぎ倒された。

「動くな!!」

青年が叫ぶ。

ヨークは身を起こそうとして、ハッと固まった。

青年の手に握られているもの。

黒光りする、ピストル。

銃口はまっすぐにヨークの胸に向けられている。

「動くな」

少し落ち着いた声で、再び男が言った。

「話がしたいだけだ」

彼は、雑誌の山を崩しながら、ゆらりとベッドの脇に立った。

「…話??」

震えながら、しかし青年を強く睨みながら、ヨークが呟いた。

青年はニンマリする。

「そう。話だ」

「犯罪者と一緒にするような話は無いわ」

ヨークが青年をグツとにらんだ。

「あんた、今日一日でひったくりに住居侵入、銃刀法違反までして
るのよ。話なんて出来る立場じゃないでしょう?」

青年のサングラスの奥で、切れ長の大きい目が、すうつと細まった。

「…フーン」

その口調。

まるで楽しむかのように、ピストルを握る手に力が込められる。

「……!!」

ヨーコが震えた。

撃たれることを、怯えてはいけない。

怯えて、相手の凶に乗ってはいけない。

刑事が犯人に屈することなど、あつてはならない……。そうは解つていても、目の前に突き付けられた銃口に、背筋が寒くなる。

青年の指が引き金にかかった。

「話さえ聞いてくれれば良いんだよ？ 刑事さん」

青年が優しく言った。

けれど、サングラスの奥で光る瞳は厳しい。

「俺は、あなたを殺したい訳じゃない」

「……」

「ただね、取り引きしてみたいんだ」

「取り引き……？」

ヨーコはザザの布団で胸元を庇いながら、思わず聞き返した。「そう。俺とあなたの間でね」

青年がゆっくりと微笑む。「悪い話じゃないと思うな。あなたには何の危害も及ばない」

「……誰が、犯罪者と取り引きなんか!!」

ヨーコが叫んだ。

「私は刑事なのよ！ 脅すなら他の人にして!!」

それでも、青年は笑ったままだった。

「俺の取り引きは、あなたとしか出来ないんだ。うまくいけば、あなたのミスは帳消しになるよ……失格した刑事さん？」

「……!!」

ヨーコの目が、ぐっと見開かれた。

……どうして知ってるの？

青年の目元が緩む。

「ビツクリしたろ？」

ヨーコは、彼を見つめるばかりだった。

「…見てたの？」

青年は答えない。

ただ、笑っているだけ。

まるで、よくできた彫刻のように。

ヨーコの中に、沸々と怒りがこみあげてきた。

「見てたのね！！ボスに怒鳴られたのも、角川くんに慰められたのも！！！」

「ウン」

青年がこくと頷く。

「ふざけるんじゃないわよ！！！」

喉が裂けんばかりの大声が、ゴミの山に轟き渡った。「こうなったのは、全部あなたのせいよ！！あなたが私のカバンひったくろってしなければ…こんなことには…！！！」

青年の顔から、フツと笑みが消えた。

「…ごめん」

「ごめん?!」

ギシツとベッドが軋み、ヨーコが立ち上がった。

「ごめんじゃ済まないわよ！！あなたのせいで、私が何を失ったと思ってるの!?!」

「そりゃ…」

青年がヨーコをじいつと見つめる。

「信頼は失っただろうな。将来も絶望的…と。わかってるよ、見てたんだから」「それだけじゃないわ!!」

「え?まだあるのかな?...ああ、あの敬語の兄ちゃんの恋心か」

「そんなんじゃないわよ!!」

喚きながら、ヨーコはちよっぴり赤くなった。

「じゃあ、何？」

青年が面白そうにヨーコを見ている。

「ええ、お望みなら言つて差し上げるわ!!」

ヨーコが怒鳴り散らした。「今までの人生よ!!」

ピシャーンと雷が落ちたかのようだった。

「小さい頃から刑事になりたいって決めてて!

女が刑事になるなんて危ないからやめろっていう周囲の反対を振り切つて!!」

ドジだから一杯失敗もして…」

ヨーコの瞳に、涙が浮かんだ。

「もう諦めようって、何度思ったか知れないわ。でも、諦めきれなかった。刑事になるのが、ずっと私の夢だったから…!!」

涙はポロポロと流れて頬を伝う。

「今年の春、ようやく夢が叶ったの。嬉しかった…本当に嬉しかった。これから、自分は刑事として、正義のために働いていける。それが誇りになつたわ。

…それなのに!!」

ヨーコの声は涙と怒りで震えていた。

「もう私には将来なんて無くなつちゃったの!!あんなミスしたら、辞めるしかないじゃない!!私が今までやってきたことは、ぜんぶ水の泡なの!!」

あとは、もう声にならなかつた。

ヨーコはぺたんかとベッドに座り込み、嗚咽を洩らしはじめた。

「ああっ…っ…っく…」

青年がピストルを下げた。「俺は、あなたを救える」彼は静かに言った。

「…っく…っ…エ??」

ヨーコは、驚いて目を上げた。

涙で潤んだ視界。

ぼんやりと揺れるその青年の姿。

しかし、彼が発した言葉は、強烈にヨーコを射ぬいた。

「俺は、犯人を見た。電話ボックスにいた男を、見てるんだ。」

青年がゆっくりとしゃがみこみ、ヨーコと目をあわせた。

「話つてのは、捜査に協力することだ」

ヨーコは涙でべちゃべちゃの顔で、青年を見つめている。

「俺は、山川圭司。20歳、…泥棒だよ」

『俺はあなたを救える』

…どういうこと？

『あなたのミスは帳消しになる』

…有り得ない。

『捜査に協力するってことだ』

…泥棒が??

バツカじゃないの？

「…信じてもらえない？」山川と名乗った男が、彼女の顔を覗き込んだ。

「…つたり前でしょ！」

ヨーコは憮然として山川を押し退ける。

「近寄らないでよっ、この泥棒!!」

「…こんなおいしい話蹴っちやうの？」

ガラクタの上に崩れながら、山川は続けた。

「ミスを帳消しにできるチャンスなのに」
ピタッ。

ヨーコの動きがとまった。「…」

沈黙が流れる。

ヨーコの瞳が、わずかに揺れ動く。

山川は、それをじっと見つめた…。

「あんたは、私を助けようとしてるの？」

ヨーコが、かすれた声で聞いた。

「それとも、騙そうとしてるの？」

「だまして何になるのさ」山川が笑い、サングラスを外した。涼やかな切れ長の目元が顕になる。

決して美形では無いが、すっきりと整った顔立ちだ。「捕まること覚悟して来てるんだから。騙そうなんて思っていないよ」

優しい光が、その瞳に宿った。

「確かに、あなたのミスは俺のせいだ。だから、俺はあなたに協力する」

ヨーコが大きく鼻を噉った。

…信じちゃダメ！！

理性が彼女を引き止める。…彼は犯罪者よ。私が、捕まえなくちゃいけない人間なのよ。

「…刑事になるために、頑張つて来たんだろ？」山川が囁く。

「じゃ、諦めんなよ。またやり直せるチャンスなんだ」

…信じちゃ、ダメ…。

「刑事は、犯人逮捕のために働いてんだろ？俺の情報があれば、逮捕できるかも知れないじゃん」

ヨーコの頬を、また涙が流れた。

私は…

涙は、次から次へと溢れては頬を伝う。
その雫が、ザザのフレアスカートに染みをつける。

日がフツと陰った。

風がサアツと梢を揺らしていく。

「…わかった」

ヨーコが言った。

はつきりした声だった。

「あなたの申し出、受けるわ」

しん、とした部屋に、その声は染み透った。

山川がニヤリと笑った。

「了解」

彼の手に握られていたピストルは、ミリタリーコートのポケットに消えた。

穏やかに、風が吹きすぎる。

「そのかわり」

山川が人差し指がピンと立てられる。

「今回は、俺を逮捕すんなよ」

「エ？」

ヨーコが、泣きながらきよとんとした。

「どういうこと？」

「だからあ。ひったくりとか住居侵入とか、今回のことでは俺を逮

捕すんなつて言つてんの。

取り引きなんだから、お互いに協力しあわなきゃおかしいだろ?？」
山川は、さも当たり前前のごとくのように喋った。

「そんなこと…!」

ギシツ!という音と共に、ヨーコがベッドから飛び上がる。

「そんなこと、出来るわけないでしょ!」犯罪者を見逃すつていうの!？」山川の視線が冷たいものになる。

「できないの?」

「当たり前でしょう!」ヨーコは怒って怒鳴った。「協力してくれるのは有難いけど、私はあんたには協力しないわ!」

「じゃあ、俺も協力しないよ」

しゃあしゃあと山川が言った。

そのままベッドに寝転がる。

「ま、それはそれで良いけど。

俺は今すぐここから逃げられるし、お前が刑事辞めようが何だろうが、俺には関係ないし」

「そん…なっ…」

「どうすんの?」

だるそうに青年が欠伸した。

「協力して欲しいの?ほしくないの?」

ヨーコは怒りに震えて、もう涙も出ない。

もういい。

もういい!!

「協力なんかいらない!」轟くような大声だった。

ギシツ!!

ベッドが大きな音を立てるた。

山川が急に立ち上がったのだ。

「あ！」

気付いたヨーコは、慌てて彼の腕を掴もうとしたが、遅かった。

山川の体は、逆上がりでもするかのよう回転し、軽々と窓に着地した。

一拍遅れて、ヨーコが窓枠にたどり着く。

山川は既にベランダの柵を跨いで、乗り越えようというところだ。

ヨーコがベランダに出ようと、窓枠を跨いだ、その時。

「おい」

山川が声をかけた。

「気を付けるよ。スカートの中、丸見えだぞ」

「!!!」

慌てて手でスカートを押さえる。

そのスキに、山川はベランダから飛び降りた。

ザザのアパートは二階。

すぐ下を、人気の無い通りが走っている。

山川にとっては好都合だ。「それからあ！」

ベランダの柵に走りついたヨーコをからかうように、山川が叫んだ。

「その服、小さいんじゃない？裂けそうだぜー!!!」

「何ですってえ!?!」

ヨーコが憤慨して地団駄を踏むのを見届けると、山川は走り去った。軽快なステップで…

「…はあ…」

ヨーコはぐったりとベランダにもたれた。

何だか、どうしようもない虚脱感が彼女を襲っている。

『俺はあなたを救える』

まだ、その甘美な響きが耳に残っている。
でも。

これで良かったのだ。

ミスの埋め合わせは出来なくても。

…少なくとも、私は、刑事としての誇りだけは守ることができた…。

太陽が雲の影から現れたらしい。

再び、さんさんと日が照りつけ始めた。

「まことに申し訳ありませんでした！」
筑摩麗奈ちくまれのなが頭を下げると、後ろに控えていた刑事たちもそれに倣った。

吉祥寺本町警察署。

誘拐事件の犯人を取り逃がし、皆憔悴しきっている。しかし、一番苦しいのは、警察庁長官・佐倉信春だろう。

彼の頭髪は一晩で真っ白になった。

いつもはピッチリ着こなしている背広も、力なくよれている。

組んだ両手に額を埋め、彼は今にも泣いてしまおうか、怒鳴りだすかに見えた。

しかし、彼は何とか笑みをつくった。

「そんなに頭を下げないでくれたまえ」

発した声は、弱々しかった。

「まだ、チャンスはある。明日の夕方、身代金受け渡しで犯人に接触できる……」
「しかし！」

筑摩が顔を上げずに、言葉を絞りだした。

「もし、このことで、手遅れになったら……文春くん、何かあったら……!!」

彼女は、床についてしまうのではないかと思われる位に頭を下げていた。

「こんな事件に新人を配置した、俺のミスです」

岩波も声を上げた。

「……俺が責任をとります」

しかし、長官は手を上げて彼を制した。それから一つ深いため息を

つくと、両手を組んで額に当てる。手の甲には力がこもり、骨や筋が浮き出ていた。

「…申し訳ありません…」岩波が呟いた。彼の拳も、握りしめられていた。

「必ず、文春くんは無事に助けだします」

ザザが帰って来たのは、深夜だった。

「つくかくれ〜た〜」帰ってくるなり、ザザはスーツのままベッドに身を投げる。

「先輩、ご飯作っただんですけど…」

ヨーコが心配そうに声をかけた。

「おっ。いいねえ。気が利くじゃんっ」

ザザは、よっこらしょ、と起き上がった。

「何作ったの？」

「ドリアです」

「やった！！大好物なんだよね〜」

ザザが幸せそうにはしゃぐ。

「じゃ、食べよ食べよ」しかし、ヨーコはミットで耐熱皿を持っただまま、困ったようにザザを見つめるばかりだった。

「ん？どうしたの、早く食べようよ」

怪訝そうにザザが言う。

ヨーコは、苦笑いしていた。

「先輩、あの、テーブルが見当たらないんです…」

それはそうだ。

ザザの部屋のごちゃごちゃは、完全にテーブルを覆い隠し、どこにあるか全くわからなくしていたのだ。

「テーブルなんて無くても食べれるよ〜」

ザザが余裕そうに伸びをする。

「でも、先輩」

ヨーコは必死だ。

「ドリアのお皿、すごく熱いんです。置くところがないと…」

「んじゃ、どつかそこら辺の雑誌の上に置いて」

ザザは、当たり前のようにそう告げた。

「え」

ヨーコは絶句する。

ザザが快活に笑った。

「うん、遠慮しないで。ドリアで雑誌に染みがついても、それはそれで芸術だよ」

ヨーコは啞然。二の句がつけない。

「えええええー！？」

「佐倉長官さま」

湯気の立つドリアを口に運びながら、ザザが呟いた。「奥さん亡くしてるんだって」

「…え…」

「三年前。癌だって…」

静かな部屋の中で、ザザは深いアルトの声で続ける。「文春くんは、奥さんが佐倉さんに遺した、形見でもあるのよね」

「…」

「佐倉さん、言ってた。奥さんと約束したんだ、って。文春くんは責任持つて育てるからって…」

ヨーコの脳裏に、憔悴していた佐倉長官の姿が浮かんだ。

…亡き最愛の人との、大切な約束。

文春くんは、今危険に曝されている。

約束は、果たせないかもしれない。

そして。

私は、その犯人を捕まえそこなった…

ヨーコは唇を噛み締めた。「早く犯人捕まえて、奥さんを安心させてあげなきゃね…」

ぼつり、とザザが言った。

ドリアの中にグチャツと突っ込まれている、乱切りの野菜たち。

ブロッコリーには、芯まで火が通っていない。

ヨーコは、大きな口を開けて、がぶつとかぶりついた。

『刑事は犯人逮捕のために働いてるんだろ？』

頭の中で、山川の声が甦る。

『俺の情報があれば、犯人逮捕できるかもしれないじゃん』

胸が、渦を巻くかのようにムカムカした。

熱いドリアを夢中で掻っ込む。

「ヨーコ、口のなか火傷するよ？」

ザザが面白そうに声をかけて、ミネラルウォーターのボトルを置いた（大根の段ボールの上に）。

口をドリアで一杯に膨らませたまま、ヨーコは軽く会釈して『ありがとうございます』を表現する。

そして、ドリアと胸の苛立ちを流し去ってしまうかのように、ボトルの水を飲み干した。

その時。

「あつー！！」

ザザが大きな声を上げた。「ごめん、その水5年前のだ！地震に備えて買ったやつ」

…思わずヨーコが吐き出してしまったのは言うまでもない。

*

「明日は、とりあえず署に顔出さなきゃね」

掃除しながらザザが発した言葉に、ヨーコの体がビクツと震えた。

ザザは汚れた雑誌の束を丸めて、ポイツと奥に放り投げる。

こうして、彼女の部屋は汚れていくのだ。

「ヨーコは、行くの辛いだろうけどさ…また新しく始めなきゃ、何にもならないからね」

「…」

雑巾を絞りかけたまま、ヨーコはうなだれ、呟いた。「ダメなんです」

「え？なんで」

「岩波さんが…『辞める決心ができたら』戻って来いって…」

岩波の言葉が、思い出す度に彼女からエネルギーを吸い取っていく。

「行っても、クビになるだけですっ…」

一瞬の沈黙。

「そうだねえ」

ザザはあっさりと答えた。「でもさあ、行かなかつたらどうするつもり？」

「…」

「一生、この部屋でウジウジしてる訳？」

「そんな…」

「それが嫌なら、行きなさい」

キツパリとザザが言った。「クビならクビ、新しい仕事探さなきゃ。

この世の中はね、モケーツとして暮らしてけるほど甘くはないよ」

「…」

「それに」

ザザの声が少し優しくなる。

「佐倉長官に、謝って来なきゃ」

本町署の、長い一夜が明けた。

デスクに頭をつき、タバコを片手にしたまま、岩波はウトウトと眠っていた。

「岩波刑事」

角川がそつと声をかける。「岩波刑事。朝ですよ。交代ですよ」
が、岩波は動かない。

右手から、タバコがポトリと落ちた。

「うーん…」

困ったように角川は頭を掻いた。

耳元で怒鳴るか、思いっきり揺すぶれば起きるのは分かっている。

ただ、そんなことをして、もし彼の機嫌が悪くなったら…！！

あまりの恐ろしさに、思わず角川は震え上がった。

どうしようか。

このままでは埒があかない…

「私に任せて」

筑摩麗奈が進み出た。

40代も半ばになるうという彼女は、ふっくらとした中にも色気を
感じさせる女性だ。

スーツから出ている淡いピンクの襟立と、12センチはあろうかとい
う高いヒールが特徴で、男性刑事からは「マドンナ」と呼ばれて
いる。

仕事はテキパキこなすベテランで、昇進するのも時間の問題だとい
う。

そのマドンナが、角川に微笑みかけた。

「私に任せて」

「しっ、しかし…」

角川は口籠もる。

寝起きの岩波は、恐ろしい。

誰彼かまわず怒鳴り付ける。

もし、マドンナがそんな目にあつたら…!!

「いえ、僕がやります」

勇気を奮い起こして、角川が告げた。

「大丈夫です！」

「ダメよ、いいから私に任せなさい」

マドンナも譲らない。

「遠慮しないで。ねっ？」

美しい女性に「ねっ？」なんて言われてしまうと、どうしてもデレツとするのが男という生物である。

「あ、じゃあ…お願いします」

角川がポーツとしながら身を退いた。

マドンナはニッコリ笑い、岩波に近寄つた…。

「おきなさあああい!!」 署の窓ガラスがビリビリいう。

バツコーン!

マドンナが手にしていたファイルが、岩波の背中を容赦なく襲つた!
「いてええっ!!」

岩波が跳ね起き、大声を上げる。

「だれだっ、俺を殴りやがったのは!!」
相当キレている。

角川は怖気付いて、2、3歩下がった。

こんな岩波とは関わらない方がいい。

「おい誰なんだ、ああ!？」

岩波がわめき散らす。

誰もがすくみあがつた、その時だった。

「あら岩波さん、誰に対して口きいてらっしゃるのかしら?」

マドンナが静かに笑った。「あなたが、いくら声をかけても起きなかつたのが悪いのよ?」

「れっ、麗奈…」

岩波が驚愕し、顎が外れそうなほどポカンと口を空けた。

「何か文句ありませんか？」マドンナがズツと岩波に詰め寄る。

「な、ない…お前に文句なんてある訳ないだろう！」美しい人に責められ、岩波がモゴモゴいう。

「そう。じゃあ良かったわ。交代ですつてよ」

マドンナが微笑みかけた。誰もが悟った。

…岩波よりも、マドンナの方がある意味おっかない。

「…おはようございませす…」

小さな声がした。

全員が、入り口をパツと見つめる。

捜査室のドアが若干内側に開き、黒髪の女の顔が、ちょこんと覗いていた。

「ほら、早く入んなよ」

後ろから声がかして、ヨーコの身体はポン、と捜査室に突き入れられた。

後ろにはザザがあくびをしている。

「桐原さん…！」

角川が歓声を上げた。

「良かった、戻ってきたんです、ね…」

しかし、その声はだんだん小さくなっていった。

まわりの刑事たちがヨーコに注ぐ、厳しい視線に気付いたからだ。

「…あのっ」

震える声で、ヨーコが頭を下げた。

「昨日は…本当に、申し訳ありませんでした…！！」しん、と静寂が張り詰める。

遠くでバイクが走り去る音がした。

「…許して貰える筈がないのは、判ってます。ただ、私は、ただ…」
ヨーコの肩が泣きそうにピクツとした。

「…申し訳ありませんでした」

ひたすら頭を下げるヨーコ。

垂れ落ちるミディアムの髪で見えないが、恐らく、恐れと緊張に満ちた表情をしているのだろう。

角川はとつさに、走って行って慰めたい衝動に駆られた。

「…桐原さん」

マドンナが口を開いた。

さっきまでの甘い声は、冷徹なものに変わっている。

「あなたがしたことは、決して許されないわ」

「…はい」

筑摩麗奈が静かに続ける。「佐倉長官が、夜中に倒れたの」

「…!」

ハッ、とヨーコは顔を上げた。

「心労が溜まつていたのに、捜査の最前線で眠らずに働いたのが原因。今は、病院で休んでるけれど…」

ヨーコは、ナイフで全身を斬り付けられたかのように感じた。

その灼熱の痛みは、目の前を真っ暗に染めていく。

私のせいだ。

私のせいで、佐倉長官は…

泣きだしたくなるのを、ヨーコはグッと堪えた。

「…私は、どうしたら良いですか…?」

「知らないわ、そんなの」麗奈がにべもなく言った。「自分で考えなさい」

真っ暗な世界。

また、目が潤み始める。

捜査室が涙の歪みの中に消え去る前に、ヨーコはそこを飛び出した。

「ヨーコ!」

ザザが叫んだ自分の名前だけが、聞こえる全て。
階段を駆け降り、無我夢中で走る。
署の入り口ホールを走りぬけながら涙を拭う。
何も聞こえない。
何も感じない。

私は、本当に、刑事失格：

ドンッ。

何かに正面からぶつかり、ヨーコは道に倒れこんだ。目の前に、汚れたスニーカーが現われる。

「どこ見て走ってんだよ。失格刑事」

聞き覚えのある声。

「…?」

ヨーコは、見上げた。

風ざわめく街路樹の下。

最初に出会ったのと、同じ場所。

山川圭司が、立っていた。

「どこ見て走ってんだよ。失格刑事」

風が吹き過ぎていく。

街路樹の葉が、サヤサヤと鳴る。

黒のミリタリーコート。

切れ長の目元。

山川圭司が、立っていた。

「何よお…」

ヨーコがべそをかく。

「今更…何しに来たのよお…」

「手錠返しに来た」

山川が右手を突き出した。手のひらに、ヨーコの手錠が載せられている。

そういえば、山川を捕まえた時、たしかに手錠をかけた。

しかし、昨日の昼にザザの部屋に現れたとき、彼の手に手錠はなかった。

「どうやって外したの？」ヨーコが聞く。

「あ？ああ、俺のダチに頼んだんだ。30秒もかからなかったぜ」

…ダチ！？

あんたみたいな輩が、他にどれだけいるってのよ！

ヨーコは叫びたくなったが、山川を睨み付けるだけで終わった。

「また泣いてんの？」

山川が面白そうにヨーコの顔を覗き込む。

「顔ぐちゃぐちゃ。…あ、元からか」

パッコーン。

ヨーコのパンチが山川の太ももに発射された。

だが、山川は動じない。

からかいの言葉を投げ掛ける。

「こんな朝から泣いて出てきたってことはあ、もしかしてえ…アレかな？クビ？とか」

「うっさい。あなたには関係ないでしょ」

ヨーコは立ち上がった。

山川に見下ろされるのは、なんだか癩だ。

「まだクビじゃないわ」

「『まだ』か。じゃ、もうすぐだな」

「うるさいって言ってるでしょう!!」

ヨーコは叫び、山川から手錠を奪うように取り返した。

「なんだったら、今この場で逮捕してあげるわよ」

「あー、それは勘弁だな」山川がとっさに逃げ腰になった。

「俺、捕まる訳にはいかないからさ」

誰だってそうだろう。

ヨーコはガクツとして、手錠をシャネルのバッグにつっこんだ。

「あれ？捕まえないの？」山川がおどける。

「…もついいわよ」

ヨーコは面倒臭そうに言った。

「早く私の前から消えて。あなた、私の疫病神みたいだから」

「うわ、失礼だね」

山川が笑う。

「ま、捕まらないなら俺はいいんだ。もう用はない」ミリタリーコートが風にゆれた。

「じゃあな、失格刑事」

山川が背を向けた。
土にまみれたスニーカーが、歩み始める。

ヨーコはその後ろ姿を見つめた。

これで良いのだ。
本当に…

『刑事って、犯人逮捕のために働いてんだろ？』

山川のセリフが、頭の中に渦をまく。

『佐倉長官が倒れたの』 『心労が原因よ』

ヨーコは、立ち尽くしていた。

私は、失格刑事…。
でも。

まだ、刑事。

今なら、まだ間に合うんじゃない？？

刑事としての正義を、守り通せるんじゃない？

… 『自分で決めなさい』

「待って!!」

叫び声がした。

山川は足を止め、振り替える。

涙に濡れた目をして、ヨーコが呼んでいる。

「待って!!!」山川は、手をコートポケットに入れ、ニッと笑った。

「なあに？失格刑事のヨーコちゃん？」

「バカにしないでよお……」ヨーコが膨れながら、また涙を流す。

「あんたの取り引き。…受け入れるから……」

風が吹く。

時に強く、時に弱く。

「きまりだな」

山川が笑った。

「よろしく、ヨーコ」

その声は、風と共に、優しくヨーコの耳に届いた。

まるで、待っていたかのような響きだった。

「なあ。ホントに逮捕しないんだろっな？」

川のそばの道を並んで歩きながら、山川が聞いた。

「事件解決しちまってから、『やっぱり逮捕する』ってのは無しだぞ」

「わかってるわよ……」

答えながらも、ヨーコは内心ドキッとした。

まさに凶星。

有力な情報を吐かせたら、その場で手錠をかけてしまおうと思っていたのだ。

「あ、そう。じゃあ信用する」

山川があっさりと納得したので、ヨーコはホッとした。

「ところで、ヨーコが関わってたのはどういう事件なんだ？」

山川が空を仰ぎながら言う。

「えっ……」

ヨーコは口籠もった。

…刑事には、守秘義務がある。

事件の内容や捜査の進行状況は、「上」の命令がないかぎり、口外してはいけないのだ。

「だめ。あなたには、教えられない」

ヨーコはキツパリと言った。

「私は情報を守らなきゃいけない。

ましてや、あんたみたいな泥棒に話すなんてもっての他……」

「じゃ、俺も話さない」

山川がすかさず返した。

「なーんにも教えない」「どうして？」

ヨーコは怒った。

「約束じゃない、捜査に協力するって!!」

「捜査に協力するには、まずその事件を知つとかなきゃな」

山川は、川辺の澄んだ空気を吸い込むかのように腕を広げて伸びをする。

「そつだろ？ヨーコ」

「ヨーコヨーコって呼び捨てにしないで!!」

「はいはい」

青年は面倒臭そうに笑った。

「じゃ、桐原サン」「…」

「教えてもらおつかあ？その事件についてッ」

バシーン!!

ヨーコの平手がクリーンヒットした。

*

それは、一昨日の夕方のことだった。

佐倉文春は、新品のランドセルをカタカタ言わせながら、この川べりを走っていた。

急いでいる様子で、あどけないこめかみからは汗が滴っている。

「ふみはるー!!」

声と共に、前方からもう1人少年が現れた。

ジャイアンツの野球帽を被っている。

「おせえぞー!」

「今行く!!」

文春はハアハアと息を切らしながらも、目を輝かせていた。川の土手を駆け登る。

途中、草に足をとられてつんのめったけれど、軽やかに登っていった。

傍でモンシロチョウが輪を描いて飛び回る。

「みんな待ってたんだぜ！」

野球帽の少年が、文春を迎えながらニツと笑う。

「ありがとっ」

文春もニツコリし、早速ランドセルを草むらに放り投げた。

ランドセルの蓋が空き、計算ドリルがはみ出た。

が、少年達はそんなこと気にしない。

キャツキャツと声を上げながら、仲間達の元へ走っていった。

澄み渡った青空。

白い花びらが、どこからか舞い落ちる。

カキーン！

小気味よい音が響いた。

グリーンのTシャツを着た少年が、グツとガッツポーズを決める。

「やりましたっ、球はどんどん飛んでいく…ホームランッ！！」

野球解説者になりきったかのように、少年ははしゃぎまわる。

青空に映え、白い球は花びらのようにゆっくりと落ちていく。

そして…

「あーっ！」

球は、背の高い川辺の葦の中に見えなくなつた。

「あーあ。飛ばしすぎたよ亮太」

ジャイアンツ帽の少年が言った。

「残念っ。ファウルです…」

実況を続けながら、亮太がガクツとうなだれる。

「困ったなあ。球、あれしかないんだよ」

別の少年が泣きそうな声を上げた。

「ママから貰った、プレゼントだったのに…」
「うっ、うめんなー!」

亮太が慌てた。

「まさかあんなに飛ぶとは思わなかったんだ」

少年は、今にも泣き出しそうだ。

顔がくしゃくしゃになっけいく…。

「ぼく、とってくるよ」

声を上げたのは、文春だった。

「ママからもらったんだろ?」

半べその少年が、こくと頷く。

「待ってて」

ニッコリ笑うと、文春はミットを持ったまま、川辺に駆けていった。

まもなく、その姿は葦原の中へ消える。

「なかつたら無理すんなよー!」

ジャイアンツ帽の少年が叫んだ。

「わかつてるー!」

遠くから、文春が答えるのが聞こえた…

…これが、文春が目撃された最後だった。

少年達がいくら待っても、文春は戻ってこなかった。しびれを切らした彼らは、そろって葦原に探しに行った。

しかし、そこで見つけたものは、文春のミットだけだった。

少年の姿は、どこにも無かった…。

その夜。

不安に包まれる佐倉長官の元に、一本の電話が入った。

公衆電話からの着電。

「…もしもし」

震える声で、佐倉長官は受話器をとった。

「もしもし。文春!？」

しかし、聴こえてきたのは、変声機を使った、低い男の声だった。

『佐倉長官か?』

「…だれだ」

佐倉は受話器を握りしめた。

「だれだ!？」

『文春くんは、預かったよ』

男が、楽しそうに告げる。「!!」

佐倉の目が、大きく見開かれた。

『いい子だねえ。ホントに大人しくしてくれてるよ』「…だれだ!

!今、どこにいる!？」

佐倉は思わず大声を出す。が、犯人は冷静に笑うだけだった。

『まあまあ、落ち着いて。まだ、文春くんに手出しはしないからさ』

「おまえ…」

『ま、そういう事で。また明日かけるわ。』「待て!!文春を返せ

!!」

『次の電話は、明日の朝、6時前に。んじゃねっ、長官!』

ツー、ツー、ツー…

佐倉は、青ざめて立ち尽くした。

恐ろしい予想は、現実と化した。

文春が、危ない…!!

佐倉家の電話には、簡単な逆探知機能がついている。犯人からの電話は、武蔵野市内からだとわかった。

そこで、武蔵野中の警察が公衆電話に張り込み、次の電話を待っていたのだ。

そして、あの致命的なミスは起こった…。

「犯人は、今日の夕方、井の頭公園に5千万持ってくるところを要求したわ。」

ちようどその時…あんたが私のバッグをひったくったのよ」

ヨーコが話し終えた。

「…」

山川は、腕を組み、黙って聞いていた。「さあ、私はちゃんとな部話したからねっ」

ヨーコが山川を睨み付ける。

「今度はあんたの番よっ」が、山川は答えなかった。切れ長の瞳は、川の土手に注がれている。

「文春くんがいなくなったのは…あの辺かな？」

呟くと、山川は葦原に向かって歩きだした。

「ちよつと！待ちなさいよ！」

ヨーコが慌てて後を追う。「あんた犯人見たんでしょ！？ちゃんと教えてよ！」「あとでな」

山川は、ずんずん歩いていく。

とうとう、葦原の中に見えなくなってしまった。

…逃げようだったって、そうはさせないわよ！！

ヨーコも負けじと葦の藪の中に潜り込んだ。

目の前に広がる、葦、葦、葦。

掻き分けても掻き分けても、同じ。

葦の他には、何も見えない。

山川の気配も感じられない。

まさか、本当に逃げ出したんじゃない？

不安に駆られた、その時だった。

ふいに、鼻が白い布で覆われた。

「!!」

振り払おうとするが、できない。

「んっ!」

頭を押さえ込まれ、動くことができない。

葦が、風に揺らいだ…。

風がそよぐ。

鼻に当てられていた白いハンカチが、ふいに取り払われた。大きく息を吸い、ゲホゲホと咳き込む。

ヨーコは、葦原の中に膝をついていた。スーツに泥が染み込んでいく。

「ごめんごめん。びっくりした？」

背後からかけられた男の声。

山川だった。

ヨーコの背が震えた。

「何するのよ……」

呟く声が、妙に低い。

「桐原さ……」

「何するのよ……」

叫ぶように、ヨーコが振り返った。

顔は蒼白で、目がぎらぎらと光っている。

「窒息しちゃうじゃない！私を殺そうとしたの！？」「いや、そんなつもりじゃ……」

「じゃあ何なの……」

彼女が詰め寄った。

「いきなり後ろから襲い掛かったりして……」

「それは……」

「だから犯罪者は信じらんないのよ！」

こうやって再犯を繰り返すんだから！」

ヨーコはサッと手錠を取り出した。

山川が一瞬ひるむ。

「殺人未遂よ。今度こそ逃がさないから！」

「お、おい！」

山川が慌てて逃げ腰になった。

「殺人未遂なんかじゃねえよ」

「じゃ、何だつて言うの？」

今やヨーコの目はららんと光り、逮捕への欲望に燃え盛っている。

「…実験さ」

山川が答えた。

「実験？」

ヨーコが青年を睨み付ける。

「何言ってるの？」

私を窒息させて、何の実験になるっていうのよ」

「いいから聞いてくれ」

山川が言った。

「聞けないわ」

すかさずヨーコが答える。「犯罪者の言い訳聞いている暇なんてない

のよ、残念ながら」

そのまま、手錠を持った腕を前に突き出す。

山川が同時に一歩後退した。

「誤解なんだ」

山川が必死に言う。

「俺は桐原さんを殺そうなんて、ちっとも…」

「じゃあ何であんな真似したの！」

「だから、実験だつて！」、「何の実験よ！」

「文春くんの動きの実験だよ！」

「…」

ヨーコが黙って、じっと山川を見つめた。

文春の名が出て、興味をそそられてしまったのだ。

「…聞いてくれる？」

ヨーコの様子を見て、青年が呟いた。

「文春くんは、葦の茂みに入った後、行方がわからなくなった。そうだよな？」

山川に不信の目を向けながら、ヨーコが答える。

「警察は、茂みの中に犯人が隠れていて、そこで文春くんを誘拐したと考えただろ？」

「そうよ」

「警察はこの茂みをくまなく調査した…間違いはないな？」

「そうよ」

「だが、警察は何の手がかりも得られなかった。そうだな？」

「そうよ」

面倒臭そうにヨーコが言った。

「そんなこと聞いてどうするのよ？」

「警察は大事な点を見落としてる」

山川が落ち着き払って言った。

「文春くんは、ここで誘拐されたんじゃない」

「！」

彼は、足早に歩き始めた。慌ててヨーコが後を追う。ぬかるみに足をとられて、転びそうになった。

山川は少し歩いて立ち止まり、振り返る。

「桐原さん。うしろ」

つられて、ヨーコは後ろを向いた。

もちろん、逃げられないように山川のコートの端を掴んだまま。

背後には、小さく空間が広がっていた。

周囲には葦が直立しているというのに、そこだけポツカリと開いて

いる。

その部分の葦は、無惨にも薙ぎ倒されていた。

「あれは…」

ヨーコが呟く。

「俺が、桐原さんに“実験”した場所だよ」

山川が答えた。

「葦は、弱いから簡単に倒れてしまう。」

あそのこの空間は、桐原さんが暴れて葦を倒したから出来たんだ」

山川が説明する。

「ナニよそれ」

ヨーコが膨れた。

「暴れたって…あんたが私に襲い掛かったんじゃない！」

誰だって、後ろから口を塞がれれば逃れようともかく。

それを「暴れた」と言われたことに、またヨーコはカチンときていた。

「で？私が葦をなぎ倒した、それが何だっていうの？」

「事件直後、こんな風に葦が倒れてる場所があったかい？」

山川が微笑んだ。

「あ…」

ヨーコはハツとした。

確かに。

たしかに、そんな報告は無かった。

もし、文春くんが襲われたら、必ず跡が残る…

でも。

「文春くんは、まだ6歳よ。大人に襲われたら、葦を倒すほどには

抵抗できないわ」

「取り押さえようとした犯人だって、多少は動き回るはずだ」

山川は落ち着いていた。

「ところが、土手から見たところ、この葦原にはこんな空間は無かった」

「じゃ、じゃあ…」

ヨーコは必死に頭を働かせていた。

「文春くんは、ここで誘拐されたんじゃない…でも、どこで…?」

「川、だろうな」

山川が言った。

「きつとボールを追って葦原を抜けたんだ。そして、川に出た」

この川は幅が広い。

しかし、比較的浅いので、簡易ゴムボートでもあれば、すんなりと渡ることが出来る。

「文春くんを乗せて、ボートで移動したんだ。」

それ以外に、野球少年たちに見られることなく葦原を抜ける道はない

「つまり、一昨日川にボートが出ていた…」

ヨーコが呟いた。

「目撃証言がとれるかもしれないわ!!」

「そーゆーことっ」

山川が笑った。

ヨーコは、改めて青年を見つめた。

…すごい。

そう思ってしまったのだ。

しかし、まだまだこれからだ。

山川には肝心の情報を吐いてもらわなければならない。

ヨーコは、気を引き締めるように胸を張った。

「証言。とりに行くわよ」「おう」

風が、やわらかに吹いていた。

日差しが肌を刺す。

白いレースの日傘の影から顔を出し、光のあまりの強烈さに目を細める。

筑摩麗奈は、その凜とした表情で、池を眺めていた。水面を切るように、カモの親子が泳いでいる。

「カモ食べたいなあ……」

彼女が呟くと同時に、お腹がグウツと鳴った。

もちろん、後ろに控えていた若年刑事たちに聞こえるはずはない。

彼らは、マドンナの肌が日の光に白く輝くのを見て、うつとりしていた。

ここは、井の頭公園の池のほとり。

休日ということもあり、お花見客で辺りはごった返している。

酒とタバコの強い匂い。

陽気な笑い声。

舞い落ちる花びら。

しかし、マドンナはそれらのものに全く興味を示さなかった。

昨日の夜から、カップ麺しか口にしていない。

空腹は我慢の限界だ。

美しい表情からは想像もつかないが、彼女はイライラしていた。

基本的に、お腹が空くと気が短くなる質なのだ。

イライラを募らせながら、池の反対側に目を移す。
そこには、目立たない赤い鳥居が何本か立っている。

犯人が現れる予定なのは、夕方だ。
少なくとも、あと5時間はある…。

マドンナは、漂ってきたお弁当の匂いに顔をしかめた。

…我慢、我慢。

空腹を忘れるため、彼女はひたすら事件に思いを馳せた。

犯人と接触できる最後のチャンスが、身代金の受け渡しだ。
夕刻、犯人は対岸にある稲荷にやってくる。

そこで、身代金の受け渡しが行われるのだ。

刑事たちは稲荷の周りに張り込んでいる。

合図があれば一斉に被疑者確保に動く予定だ。

念のため、不審な動きが無いか、朝から稲荷を見張っている。

…あの新人が、ミスさえしなければ…。

マドンナはイライラと考えた。

…そしたら、今頃には文春くんを保護できていたかもしれないのに
！！

彼女の頭の中は、ヨーコへの怒りで一杯だった。

そんなマドンナの様子を見て、また刑事たちは見とれていた。

*

「文春くんが、葦原で捕まったんじゃないってことは、わかったわ」
土手を登りながら、ヨーコが言った。

「ボートで連れ去られたかも知れないってことも。でも…」
前を登っていた山川が、振り返った。

「なんか腑に落ちないのか？」

ヨーコは頷いた。

二人は、川を見下ろす遊歩道に出た。

蝶がひらひらと雑草の周りを舞っている。

「犯人は、文春くんが川までやってくるとは知らなかった筈なのよ
ヨーコが考えこみながら喋った。

「ボールを取りに行くのは、他の子かもしれなかったわ。

ううん、もしかしたら、どの子も川に近づかなかったかも知れない。

…それなのに、どうして犯人は川辺で待ち伏せしてたのかしら？」

山川が肩をすくめる。

「知らねっ」

「ちよっと、ナニよその反応は！」

すかさずヨーコが怒った。「ちゃんと答えてよ！」

「知らないことに、どーやって答えんだよ」

山川がジロツとヨーコを睨んだ。

「あのなあ。俺が何でも知ってるんでも思ってるのか？」

「だって同じ犯罪者じゃない」

ヨーコが言い返す。

「同業者なんだから、私よりわかるでしょ」

「俺は誘拐犯じゃねえからな」

山川が、道端の小石を蹴った。

石はコロコロと転がり、草むらの中に消えた。

「なんでガキなんか攫うのかなんて、理解不能だし。お前と同じで
さ」

「…」

ヨーコは肩を落とした。

この男、本当に役に立たない！！

「行くうぜ」

山川が言った。

「証言。とるんだろ？」

そのままスタスタ歩きだす。

「ま、待ってよ！」

ヨークは慌てて追い掛ける。

が、ふと思っってしまった。

…こいつに主導権握られてるような気がするのは、気のせい！？

「被疑者から着電！」

突然声があがったのは、正午の時報と同時だった。

「出る！」

一声怒鳴ると共に、岩波は電話をオンフックにした。中年刑事の一人が、パツと受話器をとる。

部屋中の刑事たちが、その周りをざっと取り囲んだ。「…もしもし。

本町署の川出だ」

『オレだよ』

変声機を使った、太い声が部屋中に響いた。

『今日の約束。覚えてる？』

「もちろんだ」

川出が答えた。

「夕刻、井の頭公園の稲荷に5千万。そうだな？」

『うん。オーケー』

楽しむように、犯人が笑う。

『じゃ、よろしくー』

「待て！」

川出が叫んだ。

その目が、岩波をとらえる。

岩波が、頷いてみせた。

川出の目が、頷き返す。

『なに』

犯人の、少しイラついた声がした。

「…文春くんは、無事か？」

川出が聞いた。

『今はね』

犯人が笑った。

『用がなくなったら、そのうち返すよ』

「そのうち？身代金を渡したら、すぐにでも文春くんを解放しろ！

！」

『黙れクソ野郎！』

犯人が怒鳴った。

部屋が、しーんとなった。『ナメてんじゃねえぞコラあ』

完全にキれている。

『命令しやがつてよお、刑事さん。』

あのガキヤまだこっちの手中にあるってこと、忘れんじゃねえぞ

！』

ブチッ。

電話は切れた。

刑事たちは、呆然として突っ立っていた。

最悪の予感が、嵐のように部屋を駆け抜けていった。

「ご協力ありがとうございました」

玄関ドアを丁寧に閉める。ニッコリしていたヨークの表情が、とたんに崩れ去った。

「次行くわよ」

呟くと、バッグを肩に掛けなおして歩きだす。

山川が、のらりくらりとそれに従った。

もう、何件目だろう。

ヨークは、頭の中で数えなおしたが、すぐに断念した。

あれから、川辺に並び立つ住宅を一軒一軒まわってきた。

遊歩道から振り返ってみれば、やってきた道のりは果てしなく視界の先まで伸びている。

何軒回ったかなど、覚えていられる訳が無い。

「収穫なし、か」

呟いて、時計に目を移す。ちょうど正午だった。

まだ、夕方まで時間がある。

何とかそれまでに被疑者と接触しなければ…

ヨークは唇をきゅっと結んだ。

もし、それができなければ、山川と手を組んだ意味など無くなってしまふ。

山川はヨークの三步ほど前を歩いていた。

陽気に口笛を吹き続けている。

“オー!! シャンゼリゼ”だ。

そのメロディーは眼科の水面へと流れていく。

暖かい日差しと静けさの中、ミリタリーコートが僅かに揺れた。

「ずいぶん呑気ね」

ヨーコが呟いた。

口笛がとまった。

「なんか悪い？」

「悪いわよ」

ヨーコはイライラを募らせて怒鳴り気味になった。

「目撃証言はゼロ！何にも進んでないのよ？」

「それって俺のせい？」

「違うけど……」

「じゃあギヤアギヤア言うなよ。怒鳴ったって文春は助からねえんだから」

「そうだけど……」

再び、オー・シャンゼリゼが流れはじめた。

ヨーコは口をもぐもぐさせていた。

何か言い返したいけれど、言葉が見つからない。

理論的には山川が正しいのだ。

けれど、この胸のムカつきは収まってはくれない。

何か、何でもいいから、手がかりが欲しい……。

「ねえ、そろそろ教えてよ。あんたの情報」

ヨーコが静かに言った。

山川が立ち止まった。

「…守れよ？約束」

振り向きもせずと言う。

「わかってるわよ」

ヨークは答えた。

数歩あるいて、泥棒の前に出る。

「早く教えて」

覗き込むように、山川の顔を見上げた。

ヨークは、背が小さい。

スーツを着ていなければ、中学生かと思われるだろう。

だから、男としては普通の背丈の山川の顔も、下から見上げなければならぬのだ。

「お前さ」

山川が口を開いた。

ゆっくりとした言い方だ。「何よ？なんか文句あるの？」

ヨークは、山川の身長に気後れしまじと精一杯の威厳を持って睨む。

「文句じゃねーよ」

山川は少し不機嫌そうに返した。

今までの微笑みは消え失せている。

この時になって初めて、ヨークは山川の瞳の奥に潜む、冷たい光に気が付いた。

「俺が言いたいののはさ」

彼は、言葉を区切りながら、ヨークの反応をじっと見ていた。

「情報を喋って、俺が要らなくなった途端…お前が手錠を出すんじゃないかってコトだ」

ヨークは、目をぱちくりさせた。

「手錠を出す、って？」

「俺を捕まえようとするってことだよ」

明らかに、山川の口調はイライラしている。

「わかってるよな？それが取引違反だって」
「わかってるわよ！」

「じゃ、どうしてさっき手錠を出した？葦原の中で」山川の切れ長の瞳が、刺すようにヨーコの奥底を貫いた。

「あっ…あれは、その…」口籠もってしまう。

「何ていうか…刑事の本能、て言えばいいかしら？」

心臓がドキドキしている。
ばれていた。

山川には、ヨーコの魂胆が見えていたのだ。

「ほら、刑事って犯罪を見たら、すぐに現行犯逮捕しなきゃいけないでしょ？だから、あの時もつい…」

「ふーん…」

山川が、探るようにヨーコを見ている。

その眼の冷たさに、ヨーコの背筋が凍り付いた。

…どうして、そんな顔するの…？

無意識に体をふるわせながら、ヨーコは山川を見つめた。

「だ、大丈夫よ。私、絶対あんたを捕まえたりしないから。約束する…」

「本当に？」

山川が更に詰め寄ってくる。

ヨーコは、必死に頷いた…

「あ、そ。なら良いんだ」山川の表情が、フツ、と和らいだ。
日の光が柔らかく差し込んでいる。

「オツケー。じゃ、話すよ」

そう言った口元に、いつものニヤリとした笑みが戻ってきた。

…そのあまりの突然さに、ヨーコはただポカンとしてしまった。
冷や汗が、髪の中を流れ伝うのを感じる。
冷たい。

体の震えを止めようと、腕を組むふりをしながら自分をしっかりと抱き締める。

刑事としての威厳を保とうと、心が必死になっている。
怖かった。

今、この瞬間、自分は本気で山川を恐がっていたのだ。

…でも。

負けてなんかいられない。私は、犯罪者を怖く思っではいけない。
私は刑事なんだから…。

「ありがとう」

なんとか笑ってみせた。

ヨーコは手帳と百均のボールペンを取り出した。

*

それは、昨日の朝のことだった。

雫がビニール傘から次々にこぼれ落ちていく、その中で、山川圭司はただ歩き回っていた。

これといった行き先がある訳ではない。

けれど、やらなければいけない事があった。

彼の眼は素早く辺りを見回していた。

だめだ。

朝早いせいか、灰色のもやがかかった街にはひとり一人いない。

…また出直すか…。

諦めかけた。

しかし、もう少し歩き回ってみることにした。

周りに人がいない早朝は、捕まったり、目撃されたりする確立が低い、ひつたくりにとっては絶好の時間帯でもあるのだ。

雨の中を歩くこと数分。

視界のはるか先、道路の反対側に一人の女が佇んでいるのが目に入った。

スーツは、赤い傘から滴る雫にびしょびしょになっている。

おまけに、その肩にかかっているのは、シャネルのバッグだ。

…あの女、ブーツとしてるな？

山川は、彼女に狙いを定めた。

不審に思われないように、すたすたと近づいていく。

女は、接近してくる男に気付かない。

近づくにつれ、彼女の顔が見えてきた。

眠そうにため息を繰り返している。

しかし、彼女の目は、ある一点に留められていた。

古い電話ボックス。

山川が歩いている、ちょうど正面にある。

山川は、彼女の視界に入らないうちに道路を渡るうとした。その時だった。

アスファルトから湧いて出たように、突然目の前に男の体が現れた！
全身びしょびしょで、地面に這いつくばり、今まさに立ち上がるう
ところだ。

「!？」

山川は、泥棒の本能(?)でとっさに建物の影に隠れた。
そっと、顔をだして様子を伺う。

男は、灰色の作業着を着、黄色いヘルメットを被っていた。

顔にはシュノーケルのようなものをつけている。

おまけに、酸素ボンベまで背負っていた。

まるでダイバーだ。

雨の打ち付ける中、彼は立ち上がる。

その後ろには、ぽっかりと円形に開いた穴があった。穴の奥は暗く、
かすかに滝のような音がする。

マンホールだ。

山川は改めて男を見て、理解した。

…こいつ、ただ者じゃないな。

彼は、マンホールから出てきたのだった。

だから、いきなり目の前に現れたように感じたのだ。一瞬、下水道
の修理をする作業員かと思った。

が、こんな土砂降りの日に酸素ボンベまでつけて修理などするだろ
うか？

男はマンホールの蓋を閉め、辺りを見回すかのような仕草をする。

あぶねっ！

山川はあわてて顔をひっこめた。

暫く、そのまま息をひそめていたが、何事も起こらなかった。

どうやら見つからなかったようだ。

山川は建物の影から用心して出てきた。

ターゲットの女に逃げられていないか、それが不安だった。が、赤い傘の女はまだそこにいた。

相変わらず電話ボックスを見つめている。

「もしもし。ボス？」

近くで、押し殺したような声が聞こえてきた。

「あ、俺です。予定どおり、地上に上がりました」
電話をしているようだ。

山川は足音を忍ばせ、そつとまた建物の影に戻った。今動いたら、あの男に見つかる。

なぜか、見つかつてはいけないと山川は感じていた。これも泥棒の本能なのだろうか？

「それが、面倒なことになったんすよ」

男の声が流れてくる。

山川は耳をそばだてた。

「ここも見張られてるんすよ」

「！」

…ばれていたのか。

山川は一気に緊張した。

が、すぐに肩を撫で下ろした。

男は「ここも見張られてる」と言った。

つまり、他でも何物かに見張られていたのだ。

山川が見ていることを言ったのではない。

「どうしましょう。もうすぐ時間ですが…」

山川は笑いだしたくなった。

自分は何をやっているんだろう、スパイごっこみたいな真似してきつと彼は本物の作業員なんだろう。

でなければ、あんな大胆な登場の仕方はしない。

むしろ、赤い傘の女が移動してしまうのではないかということが気にかかった。

山川は、傘の雫を払って、堂々と建物から出た。

女は、まだそこにいる。

しかし、しきりに時計を見ている。

彼女が動きだすまで、あまり時間はないかもしれない。

山川は道路を渡り、更に一本裏の路地に入った。

風のように駆け、ちょうど適当なところで、また表通りに戻る。

山川がつけた見当は、バツチリと当たっていた。

ちょうど、赤い傘の女の真後ろに出ることに成功したのだ。

あとは、いつもの手順だった。

忍び寄り、ひつたくる。

それだけだった…。

*

「以上つ。あとは、お前も知ってるとおりだ」

山川が話し終えた。

ヨーコは呆然としていた。全く新しい、恐らく警察のだけれども知らない事実を、たった今掴んだのだ。

「あの男が見張られてるって言ったのは、俺じゃなくてお前に気付いたからなんだな」

山川が呑気に笑う。

ヨーコは、鳥肌がたつ程興奮しながら、頷いた。
犯人が、少しだけ、でも大分近くに感じられる。
心が沸き立つ。

私は、犯人に向かって進んでいける…！！

そんな喜びが、ヨーコの胸を熱く焦がしていた。

ヨーコと山川の捜査（？）も、いよいよ本格的になってきました！！
山川の見た謎の男。
その手がかりを得ることはできるのでしょうか！？

がぜん、やる気が湧いてきた。

ヨーコはスキップのような軽い足取りで、一軒一軒を回っていく。

「警察の者です」

「昨日ボート見かけませんでしたか？」

「ご協力ありがとうございました！」

隣の家へ。

「警察の者です」

「昨日ボート見かけませんでしたか？」

「ご協力ありがとうございました！」

隣の家へ…。

くると、次々にこなしていく。

そんな彼女を、山川は呆れて笑いながら見ていた。

さつきまでイライラしていたのが、魔法にかかったかのように消えている。

その魔法は、山川の吐いた情報がかけたのだった。

ヨーコは、心から被疑者を追い求めている。

それが例え自分の利益の為であろうと。

それが、なぜか山川には眩しく思えた。

「ご協力ありがとうございました！」

何度言ったかわからない位繰り返したセリフ。

しかし、ヨーコはめげることなく次へ次へと進んでいく。

いつの間にか、彼女は山川の数歩先をリードするように歩き始めていた。

「ほら、早く！」

ヨーコが急かす。

山川は苦笑いしながら、それに従った。

二人が立っているのは、赤い大きな屋根の邸宅の前だった。陽光に白い漆喰の壁が映え、目も眩むほどだ。

青銅の、槍が沢山突っ立っているような門を開け、敷地内に足を踏み込む。

「すげー……」

山川が声をあげた。

ヨーコも、息を呑んだ。

そこは、一面花、花、花：花の庭だった。

菜の花が風にゆれているかと思えば、バラが高貴に香る。

桜の大木から千の花びらが散っている。

チューリップがカラフルに並び、すみれや野の草が顔を出していた。小さな蜂が蜜を吸い、アゲハが優雅に舞い飛んでいる。

奥の方には、小さい噴水まであった。

白い石で彫られた子供の天使像が、溢れる水を瓶で受けとめている。

「きれい……」

ヨーコが感動して呟いた。こんなに美しい庭は、始めて見た。

あちこちに見とれてしまつて、なかなか前に足が進まない。

それを、山川がやれやれ、といった感じで後押しする。

手入れされた石畳の道を行くと、そこが家の玄関だった。

ヨーコはドキドキを抑えながら、ちよんっ、とインターホンを押した。

リンゴーン。

まるでヨーロッパの鐘のようなチャイム音だ。

ヨーコは服の泥を出来る限り払い、背筋を伸ばして応答を待った。

『……はい』

女の声が出てきた。

「あ、突然のところ申し訳ありません」

ヨーコは丁寧に挨拶する。「わたくし、吉祥寺本町署の桐原と申します。」

少々お時間を頂けないでしょうか？」

『警察の方ですか？』

女の人は、少し驚いたようだった。

『今行きますので、少々お待ちくださいね』

通話は、そこで切れた。

ヨーコは花の香を胸いっぱい吸い込み、ふうつと吐き出す。

そして、思い出したかのように後ろにいた山川を振り返った。

「ほらっ、コート脱いでっ」

「え？」

「コート脱いでっ。こういうお家に入るときは、そういうのが礼儀でしょっ」

「そうなの？」

「そうなのよ！」

ヨーコのイライラが、一瞬だけ復活した。

山川は渋々ミリタリーコートを脱ぎ、腕に抱える。

直後、ガチャツと音を立てて木製の重そうなドアが開いた。

「お待たせしました」

現れたのは、純白のワンピースに身を包んだ、背の高い女性だった。長いストレートの黒髪は背中までまっすぐに伸び、ワンピースの胸元にはキラキラと白く輝く輝くペンダント。シンプルな彼女の出で立ちに、またもやヨーコは見とれてしまった。

「おい、挨拶」

山川が後ろから小声で突つつく。

ヨーコはそれで我にかえた。

「私、吉祥寺本町署の桐原と申します」

警察手帳を見せる。

「吉祥寺？」

女性は意外そうにヨーコを見た。

「どうして、吉祥寺の刑事さんがここに…?」

「一昨日、この川で誘拐事件が起きたんですが、何かご存知じゃないかと思つて。一軒ずつお伺いしてます」

ヨーコが微笑みを見せる。「本当は私達の管轄地区ではないのですが、署が連携して捜査しているんです」女性は、納得したようだった。

ヨーコは更に質問する。

「一昨日、川で不審なボートを見かけませんでしたか?」

「ボート?」

「ええ、ボートです」

ヨーコが答えた。

「この川でボートに乗る人は、あまりいませんが…」女性が首を傾げた。

「一昨日…何時ごろでしょう?」

「三時前後です」

ヨーコが答えた。

「ごめんなさい。私、その時間は外出してまして…調布に居りました」

「そうですか…」

ヨーコは少し落胆した。

けれど、また胸を張りなおす。

…ここがダメでも、次がある!

その時、女性が何か思い出したかのように目を見開いた。

彼女の唇がわずかに開く。「あの…」

「何でしょう!?!」

ヨーコはビクツとした気持ちをあわてて抑えた。

冷静に続きを促す。

「ボートは見ていないのですが、おかしい男の人は見ましたわ」女性が言った。

「おかしな…男の人？」

「ええ。1週間ほど前ですが、うちに来たんです。酸素ボンベを貸してくれないかって…」

「酸素ボンベ!？」

ヨーコは、思わず山川と目を合わせた。

山川が目丸くしている。「私の弟が、よく沖縄でダイビングするんです。」

だから、家には酸素ボンベがありました。

でも、どうしてもそのことを知ったのか…」

女性は、不安そうだった。声が震えている。

「その時はお断わりしたんです。」

それが、3日前に急にボンベが無くなってしまって。弟は沖縄には最近行ってませんし、盗まれたのかと…」

「そうですか…」

ヨーコは内心ガツポーズをした。

何かがわかりそうだ。

そんな予感がする!!

「もう少し、お話を聞かせて頂けますか？」

静かに興奮しながら、彼女が言った。

「どうぞ」

その女性は、ヨーコと山川を、日の当たるリビングルームへと案内した。

吹き抜けの天井から白木の床までをつなぐ、一枚の大きな窓ガラス。その向こうに、春の花々が風に揺れているのが見える。

二人は、窓際のテーブルを勧められた。

古いテーブルで、脚はロココ風に優雅にうねっていた。

ヨーコも山川も、妙に縮こまりながら並んで席についた。

白いワンピースの女性は、ペンダントをキラキラさせながら紅茶を運んでくる。カタン、と小さく音を立ててテーブルに置かれたのは、ウェッジウッド製のカップだ。

「申し遅れました。わたくし、佐藤ユリアと申します」女性が軽く頭を下げながら言った。

「よろしくお願ひします」ヨーコも倣って頭を下げる。

山川が無遠慮にキョロキョロと周りを見回しているの、ヨーコはテーブルの下で彼の足を踏ん付けた。

「いってっ……」

山川が上げた声に、ユリアが不審そうな目を向ける。「ごっ……ごめんなさい、この人、あまりこういう場に慣れてなくてっ」「

急遽、ヨーコが笑ってごまかす。

「新人刑事さんなんですか？」

ユリアがしげしげと山川を見るので、ヨーコは気が気ではない。

「え、ええ。山川圭司といいます。」

これからビシバシ教育するつもりなんですよ」「

「そうなんですか」

ユリアが軽く微笑み、二人の向かい側に腰掛けた。

まさか、目の前にいる男が犯罪者だと知ったら、彼女は卒倒するだ

ろう。

「では…」

一口紅茶をすすり、ヨーコが切り出した。

「お聞かせ願えますか。例の男のこと」

「はい」

ユリアが頷いた。

「訪ねてきたのは、30代くらいの男です。中肉中背で、キャップを被って、マスクをしていて…とにかく、顔はよく見えませんでした」

「そして、酸素ボンベを要求した。そうでしたね？」ヨーコが確認する。

「ええ」

女性が頷いた。

ストレートの黒髪が、サラリと揺れる。

「先ほども申しましたように、その時はお断わりしました」

「その男は、どうしてここに酸素ボンベがあると解ったのでしょうか？」

ヨーコがもう一口紅茶を飲んでから聞く。

「わかりません…」

ユリアが顔を曇らせた。

「弟さんの知り合いでは？」

山川が口を挟む。

しかし、ユリアは首を振った。

「一応聞いてみましたが、弟も知らない…」

「そうですね」

沈黙が流れた。

ヨーコは、ダージリンを飲み干した。

ふいに山川が立ち上がった。

紅茶には全く口をつけていない。

「どうしたの？」

ヨーコが訪ねる。

山川は答えず、ずっと漆喰の壁ぎわに寄っていく。

そこには、見事な写真の数々が飾られていた。

深いコバルトブルー、鮮やかなアクアブルー！

さまざまな“青”の中を、人間が泳いでいる。

何の重力制限も受けないその様子は、まさに自由そのものだ。

色とりどりの南国の魚たちの写真もある。

大きく成長した珊瑚の写真もある。

どれも、まるで竜宮城のような美しさだ。

「弟さんが撮られたんですか？」

ヨーコが見とれながら聞いた。

「ええ、ダイビングした時に」

ユリアが微笑む。

「二階には、もっと飾ってあるんですよ。ご覧になりますか？」

「ぜひっ」

ヨーコが子供のように目を輝かせた。

「では、参りましょうか。山川さんもどうぞ」

ユリアが天使のような美しい表情で勧める。

しかし、彼は写真を見上げたまま、動かなかった。

「いや…俺はまだここにいる…」

何かに魅せられたように、じっと見つめている。

「山川さん？」

怪訝そうにユリアが声をかけた。

「いいですよ、あんなやつほっといて」

ヨーコが山川を軽く睨みながら唇を尖らせる。

「勝手にさせときましょっ」

ユリアはいいのだろうか、という表情で山川を見た。が、気を取り直したかのように笑った。

「行きましょつか」

急な螺旋階段を上りつめると、ユリアは息を切らしているヨーコを導いて、廊下の一番奥まで歩いていった。

「桐原さん、大丈夫ですか？」

涼やかにユリアが訪ねる。ヨーコは何とか笑ってみせた。

「は、はい…いつも、こんな急な階段、登って、らっしゃるんですか？」

「毎日のことですから。慣れました」

「そ、そうなんですか…」たどり着いた部屋の扉を開く。重々しい鉄の扉。

なんだか、階下のメルヘンなつくりとは随分違う。

「ここが、コレクションルームなんです」

ユリアが言った。

「高価なものも置いてあるので、少々大きさにセキュリティをかけているのですが…」

まるで、家にこんなおどろおどろしい部屋があることを恥じているようだった。「でも、羨ましいですよ！コレクションとか、海の写真を飾れる部屋があるなんて…私も、こういう家に住みたいなあー」

ヨーコは瞳をキラキラさせた。

その反応に、ユリアも照れくさそうにほほ笑み返す。「じゃあ、入りましょうか」

その白い手が、鉄の扉を押し開けた。

窓ガラスの外で、太陽が陰ったのだらう。

ふいに目の前がすうつと暗くなり、山川は我に返った。

どれくらい長い間、この写真を見ていたのだろう。

コバルトブルーの海に浮かぶ人影。

本格的なダイバーなのだろう。

足ヒレ等の装備品はブランドのものだ。

山川が以前ダイバーショップに盗みに入ったからこそわかるのだが……。

山川は、じいっとその写真に見入った。

吸い込まれてしまいそうな海の青。

人影の頭上で太陽の光が水を照らす。

ゼリーのように輝く、水、水、水……。

「あら、山川さん」

優雅な声がした。

振り返ると、ユリアがそこに立っていた。

「あ、どうも」

山川は小さく頭を下げる。ヨーコのような庶民的なタイプなら平気なのだが、どうも貴族じみた人は苦手だ。

どう付き合っているのか判らないのだ。

「桐原さんは、まだ上で写真見てるんですか？」

もごもごと聞いてみる。

ユリアと一対一で話すのは気が重い。

ヨーコに早く戻ってきて欲しかった。

「あら、山川さんはご存知ないんですか？」

ユリアがきょとんとして山川を見た。

「…何を、ですか？」

壁際に追い詰められるような感覚が襲ってきた。

ユリアの瞳が、山川をピンで留める。

「桐原さん、警察署の方から連絡が入ったみたいで。つい先ほどお

帰りになりましたよ」

「え」

山川は更に硬直した。

「か…帰った？」

「ええ」

「帰った!？」

「はい」

「帰ったああ!?!？」

山川の大声が轟いた。

ガツツ。

衝撃と共に、一瞬目の前が真っ暗になる。

火花が散ったかのようだ。急にフローリングの床が迫ってきて、鈍い痛みが全身を襲う。

「あっ…!」

思わず呻いて、ヨーコは空を掴んだ。

後頭部から、じわじわと痺れが広がっていく。

…ユリアさん…!？

扉を開けた直後の出来事。ヨーコは薄れゆく意識の中で、必死に目を見開いた。純白のワンピースの、清楚な女性。

その姿が、一瞬くつきりしてはばやける。

「ユリアさんっ…」

「ごめんなさいね」

ユリアが笑った。

パイプ椅子を抱えている。それを使って、ヨーコを殴ったのだろう。「ど…して…」

擦れる声で、ヨーコは呟いた。

目の前の光景が、捻れてぐるぐると回りだす。

我慢していれば酔ってしまいそうだ。

「あなたには、消えてもらわなくちゃいけないの。すぐ楽にしてあ

げるから、暫く眠っててください」

天使のような顔が、優しく微笑んでいる。

まるで子供を寝かしつける母親だ。

「さっきの紅茶には、睡眠薬が入っていたんです。もう効いているでしょう？」果たしてこの目眩が薬のせいなのか、後頭部の衝撃のせいなのか。

それは判らない。

何もわからない。

それ位ヨークは朦朧としていた。

「…ユリ…ア…さ…」

伸ばしかけた腕が、力を失って床に落ちた。

天使の館。

そこで、清楚な悪魔の微笑が、動かない彼女を見下ろした…。

帰った？

桐原さんが、帰った!？

信じられない心持ちで、山川はユリアを見つめた。

「ええ。本町署からの連絡があったそうで…」

ユリアが答える。

山川は、パツとリビングの時計を見た。

オルゴール内蔵型で、高さは1メートル以上ある。

3時4分。

ヨーコが言っていた、身代金受け渡し時間にはまだ早い。

一体、何の連絡があったというのだろうか。

「俺、追い掛けます」

山川は時計から目をそらした。

コートをつかみ、ぶっきらぼうに頭を下げる。

「お邪魔しました」

「あら、もつとゆっくりして頂きたかったのに…」

ユリアの目が、不思議な光を放った。

「山川さん、せめて紅茶を召し上がって行って下さい。

一口もお飲みになってないんですもの。」

うちの会社が輸入している茶葉なんですよ」

「ごめんなさい。俺、紅茶苦手なんすよ」

山川はミリタリーコートに腕を通した。

「では、コーヒーはいかがでしょう?」

ユリアがしつこく聞いてくる。

「ジュースもありますし。とにかく、何かお飲みになって…」

「すみません。桐原さんが帰ったなら、俺も急がないと」

山川はユリアをしつかり見すえて、断った。

「…残念です」

ユリアも、山川を見ていた。

鋭い表情が、彼を突き刺してくる。

が、彼女はすぐに穏やかな笑顔をみせた。

「仕方ありませんわね。」

「仕事中なんですから。」

「…何の力にもなれず、申し訳ありませんでした」

「…イエ」

山川は素っ気なく目を逸らす。

どうも、こういうタイプの人間は苦手だ。

「お邪魔しました」

もう一度だけ言うと、彼はリビングを飛び出していった。

後には、すっかり微笑みを消し去った女性が立ち尽くしていた。

「ふう…」

家から出たとたん、山川はため息をついた。

肩が凝り固まっている。

息苦しさを何とか消そうと、何度か深呼吸を繰り返した。

自分には、こんな屋敷は似合わない。

長くいると、頭がおかしくなってしまうそうだ。

山川は、畳張りの薄暗い自分の家を思った。

高級なものは、何一つない。

雨戸はガタガタで外れかかっているし、風呂はない。トイレもアパ

ートで共同で使っている。

支払いが滞れば、すぐに電気も水も止められる。

幼い頃から何度も、家族で一本の蝋燭を囲んで夜を過ごした。

けれど、そんなボロアパートが、山川は好きだった。誰にも気兼ね

なく、ごろんと横たわれる場所。

そして、守るべき人のいる場所…。

この天使の館には、山川の好きなものなど、何一つない。

紋白蝶が飛んだ。

強烈な日差しが、蝶のシルエットを目に焼き付ける。山川は、館の門には向かわなかった。

本当は、早くこの家から出たくて出たくて、たまらなかったのに。

彼の足は、庭の奥へと進んでいった。

花を踏まないように気を付けながら、天使の噴水を通り過ぎ、館の裏へと回り込む。

そこには、淡い桃色の梢を伸ばす、桜の巨木が立っていた。

表通りからは見えない位置を選んで、山川は木に足をかけた。

慣れた動作で、スルスルと登っていく。

彼のミリタリーコートは、すうつと木の色に溶け込んでいった。

はらはらと花が舞う。

日がキラキラと散る。

泥棒は、桜の太い枝先に立ち、天使の館を見つめた。枝と、館の二階のベランダは同じ高さだ。

軽く弾みをつけて、山川は飛んだ。

失敗すれば確実に眼科の噴水に叩きつけられてしまう。

しかし、山川はひらりとベランダに降り立った。

その窓からは、倒れて動かないヨーコが見えた。

カチッ。

カチカチッ。

金属音が耳に響く。

カチカチっ、チャッ…

ヨーコは深い深い眠りの中で、その音を聞いていた。
子守歌みたいだ。

その口元が、かすかに上がる。
さくら色のルージユをひいた唇がわずかに開く。
まるで、小さな子供のよう…。

ぐるぐる回る世界の中で、ヨーコは青年に抱き締められていた。

黒髪で、筋骨たくましい九州男児。

大きな瞳が、ヨーコを見守る。

「はやと…」

ヨーコはぎゅうつと男に抱きついた。

「どこ行ってたの。あたし、待ってたんだから…」
男は答えない。

ただ、ヨーコを抱き締め、見つめているだけ。

それでもヨーコは幸せだった。

…隼人に会えたから…。

ガチャン!!

ガラスが割れてしまいそうな音がした。
はっ、とヨーコは目を開ける。

ヨーコは、フローリングに横たわっていた。

隼人は夢の中に溶け去り、急の後頭部から痛みが広がってくる。

体を起こそうとしたが、床が揺れているように感じて、どうしても
できなかった。

カチッ

カチッ

あの金属音は、まだ聞こえている。

音のする方に顔を向けて、ヨーコはギョツとした。

山川が、ベランダにしゃがみこんでいた。

へアピン片手にガラス窓を…

「ピッキングしてるの…?」

がさがさの声で、ヨーコが呟いた。

もちろん、そんな声は届かない。

山川の真剣な眼差しは、全て窓の鍵部分に注がれている。

へアピン青い光が、ヨーコの瞳に焼き付く。

「どっして…」

どうして、そんなことができるの？

ガチッ。

音と共に、ガラス窓が開いた。

「…できた」

山川が笑った。

不思議な、表情だった。

今回は岩波と角川のエピソードです。

ヨーク&山川はお休みです（*、*、*）

「岩波さん」

そーっと呼んでみる。

「岩波さん」

反応なし。

角川は困ってしまって、ただただその場でムダに慌てていた。
どうしよう。

どうしよう。

もうすぐ夕方になってしまう。

今すぐ出発しないと、身代金受け渡しに間に合わない。

それなのに、岩波が動く気配はまったく無かった。

パソコンと睨み合い、防犯カメラの映像解析をしているのだ。

昨日、被疑者からの着電があつた電話ボックスは、どのカメラにも映っていないかった。

そこで、少しでも不審な人物を洗い出そうと、本町署付近の防犯カメラを徹底的に調べあげている。

作業を始めて5時間。

しかし、今だにそれらしき人物は見当たらないようだった。

「…岩波さんっ」

角川はビビリながら再度声をかける。

「岩波さん!!」

「あ?」

今度は、反応が返ってきた。

それだけで、角川は何故かホッとす。

「岩波さん、そろそろ行きましょう。遅れちゃいますよ」

岩波はマウスをクリックする手を止め、椅子ごと回転して角川を振り返った。

険しい表情。

皺のよった眉間。

血走った目。

「ヒッ」

あまりの恐ろしい形相に、角川は後ずさった。

「あ？なんだ、人を化け物みたいに」

岩波の眼が角川をガツチリと捕える。

まるで獲物を見つけた虎のようだ。

「いつ、いえつ、そんな、化け物だなんて…！」

角川は必死で笑みを作る。彼にとって、岩波は化け物の百倍おっかない。

「おつ、時間か」

岩波は腕時計に目をやり、さも自分で気付いたかのように呟いた。椅子からガタンと立ち上がり、背広に腕を通す。

「よし。行くぞ角川」

「はい！！」

角川は内心ヒヤヒヤしながら返事をした。

今回は、岩波と角川がペアとなって動くのだ。

少しでも失敗したら、ひどい目に逢うだろう…。

角川は身震いした。

…今日が、僕の命日かもしれない…。

2人は、人気の無くなった捜査本部を出ていった。

今は全ての刑事が井の頭公園に向かっている。

…これから勝負だ。

岩波は、胸のうちに微かな緊張を覚えていた。

犯人と接触する前にいつも感じる、高揚感にも似た高鳴り。捕まえられるのか、逃げられるのか。

人質の命を救えるのか、救えないのか。それに、自分が生きて帰ってこれるのか否か…。全ては、これから始まるのだ。

「おい角川あ」

荒々しく声をかける。

「はっ、はいっ!」

妙に上ずった声で、部下が返事した。

…何だよ、俺ってそんなに恐ろしい存在なのか？

岩波は一瞬力チンときたが、気を取り直して続けた。「拳銃所持命令がでている。準備してあるだろうな」「もっ、もちろんです!」
角川の声がでんぐり返しをした。

何があっても彼に撃たせてはいけない。

岩波はそう直感した。

ビビりながら撃つたら、どんなことが起きるか…。

角川なら、誤って味方を撃ち抜きかねない。

岩波は以前、そういう現実には直面したことがあった。あんな凄惨な光景は、二度と見たくはない。

署を出て少し歩いたところで、角川が一瞬立ち止まった。

「おい、何やってんだ!急いでんだぞ」

岩波がイラついた声を出す。

そこには、あの電話ボックスがあった。

ヨーコが致命的なミスをした場所。

犯人を取り逃がした場所。ヨーコが泣きながら座っていた縁石も、陽に照らされてすっかり雨を乾かしている。

岩波は立ち止まり、ジロツと角川を睨み付けた。

「すつ、すいません!!」角川は慌てふためいた。

「はあ……」

思わずため息をつく。

…こいつと一緒に行動するなんて、まったく…。

「行くぞ!!」

獅子のようななり声と共に、岩波はずんずん歩いた。

その後ろを、ちょこまかと角川が追ってくる。

何だか、どうしようもなくイライラした。

我慢しようとする程、頭の中にもやが渦巻く。無視しようとする程、彼女の姿が思い出される。

桐原ヨーコ。

今頃、どうしているだろう。

もう戻ってこないつもりなのかもしれない。

戻ってこれる筈が無いのだ。

それだけの過ちを犯したのだから。

ふと、岩波の脳裏を、遠い昔の記憶が駆け抜けた。
海辺。

波が打ち寄せる中、砂浜に倒れている人間…。

岩波は頭を振って、その映像を追い払う。

もう終わったことだ。

思い返す必要もない。

ただ前を見据えて、これからのことを考えればいい。「おい角川あ
腹いせに怒鳴り声をあげた。

「はいっ!!」

部下がビクツと返事する。「何でもねえよ!!」

噛み付くように叫ぶと、岩波は歩く速度をズンズン速めた。

「…え!?!」

すっかり混乱した様子の角川の声が、岩波を追い掛けてきた。

「きゃ…っ…!」

ヨーコは思わず声をあげた。

窓の向こう側で、今の今までピッキングしていた人影が立ち上がったからだ。

「しーっ」

山川だった。

彼は、口元到人差し指をあてながら、窓ガラスをスライドさせ、部屋の中に入ってくる。

「声だすなよ」

小さく囁くと、フロアリングに転がっているヨーコに歩み寄ってきた。

ヨーコは起き上がろうとした。

山川に上から見下ろされるのは、どうも気に食わない。

しかし、その動作はできなかった。

体に力が入らない…。

「やられたのか？」

小声で、山川が尋ねた。

こくん、とヨーコはうなずく。

それだけで、後頭部を鈍い痛みが襲った。

「動くな」

声をかけると、山川はヨーコの首と腰に手を回し、そっと抱えあげる。

「ちょっと…!」

気やすく触らないで!

驚いて彼を睨むが、山川は全く気にしていない様子だ。

「静かにしてないと、見つかったまうぞ。ここに住んでるのは立派

な犯罪者なんだからな」

「…あんたもでしょ」

「ま、な」

ヨーコをお姫様のように抱えたまま、山川はスルリとベランダに飛び出した。

「どっ…どうするの？」

困惑してヨーコが尋ねる。ここは二階。

桜の木以外に、飛び移れる場所はない。

しかも山川の腕はヨーコでふさがっている。

とても脱出は不可能だ。

花びらが散った。

「心配ご無用」

山川はニツと笑ってみせた。

「逃げ道の無いところに忍び込むようじゃ、泥棒失格だからな」

「でっ、でも…っ」

「行くぞ」

不安がるヨーコを抱いたまま、山川はベランダの柵に足をかけた。

「まさか…っ！」

ヨーコはギョツとして山川を見上げる。

「ねえ、あんたひよっとして…」

山川は笑うだけだった。

彼の体はひょいっとな柵の上に持ち上がる。

あっという間に、泥棒はベランダの細い柵の上に直立した。

「いやっ…！」

ヨーコが金切り声をあげる。

眼下には陽にきらめく芝生、そして天使の噴水。

落ちたら、ただでは済まない…！！

「やめて！やめてっ、降ろしてえっ…！」

「だから今降りようとしてんじゃん」

「違うっ！飛び降りるなんて嫌あ…！」

「ずいぶん気の小さい刑事サンだなあ、おい」
山川の声は完全に楽しんでいた。

「ま、失格刑事だもんなっ」

ヨーコが反論する暇もなかった。

山川の足が、ベランダの手摺りを強く蹴った。

2人の身体は完全に宙に浮き…

「いやあああっ！！！」落ちていった。

ユリアは、落ち着いた足取りで二階への螺旋階段をあがっていた。

残念なことに、山川は取り逃がした。

しかし、女刑事は彼女の手のなかにある。

ユリアの清楚な顔に、残忍な表情が浮かんでいた。

…殺してやる…。

その感情は、強く激しく、彼女を突き上げた。

苦しくなるほどだった。

…殺してやる…。

螺旋階段を登りきり、鉄のドアに向かう。

決して、内側からは開かないドアだ。

彼女は、後ろ手に持っていた太いロープを一瞬見やった。

さっきの紅茶には、睡眠薬が入っていた。

山川は飲まなかったが、桐原ヨーコは飲み干した。

たとえ彼女が殴られたショックから回復したとしても、薬の効果はまだ持続しているはずだ。

か弱いユリアでも、たやすく絞め殺せるだろう。

ユリアは、ドアを開ける前に一つ深呼吸して、高ぶる気持ちを落ち着けた。

自分は、今から人を殺す。罪を犯す。

もし捕まってしまうば、監獄行きは免れられない。

それでも、殺さなければならぬ。

あの子を、守りたいから…。
ユリアは、体当たりするかのようにドアにぶつかっていった。
鉄のドアがバーンと開く。そして、
そこには、
誰もいなかった。

「ここまで来れば、もう安心だろ」
山川が言った。

プリンになつてしまっている茶色い髪を風に逆立て、呑気な笑いを口元に浮かべて。

ヨーコは、ただ疲れ切って汚らしいドラム缶にもたれていた。

…ここは、川から1キロ程離れた廃材置場。

黒いどろどろの染みがあちらこちらに見える。

ひしゃげたトラックは、毛羽立った古タイヤの山に乗り上げている。
自転車のスクラップ、引つ繰り返った冷蔵庫やブラウン管テレビ。

二度と使われることのないだろう廃材たちは皆、午後の日差しを受けてキラキラと輝いていた。

「怪我は？」

山川がヨーコを見つめた。ヨーコは力なく首を横に振る。

「殴られたトコが、痛いだけ…。」

「眩暈は？吐き気とかはする？」

「大丈夫…。」

答える声に、元気は無かった。

生まれて初めて、死に直面した。

ヨーコの脳裏には、ユリアのぼやけた姿が、はっきりと影を落としている。

あの目。

怖かった。

ただ、ひたすら、ヨーコは怖くてたまらなかった。

2人が宙に飛び出した、あの時。

ヨーコはあまりの恐ろしさに、ぎゅっと目をつぶった。

…落ちる！！

地面に叩きつけられる衝撃と痛みを覚悟し、一瞬のうちに身をキュッと縮める。それでも、決して山川に抱きつきはしなかった。それだけは、わずかに残されたヨーコのプライドが許さない。

しかし、山川はふわ、と地面に着地した。

まるで、飛んでいた紋白蝶が花びらにとまったかのような、そんな軽やかさで。彼は、ヨーコを抱いたまま、天使の、いや悪魔の館の裏塀をも飛び越えた。

軽々と、風になって飛んだ。

そして、この廃材置場まで、人目を避け、裏道や細い路地を駆け抜けてやってきたのだった。

廃材に反射する光が眩しくて、ヨーコは目を閉じた。ユリアは、恐らく今回の事件に何らかの関係がある。もしかしたら、文春はあの館に閉じ込められているかも知れない。

今すぐ、岩波達に知らせなければ…と思う。

しかし、彼女は連絡できなかつた。

…もし、違っていたら？

もし間違った情報を流して、身代金受け渡しに支障が出たら？

それを思うと、ヨーコは動けないのだ。

二回目のミスは、許されない。

ヨーコはそれを痛感していた。

自分の立場が危ういからではない。

文春の身を案じるからだつた。

犯罪者に襲われるのがどんなに恐ろしいか、ヨーコは身をもって知つた。

あの恐怖を、幼い文春に与えてはならない。

一刻も早く、彼を救わなければならない。

そのためには、もう自分勝手な振る舞いをする訳にはいかないのだ。ヨークはうつすら目を開け、空を仰いで立つ山川を見つめた。

彼も犯罪者だ。

けれど、彼も今こうして、文春救出の為に動いている人間だ。

本当なら、彼が関わらなくてもいい事なのに。

ヨークのミスの一因となってしまうた、それだけの理由で、危険に首を突っ込んでいる。

コリアや被疑者に見つかるかもしれなかった。

殺されるかもしれなかった。

ヨークに逮捕されるかもしれなかった。

それなのに、彼は、今こうしてここにいる。

ヨークは、両手で顔を覆った。

それに比べて、私は…。

刑事としてのプライド。

自分の立場。

それが全てだった。

それしか考えられなかった。

『刑事さんになりたい！』小さい頃から憧れていた夢。

どうして、どうして刑事になりたかったの？

町を守ってる警察官が、かつこよかったからでしょう？

私も、正義の味方になりたいって、思ったからでしょう？

私は、それを叶えたはずだった。

でも、今の私は…。

全然、かつこよくなんかない。

無様だ。

山川に頼ってるからじゃない。

犯罪者と手を組んでるからじゃない。

自分の為に、事件を解決しようとしてたから。
被害者のことはお構いなしだったから…。

「かっこわるい…」

太陽が、眩いたヨーコの上に降り注いだ。

どこからか、花びらが舞った。

先日、あやまってこの話の次の話（炎と爆発）を先に投稿してしまいました…。話が繋がってなかったたので、読んでいらっしやる方々に大変ご迷惑をおかけしました。

今話の後、もう一度次話を読んで頂ければ話がスムーズに繋がります。

本当に申し訳ありませんでした！！

「…来たみたいだ」

マドンナの横でオペラグラスを覗き込んでいた刑事が、小さく叫んだ。

「なに！？」

周りの刑事たちが一斉に池の対岸に目を注ぐ。

小さな弱い赤い鳥居が、桜の影から僅かに姿を見せている。

そこには、二人の刑事が緊張した面持ちで控えているはずだ。

マドンナの目が、きゅっと細められた。

「あいつだ」

鳥居の元で待つ刑事たちも、“彼”に気付いた。

黒いジャンパーに灰色ニット、サングラスにマスクという怪しい出で立ちの男。ポケットに両手をつっこみ、道の小道を蹴りながら歩いてくる。

桜を楽しむ人々の波に掻き消され揉まれて。

しかし怪しい男は、それでもゆっくりと近づいてくる。

「来たわね…」

二人の刑事の1人　ザザが呟いた。ダイヤモンドダストのように、冷たく瞳を輝かせて。

「…仕留めてやるわ。絶対に」

肉食獣が獲物を狙う目付きだった。

*

「岩波さん！来ました！」興奮して叫ぶ角川の頭を、岩波はさすがパコンと殴った。

「わかってる！とにかく黙ってるんだ！！」

…最近の若手は、これだから困る。被疑者確保の基本がわかってねえ。

岩波は心の中で悪態をついた。

二人が立っているのは、古い木の橋の真ん中。

万が一被疑者がこちらに逃走してきたら、二人が食い止める手筈だ。岩波は背広の懷で、拳銃のボディを触つて確かめる。できれば使いたくないが、相手が追い詰められたときに何をしでかすかわからない。

全ては文春を救うためだ。例えば自分が被疑者を傷つけることになっても、人質は守らなければならない。

それが刑事だ。

井の頭公園は、武蔵野中から集まった刑事たちによって、完全に包囲されていた。

住宅地に抜けるどんなに細い道も、吉祥寺の街に出る混雑した坂も。被疑者は、まさに網の中の魚だ。

桜が散る。

池の水面に、花筏が泳ぐ。

男が、赤い鳥居の袂で立ち止まった。

「刑事か」

変声器を使っていない声は妙に甲高かった。

二人の刑事は、じっと動かない。

「身代金。持ってきたんだろうな」

「はい。確かに」

刑事の一人が、足下に置かれた巨大なアタッシュケースを指す。

「5000万に、間違いないな？」

男が念を押した。

二人の刑事たちは、こくりと頷いた。

「ザザが、密かに手に握られた手錠を、ゆっくりと握りしめる。そんな彼女の動きを察知したのか、男が急に怒鳴った。」

「あのガキは、俺が無事に逃げ切ったら解放するからな！手えだそうなんて思うなよ！」

刑事二人は、すくみあがった。

「どうしたら良いか、まるでわからない。」

「ここで男を捕らえるつもりだったが、そうすれば文春の身に何が起ころるか…。」

男が、勝ち誇ったようにニヤリと笑った。

「ヨーコ、今4時きっかりだ」

山川が叫ぶ。

その声は耳元をビュンビュンと音を立てて通り過ぎる風に交じって、ヨーコに届いた。

「気やすくヨーコって呼ばないで!!」

殴られたショックから大分回復してきたらしく、ヨーコが怒鳴り、山川の背中をポカッと叩く。

「はいはい。4時になりましたよっ、桐原さん!!」山川がムスツとして怒鳴り返した。

風が、彼のコートをなびかせ、膨らませていく。

二人は、廃材置場に捨てられていたボロ自転車を盗みだし、それに乗って井の頭公園へと突っ走っているのだった。

もつとも、自転車を盗み、タイヤに空気を入れ直し、油をさすという大作業をパツパツと遣り遂げたのは山川だ。

ヨーコは後頭部の痛みでぐったりしながら、ドラム缶に寄りかかっていただけだった。

けれど、山川を止めもしなかった。

捨てられていたとはいえ、自転車を盗むのは確かに犯罪だ。

けれど、それを咎めている場合ではない。

文春の命がかかっている。山川は自転車の後部座席にヨーコを座らせ、しっかりと自分にしがみつかせた。そして、猛スピードでこぎはじめたのだ。

「4時ってことは、被疑者はもう現れてるってことね?!」

ヨーコが、後ろから山川に呼び掛ける。

「ああ。そうだな」

「じゃあ、もう警察に捕まったかしら?」

「イヤ」

山川の返答は、確信に満ちていた。

「奴らは、捕まらないさ。何も知らない、警察どもにはな…」

「…?」

ヨーコには、よくわからない。

けれど、迷うことなく井の頭公園へひた走る山川の背中を見て、彼女もまた確信していた。

…あなたは、全部わかってるのね。この事件について、何もかも…。

「金。渡せよ」

男が、2人の刑事に迫った。

ザザは、唇を噛み締めた。身代金を渡した後、男を尾行するしかない。

確実に遣り遂げなければ。彼女は、もう1人の刑事に頷いてみせた。刑事は、重いアタツシケースを抱え、よろけながら進み出る。

男は、ニヤリとしてケースを受け取った。

「身代金、渡したようね」目を細めたまま、マドンナが呟いた。

そして、キツと周りの刑事達を振り向く。

「みんな、位置について!何があっても、被疑者を逃がすんじゃないわよ!」

「ハイ!!」

刑事達は、ビシッと一斉に答えた。
マドンナに命令してもらえて、嬉しくてたまらない様子だった。

「角川、いつ被疑者が逃走してもおかしくねえからな!!」
構えとけよ!」

岩波が声を飛ばす。

「勿論です!」

角川がすぐに答える。

「それから」

少しポリリウムを落とし、岩波がささやいた。

「もし、被疑者が俺達に襲い掛かってくるようなことになったら……」
彼は、やる気満々になっている角川を見つめた。

「お前は逃げるよ」

「…は?」

思わず、角川はガクツとなった。

逃げる!?

「どうしてですか?! 私達は銃を持つてるじゃないですか! 被疑者なんて怖くも何ともありません!」

「だからこそだ!」

岩波が怒鳴った。

「お前に銃は使わせねえよ!」

…あの時みたいになったら、どうすんだよ。

岩波の頭の中に、一瞬血に染まった地面がフラッシュバックする。

…絶対、もう二度と、あんなことは…。

角川は何か言いたげだったが、やがて諦めたかのように水面に目を向けた。

視界が開けた。

目の前に広がるのは、大きな池。

着いた。

井の頭公園に着いたのだ。「身代金の受け渡し場所はどこだ？」

ビュンビュン自転車をこぎながら、山川が叫ぶ。

「稲荷神社よ！場所わかる？」

後ろからヨーコが答えた。「ああ、知ってる！！」

「弁天さまじゃないからね？！」

「弁天さま？ああ、カップルで去くと破局するってジんクスのあるところ？知ってるよ、稲荷はその反対側だろ？」

風が耳元で鳴る。

桜の花が、2人のうえに舞い落ちる。

突っ込んできた自転車に、花見客は慌てて飛びのき、道をあけた。

西日がカツと照りつけてくる。

身代金の入ったアタツシケースを持ち上げ、男は不敵な笑みを見せる。

その表情に、ザザの背筋がゾクツとした。

そして…

ドオオオン！！

爆音が響き渡った。

稲荷全体が、白い煙であつという間に包み込まれる。何も見えない。煙は大きく膨らみ、完全に辺りを覆い隠していく。

その中から、オレンジ色の火柱が立ち上った。

「！！！」

公園中の時間が止まった。刑事達も、花見客も。

ただ、その炎と煙を見つめていた。

やがて、あちこちで悲鳴が上がり始めた。

「ああっ!!」

角川が大声を出す。

稲荷は炎の柱に飲み込まれ、ごうごうと燃え盛っていた。

「新潮さん達が！」

角川は岩波が止めるのも振り払い、木の橋を駆け出した。ザザ達がああ炎の中にいる。

助けないと!!

煙は今や池の水面を濃く漂い、白い靄となって迫ってきた。焦げ臭い匂いが、つんと鼻をつく。

ガソリン系の油が爆発したようだ。

「角川止まれ！」

岩波の大声が響いた。

「え?!」

訳が分からないまま、角川は足に急ブレーキをかける。

稲荷のある対岸まではあと少し。

どうして立ち止まる必要があるのか、角川にはわからない。

「早く行かないと!!」

角川は岩波に怒鳴った。

「新潮さん達が危ないんですよ!岩波さんは2人を見殺しにするつもりなんですか?!」

「ちげえよ!とにかくそれ以上動くな」

岩波の言葉が終わらないうちに。

ドカアアアン!

角川は、何も聞こえなくなった。

煙にかすんだ風景が、ゆっくりと目の前で回転していく。

「うあ...!!」

ふわあつ、と体が浮く感覚があった。

何の重力も感じずに。

次の瞬間、彼は岩波の足下に叩きつけられた。

「っ!!」

激しい痛みが全身を貫く。呼吸ができない。

息が詰まっている…!

「角川!」

岩波の焦った声が上から降ってきた。

「角川、角川!!」

何度も、頬を叩かれる。

反応したくても、角川にはできなかった。

酸素がほしい。

息がしたい…。

ぐらあつ。

再び、体が浮き上がる感覚が走った。

「うわあっ!」

岩波の叫び声がする。

朦朧とする中で、角川は落ちていった。

深い深い、闇へと…。

「橋が!」

稲荷にむかつて走っていたマドンナが悲鳴をあげた。古い木の橋は、稲荷に近い側で爆破され、火を吹き上げている。

欄干も吹き飛ばされて、水面に浮かんでいた。

「岩波さん達が!」

他の刑事も口々に叫ぶ。

橋がぐらつと揺れたのが見えた。

まさか。

刑事達が息を呑む。

ゆっくり、スローモーションのように、橋が傾いていく。

「あつ！」

彼らは、何もできなかった。

橋は、炎に耐えきれず、どんどん池に飲み込まれていく。

マドンナの目が、橋にしがみつくと岩波と、彼に抱えられた角川を捕らえた。

「岩波さ…!!」

近寄るまもなく、橋は完全に崩れ落ちた。

岩波達の姿も、橋と共に池に吸い込まれていく。

「いやあああああ!!」

マドンナの叫び声が、花見客の騒ぎや悲鳴と重なり合った。そして。

ドカァン!

ドオオオン!

ズンツ!

ドガアアツ!

マドンナ達の目の前も、煙と炎で一杯になった。

何も見えない。

何も聞こえない。

井の頭公園全体で、火柱が上がっていた。

「桐原さん!しっかりつかまってるよ!!」

山川が呼んでいる。

その声に、ヨーコはハッと我に返った。

崩れ落ちる稲荷や橋に気をとられ、体が傾いていた。「…いつたい、

何が…」

擦れた声を絞りだし、力の入らない腕で懸命に山川の背中にしがみつく。

山川はそれを感じ取り、自転車をこぐ脚にムチをいれた。

ぐんつ、と自転車が速度をあげる。

ヨーコの髪が風で後ろにたなびき、山川のコートがパタパタと音を

立てた。

そこら中に煙が漂っている。

炎が桜の樹を焼き、パチパチとはぜながら辺りをオレンジに染めていく。

「花が…」

あまりに無残な光景に、ヨーコは言葉を失った。

花見客はパニックに陥っていた。

ブルーシートや弁当をその場に打ち棄てたまま、街や住宅地への道へ殺到した。山川はそれに巻き込まれないよう、何度も鋭くハンドルを切った。

そのたびにヨーコは振り落とされまいと山川にしがみつくと羽目になった。

けたたましい悲鳴とざわめき。

男も女も、若いものも年寄りも、泣き声をあげている。

負傷した家族や友人を支えている人々。

傷つき、1人で煙の中に横たわっている人を見付け、ヨーコは山川の背を叩いた。

「止まって！」

「えっ!？」

山川がすつとんきょうな声を上げる。

「何で?!」

「いいから早く!!」

キキーンッ。

自転車が大きく前につんのめった。

よろけるように飛び降り、ヨーコは倒れている人の元へ必死に近寄る。

脚がいうことをきかない。人波に逆らうように動く。煙が濃くなってきた。

早く助けなきゃ、あの人は死んじゃう…。

体がふらつく。

視界が煙で霞む。

ヨーコはよろよると、その人の所にたどり着いた。
白髪の、痩せたおばあさんだった。

煙を吸ってしまったらしく、身動きしない。

「おばあちゃんっ。起きて。早く逃げよう…」
呼び掛けるが、反応がない。

ヨーコはおばあさんの身体を抱き抱えた。

…絶対、たすけるから！！歯を食い縛り、おばあさんを背負うようにして立ち上がる。

早く、池から離れなきゃ。しかし、ヨーコの回りはすでに煙で真っ白だった。

思いがけない程近くに、オレンジの光が見える。

炎の熱は、肌を焦がすかのようにヨーコに伝わってきた。

早く、行かなきゃ…。

必死に、一歩ずつ歩み始める。

右足、左足、右足…。

しかし、数歩もいかないうちに、脚がぐらついた。

あと一歩。もう一歩。

念じるが、脚は棒のように重い。

ぐらぐらっと視界が揺れたかと思うと、ヨーコはその場に力なく崩れた。

「たすけ…なきゃ。逃げなきゃ…」

眩くものの、力が出ない。立ち上がることもできない。

…私、ここで死ぬの？

ヨーコがぼんやりと考えた時だった。

「桐原さん！！」

ふわ、と身体が持ち上げられる。

バシン、と激しく頬が叩かれた。

「いつ… たっ！」

ヨーコが呻く。

瞬きをすると、目の前に山川の顔があった。
すすで黒くなっている。

「どこ行ったかと思った。探したんだぜ？」

「あ…う、うん…」

山川はヨークを立たせると、おばあさんを背負いあげた。

「つかまって」

右手を差し出す。

すっきりした顔立ちに似合わず、ごつごつした手だった。
ヨークは、迷わずその手をとった。

舞っているのは、花。
ひらひらと宙を踊る。
儂くも散っていく。

あとから、あとから、美しく…。

「綺麗…」

ぽつりとヨーコが呟いた。彼女の目に映る、花、花、花　燃え盛る炎の、火の粉。

人々の逃げ惑う海から飛び出し、自転車は静寂の中を突き進んでいく。

パチパチと木が音を立てて燃えているが、それすらも空気に染み入って、静かさを作り出した。

霧のように煙が充満している、更にその奥へと走る。赤い火柱は、空をも舐め尽くす勢いだ。

ヨーコはハンカチで鼻と口をしっかり覆っていた。そうしていないと、この悪質な煙を吸ってしまう。

…刑事たちも犯人も、こんな火の海の中で、生きていられるだろうか？

ヨーコの頭の中を、嫌な予感が駆け抜けた。

「桐原さん」

彼女の心を読んだかのように、山川が呼び掛けた。

「何？」

不安が胸を締め付けてくる。

自転車は小さな炎を飛び越え、いよいよ稲荷に接近していた。熱気がカツと照りつけ、呼吸が焼け付く。

強いガソリンの臭い。

「あのさ」

山川は、目でヨーコを振り返った。

「何があっても…お前のせいじゃないからな」

「…」

「お前は、刑事失格なんかじゃない…」

ヨーコは、プツと吹き出した。

「何よ、いまさら慰めてるつもりなの？」

「…ちげーよ」

山川は、真つ正面を見つめている。

「本心だよ」

「…」

「失格刑事なら、俺みたいな一般市民を巻き込んでまで事件を解決しようなんて思わねーよ…」

「…誉めてんの？けなしてんの？」

自転車が、キツと強くブレーキをかけられて止まった。

稲荷の丁度目の前に、二人は立っているのだった。

「大体あんた一般市民じゃないじゃない」

炎にチラチラと照らされながら、ヨーコは山川をにらみつける。

「あんたは泥棒でしょっ」山川がニヤツと笑った。

「そうだったな。刑事と行動する泥棒、か」

ヨーコも口元に笑みを浮かべていた。

「あんたも失格。泥棒失格よっ」

二人は、クスクス笑い合った。

どうしてだろう、とヨーコは思った。

こんなにごうごうと立ち上る炎を目の前にして、本当は怖くてたまらない筈なのに。

どこからか、力が湧いてくるような気がする。

何故？

白かった煙は、だんだんと黒いものに姿を変えつつあった。

「行くぞヨーコ」

山川が彼女を振り向いて言った。
「気やすく言うんじゃないわよ」
頷く代わりに、ヨークは言い返す。
山川の脚が地面を蹴り、自転車が再び滑りだした。
ヨークはぎゅっつと山川にしがみつくと、
そして。

自転車は炎の海に飛び込んでいった。

*

冷たい。
肺の奥底まで、氷で固められてしまったかのように。全身の感覚が
無い。
何も見えない。
何も聞こえない。
ただ、寒い…。

凍てつく無重力の中で、岩波は1人の女性と向き合っていた。
黒いミディアムの髪、腫れぼったいけれど人の良さそうな、涙に濡
れた瞳。

『岩波さん』

呼び掛ける声は、確かに彼女のものだった。

『私、これからどうすべきなんでしょうか？』

「知らねーよ」

岩波はイラつきながら答える。

「こっちは今、それどころじゃねえんだよ！」

『岩波さん』

女性は、岩波の言葉などまるで聞こえなかったかのように続けた。

『私は、どうしたら良いんですか？』

「だから、知らねえって！」

『どうして教えてくれないんですか？私に戻ってくるなって言った

のはあなたなのに」

「麗奈も言っただろう？その位自分で考える！」

『どうして』

女性が岩波に詰め寄った。『どうして教えてくれないんですか？』

「いい加減にしる」 『私は、ひつたくり犯を捕まえようとして、持ち場を離れました。確かに、それは貴方の命令に背く行動だったかも知れません。』

けれど、私はもう少しで1人の犯罪者を捕まえることができたんです」

「……」

『ひつたくり犯を捕まえることは、どうでもいい事なんですか？』

誘拐事件の犯人が捕まれば、ひつたくり犯は野放しても良かったんですか？』

「俺は、そんなこと一言も」

『誘拐事件の犯人も、ひつたくりの犯人も、同じ。犯罪者です。誰かを傷つけたのは同じ』

「……」

『私は、犯罪者のうちの1人を追っただんです。』

結果的には、誘拐犯に逃げられてしまったけれど、私は、刑事として“犯人を捕まえる”という仕事をしていたんです。

事件の重さに関わらず、犯人は捕まえる。

…それが、刑事の正義ではないのですか？』

「それは……」

『答えてください。岩波さん』

「……」

『この世の中の刑事に、正義が無いというなら……』

女性の姿がぼやけた。

岩波は瞬きする。

彼女の姿が、うまく捕らえられない。

女性のぼんやりした、幻のような影は、どこからか銀色に光るナイ

フを取り出した。

柄を岩波に向けて握る。

…まさか。

「やめる桐原っ！早まるな！！」

岩波は叫んだ。

必死に彼女の方へ駆け寄り寄ろうとするが、見えない壁に阻まれ、近づけない。

女性は彼に悲しそうな目を向けると、一気にナイフを自分の胸に突き立てた。

「桐原あつ！！！！」

血で、目の前が真っ赤に染まる。

まるで、“あの日”のように…。

「岩波さん！！」

耳元で大声がした。

寒い。

けれど、妙に熱い。

「岩波さんっ！！」

「…角川…？」

岩波は、瞬きした。

ぼやけた女性の像は溶けるように消え去り、現実の光景がゆっくりと岩波の視界に入り込んでくる。

燃える木々、漂う煙。

その中で角川が、自分を覗き込んでいる。

「岩波さん！！」

部下が、嬉しそうに岩波を呼んだ。

「よかった。気が付きましたね！！」

岩波はもう一度瞬きし、辺りを見回した。

「俺達は…池に落ちたんじゃ…」

「落ちました」

角川が支えてくれたので、岩波はゆっくりと身を起こした。角川がしゃべり続けた。

「気が付いたら、僕たち桜の枝に引つ掛かって浮いてたんです。なんとか岸まで泳いで、岩波さんを引き上げたんです」

「そ、そうか…」

そういえば、二人ともぐしょ濡れだ。

髪からは雫が滴っている。角川のズボンには、藻がついていた。

「とにかく、無事でよかった」

角川は安心したように笑った。

「心配したんですよ？岩波さん、引き上げてからずつとつわ」と言っただけですから」

「うわごと!？」

「ええ。どんな夢みてたんですか？最後なんて叫んでましたよ」

岩波はシヨックでまた気絶しそうになった。

まさか、角川の前でそんな失態をするとは。

「…なんて言っただか、聞いたんだな？」

脅すように角川をにらみつける。

部下の顔から笑顔が消えた。

「とつ、とんでもない！一言め聞き取れませんでしたよ!」

「本当だろうな？」

ズイツと岩波が詰め寄る。「本当ですつてば!」

ビクツと角川がひいた。

岩波はため息をつき、立ち上がった。

あの爆発。

恐らく、誘拐事件の被疑者が引き起こしたもののだろう。

しかし、あの燃え方。

犯人自身も、危険に曝されていた筈だ。

ましてや、身代金など守り切れるだろうか？

見上げると、高く立ち上る黒煙が見えた。

男は、少し離れたところで炎の渦を満足気に眺めていた。

足元には、追ってきた二人の刑事が、折り重なるように倒れている。男の刑事が、ショートヘアの女刑事を守っているかのようになり、ぎゅっと彼女の手を握り締めて。

しかし、その手に込められた力も、もうすぐ抜けてしまっただろう。

男は、笑いだしたくなる衝動を必死にこらえた。

静かに、静かに、見守ってやるのだ。

憎い憎い刑事どもの破滅を…。

ガツシャアアン！！

ふいに激しい音。

なんだ？

騒々しい。

早くも、俺を捕まえに警察部隊が来たというのか？

それとも、この炎を消しに来た、いまましい奴らなのか…

いや。

ちがう。

男は音のした方に眼を向けた。

ボロボロの自転車が一台、炎の海を背景に止まっている。

タイヤの空気は抜け切り、ボディは傷だらけだ。

警察や消防が、こんなチンケな姿で現れる筈がない。「だれだ？」

がさがさの唇で呟いたその妙に高い声は、炎の燃える音の中で、不思議に静かに響いた。

「…泥棒だよ」

ひらりと自転車から飛び降りた男が、ニヤリと答えた…。

「誰が泥棒よっ」

格好つけた瞬間、ドコツとどつかれた！！

「うわっ！」

山川は大きくよろけ、バランスをとるために大きく両腕を広げる。

「あんななんかと一緒にするんじゃないわよ！」

誰が泥棒ですってえ！？」「ほかっ。

もう一発。

山川はべしゃつと地面につぶれる。

「わたしを同類扱いするなんて、いい度胸よねっ！」足を振り上げたヨーコを見て、山川は慌てて地面を転がった。

ドスツと音をたて、ヨーコの足が今まで山川の体があつた場所に着地した。

「わるかったよ！」

サツと立ち上がりながら、山川が口走る。

「俺が悪かったよ！」

ヨーコは泥棒なんかじゃない！」

「気やすく呼ぶなって言ったでしょう…？」

低くドスのきいた声。

炎をバツクに、ヨーコの瞳もメラメラと音をたてた。「わりいっ！許せっ！！」「ゆるさないからっ！」

…なんなんだ、こいつらは？

男はポカンとして、目の前の男女を見ていた。

危険な連中が現れたと思いきや、間抜けなコントを繰り広げられている。

彼は、妙に拍子抜けしてしまっていた。

…油断してはいけない。
気を引き締めなます。

なんだかよくわからないが、自分を追ってきたのなら彼らは敵だ。
敵は消す。

男は、ポケットから何かを取り出した。

それに気付いて、ヨーコが小さく悲鳴をもらす。

「やつ…！」

男は口元をヒクつかせた。手にしたナイフ。

すでに血に塗れている刃を、パチパチと音をたてて伸ばしていく。

その音は、炎のそれに似ていた。

「どつちからやってほしい…？」

男がピクピクしながらマスクを外し、舌なめずりした。

「レデイ・ファーストかな…？」

ヨーコがビクツと震え、たじろぐ。

少し力の戻ってきた足を、何とか後ろへとずらした。「逃げるの？」
男が気味の悪い笑みをたたえてヨーコを見つめている。

サングラスの奥で、目がギラついている…。

すつ、と山川がヨーコと男の間に割って入った。

「やめとけよ。女を傷つけるなんて、男の名が廢れるぞ」

挑発するような、のんびりした口調。

ヨーコは恐る恐る、山川の背中を見た。

「特に、こんな女相手に本気になるなんてな。

カッコわりい。

まあ、人を傷つけた時点でそいつは人間としてサイアクだよ」

…どうという論理よ。

ヨーコはガクツとなったが、山川の言葉は十分に相手を“その氣”
にさせた。

「てめえから先にやってやるよ…」

口元をヒクヒクと震えさせ、男が言った。

「後悔するぜエ…？」

しかし、山川は驚いたことに…ニツコリ笑った。

「お前がな」

一瞬の間。

「…うわああああ！」

雄叫びをあげ、男は山川に突進していく。

銀色の光が、ヨーコの眼にかすかに映った。

「いやああっ！！！」

たまらず発した、泣き声にも似た叫び。

ヨーコはぎゅっと目を閉じ、手で顔を覆った。

鈍い衝撃音。

重いものが、ヨーコの足下に倒れた。

背中が、炎の熱でカツと熱い。

「大丈夫だよ」

やさしく声がかげられた。「大丈夫だから、顔あげて。ヨーコ」

強ばっている指の関節を、そうつと開く。

プリン頭の、すすけた顔の青年が、ヨーコを覗き込んで微笑んでい
る。

ヨーコは、ゆっくりと手を顔から離れた。

山川の足元に、あの男が転がっている。

ナイフは吹き飛ばされ、遠くの地面に落ちている。

ヨーコは安心して、バシツと山川をたたいた。

「ばかあっ！！心配させないでよう…ホントに、刺されたかと…っ」

「心配してくれてたんだ？」

山川がニツコリ笑う。

「ありがとなっ、ヨーコ」「だからあ！」

ヨーコがムキになってわめき散らす。

「たやすくヨーコって呼ぶんじゃないわよお！！！」

二人は安堵しきっていた。だから、倒れていた男の指が、ぴくりと動いたことにも、気が付かなかった…。

「うっ…」

微かな呻き声。

それが、自分の発したものだ気付くまで、少し時間がかかった。

重い瞼をそつと開く。

地面がオレンジ色にチカチカと照らされ、瞼の裏側まで炎の色に染めていた。

「先輩。…新潮先輩っ」

誰かが、呼んでいる。

ザザは瞬きし、その声の主を見つけて微笑んだ。

「ヨーコ…」

「先輩。もう大丈夫ですから」

桐原ヨーコが、頼もしい表情で言った。

あの、最初の爆発。

ザザ達は幸運なことに、その直撃を受けることはなかった。

それでも大きく吹き飛ばされ、ザザは全身を強く打ち付けて意識を失ってしまったのだ。

その後どうなったのか、全くわからない。

「…松田くん！」

はっとしてザザが叫び、上体を起こす。

それをヨーコは慌てて止めた。

「ダメですよっ、まだ立ち上がったたりしちゃあ！」

後輩の腕が、少々手荒にザザを押し戻す。

「松田くんは!？」

夢中で叫ぶ。

「私と一緒に被疑者を待ち伏せしてたの…松田くん!!」

「先輩、落ち着いてください！」

めずらしく取り乱したザザを見ると、ヨーコも落ち着かない気分になっってしまう。

「松田さんは…怪我してるけど、大丈夫ですから！」言ってから、ヨーコはチラツと脇に目を走らせた。

山川が、倒れている刑事の傍らに屈みこみ、止血しようとしていた。二人が見つけたとき、この松田という中年刑事は、ザザを守るように多いかぶさっていた。

背中には被疑者に刺されたらしい深い傷が、数ヶ所刻まれており、そこから流れだした血が地面に跡を残している。

山川が懸命に止血を試みているものの、彼の意識は既に無かった。

果たしてこの状態を、「大丈夫」と言えるのだろうか？

それも知らず、ザザは安心したかのように再び目を閉じた。

ヨーコが羨ましがっていた長い睫毛が、火の粉で焦げてしまっている。

「救急車…早く来て…」

祈るような気持ちで、ヨーコは呟いた。

池の周りは炎に囲まれ、もはや逃げることは出来ないのだ。

「血い、止まってきた」

山川が呟いた。

ヨーコは振り返り、松田刑事に目を落とす。
蒼白な顔面。

ぴくりとも動かない、血まみれの身体。

「早く病院に連れていかないと、本当に死んじまうぞ」
そう言った山川の手も、松田の血で真っ赤だった。

山川は、いつの間にかTシャツ姿になっている。

自分のコートを引き裂いて傷口をふさいだのだ。

山川のピストルは、コートのポケットから取り出され、ジーンズのベルトに収まっている。

それを見たヨーコは、一瞬吐き気に近い嫌悪感を覚えた。

どんなに事件解決のために尽くしてくれようと、やはり山川は犯罪者だ。

このピストルを撃ち、人を殺すことも出来るのだ。

しかし、今はそんなことを言ってはもらえない。

ピストルから目を離し、ヨーコは山川に呼び掛けた。「一応救急車は呼んだわ。でも、公園から逃げてきた人の看護で手一杯みたい。おまけに……」

「こんな火の海じゃ、さすがに来れないよな」

山川が周りを見回した。

炎は、すぐそばまで迫っている。

樹を焼き、花を焼いたその勢いは凄まじい。

救助が来るまでには、ここも炎に飲み込まれてしまっただろうことは、二人にもわかっていた。

「もう、逃げ道は一つしかねえな」

山川が苦笑いした。

「？」

ヨーコは不安げに山川を見つめる。

炎の熱で、呼吸すると肺が焼けてしまいそうに痛む。「池に飛び込むぞ」

山川が告げた。

被疑者の男が動きだしたのは、その時だった。

急に立ち上がった彼は、ポケットからピンを取出し、何やら液体を振りまいた。そして、迷うことなく山川に向かってきた！

「！」

ヨーコは息を詰まらせた。男が手にしているのは、小さいカセットテープのようなものだ。

しかし、ヨーコにはすぐに察しがついた。

爆弾だ！

山川は男に背を向けていて、気付かない。

とっさにヨーコは山川の手をつかみ、ひきよせた。

「うわっ！！」

山川が驚いた声をあげ、引っ張られた弾みでヨーコにぶつかる。

次の瞬間。

ドカーン！！

すぐ背後で、小さな爆発が起きた。

立ち上がった火柱は小規模だったが、威力は大きい。二人は宙に投げ出された。そして、そのまま池のほとりに叩きつけられる。

「うあっ！！」

背中を打ち付け、あまりの痛みにヨーコは叫び声をあげた。

その横を、男が走り去っていく。

「待て……っ！！」

山川の声。

しかし、男は池に飛び込むと、あっという間にどこかへ泳ぎ去った。ヨーコのぼんやりした視界に山川が現れた。

「無事か?!」

「う……うん……」

なんとか身体を起こす。

背中がひどく痛み、ヨーコは顔をしかめた。

「いた…っ」

しかし、顔を上げて山川の姿をはっきりと見たとき、その痛みは吹き飛んでしまった。

「やつ…!!」

山川は頭から血を流していた。

血は筋となつて、ヨーコの膝にも落ちてくる。

「大丈夫!？」

慌てて、手を彼の額にあてた。

ぬるつとした生暖かい感触。

「え?ああ、大したことないよ。心配すんな」

こんな時だというのに、山川は笑って答える。

しかし、彼が一瞬、痛み顔に顔を歪めたのをヨーコは見逃さなかった。

「痛いんでしょう?なんで嘘つくの!」

「痛くねえって!」

「バカ!!」

ピシャツと怒鳴ると、ヨーコはボロボロになってしまったシャネルのバッグからハンカチを取り出し、山川の額に当てた。

「なんでバッグからハンカチが出てくんだよ」

山川が面白そうにヨーコを見つめる。

「普通ポケットから出すもんだろ。お前トイレで手、洗ってないんじゃないねえの?」

「おだまりっ」

…素直に感謝しなさいよ!そう思いながらも、ヨーコは何も言わなかった。

そして、振り返った。

すぐ背後に、燃え盛る炎の波。

ザザと松田は、運良く爆発に巻き込まれない位置に倒れていた。

それを見て、ほっと安堵する。

ズキズキ痛む背中と力の入らない脚。

コリアに殴られた頭も、鈍く痛んでいる。

それでもヨーコは、力のかぎり動いた。

まず軽いザザをひきずるようにして池の傍まで運んでくる。

松田も同じように引きずってみたが、ヨーコの弱った力では、なかなか 難しい。

すると、山川がふらつきながらも歩み寄ってきた。

無言で松田を背負い上げる。

ヨーコはなるべく山川に負担をかけないように、松田を支えた。

こうして二人を池のほとりまで連れてくると、ヨーコも山川も疲れ切ってしまった、もう立ち上がることもできなかった。

あとは、炎に飲み込まれる前に救助されることを祈るしかない。

幸い、池のほとりの土は湿っていた。

火の勢いも少し衰えるかもしれない。

「…もう、気付いてるよな」

山川が擦れた声で呟いた。「被疑者の狙いは、身代金じゃなかった。金なんて、とつくに燃えちまつてる」ヨーコも、小さく頷いた。わかってる。

被疑者の狙いは、なるべく多くの刑事を傷つけることだった。

文春を攫うことで佐倉長官に精神的ダメージを与え、更に身代金受け渡しのために集まってきた刑事たちを火の海に陥れた。

「おっそろしい刑事抹消計画だな…」

絶体絶命だというのに、山川がニヤリと笑った。

ついに、犯人の恐ろしい狙いが明らかになりました！絶体絶命の二人。

傷を負い、力尽きています。

二人の運命は…？

そして、文春はどこに？

「だけど、あいつは逃げられない」

山川が笑っていた。

「逃げられない？」

ヨーコはきよとんと顔を傾ける。

「どうして…？」

被疑者の男は、池を泳いで行ってしまった。

対岸には、まだ火の手の及んでいないところもあるかもしれない。

公園中から人も刑事たちもいなくなった今、上陸し、住宅街に入っ
てしまえば確実に逃げ切れる。

「逃げられないんだよ」

再び山川が眩き、目を閉じた。

ヨーコはビクツとして彼を見つめる。

「大丈夫…？」

山川の傷からは、止まることなく血が流れている。

ヨーコのハンカチも真っ赤に染まり、もうこれ以上血を吸い取るこ
とはできない。

「大丈夫だって」

キツパリと山川は告げた。しかし、目を閉じ、岩にもたれている山
川を見ていると、ヨーコは気が気ではなかった。

「血、止めなきゃ…」

すすけたスーツを脱ぎ捨て、下に着ていたシャツの腕部分を引き裂
く。

ハンカチのかわりにその布地を山川の額に当てると、みるみるうち
に赤く染まっていた。

このままでは、ザザや松田だけではなく、山川も危ないのではない
か。

そう思うと、ヨーコの胸が不安に締め付けられた。

お願い。
誰か、早く助けて…。

その時。

「うわああ!？」

池から、男の叫び声が響いてきた。

「?!」

ヨーコは思わず立ち上がり、池の奥を眺めた。

被疑者の男が、池の真ん中で立ち往生していた。

シュノーケルをつけている。

恐らく、マンホールから出てきた時に山川に目撃されたシュノーケルだろうと察しがついた。

男は、奇妙な団体 足漕ぎのスワンボート3台に、取り囲まれていた。

スワンボートは、威嚇するように3方向から男に接近する。

スクリューが水を大きく掻いた。

巻き込まれては大変だ。

男は身動きできずに、ただぶかぶか浮いている。

一台のスワンから、ヒュルヒュルツと投げ縄が飛ばされ、シュツと見事に男の首に引っ掛かった。

男は逃れようともがくが、縄はきつく巻き付いて離れない。

縄を使ったスワンは、ゆっくりと燃えていないわずかな岸目指して動き始めた。縄がピンと張り、男の首を絞めている。

男は、苦しげにもがきながら、スワンに引きずられていった。

残りの二台のスワンは、真つすぐこちらに向かってくる。

ヨーコはおののいて後退りした。

「大丈夫だよ」

山川が小さく、しかしはつきりと言ってヨーコの手をつかんだ。

「…あいつら、助けてくれるから」

「え…？」

困惑してヨーコは山川を見つめる。

スワンはすうっと近寄ってきて、一台がは大きな音をたてて岸辺のワイヤーにぶつかった。

「おい、気をつけるよシズ」

もう一台のスワンから、激しい声が飛ぶ。

「大丈夫だよ、誠司。このくらい大したことないって」

ぶつかったスワンから、あどけない声が答えた。

「…？」

ヨーコが、訳もわからず立ち尽くしている間に、スワンから声の主が現れた。

一人は、小学2年生程の、小さな巻き毛の女の子。

もう一人は、中学生だろうと思われるガツシリした少年だ。

「あーっ、圭兄発見っ！」シズと呼ばれた女の子が嬉しそうに声をあげ、スワンから飛び降りた。

パシャパシャと水飛沫をあげながら、岸に上がってくる。

「シズ！待ってっ！」

叫んだ少年は、すぐさま女の子のあとを追ってきた。ポカンとしていたヨーコと目があり、慌てて頭を下げる。

「初めまして。山川誠司です」

「え…山川って…！」

ヨーコは驚きを隠せない。まさか！？

「そ。俺の弟妹」

山川圭司が、得意げに笑った。

「俺の弟妹だよ」

山川がニヤリと笑った。

「えええええー!？」

ヨークは驚愕してしまつて、ただ誠司と女の子を見比べるばかりだ。

「俺が前もつてボートに乗って待機してろつて言つたんだよ。」

被疑者がシュノーケル持つてたからよ、水に潜つて逃げることもあつて予測してたんだ」

山川が得意げに説明した。「ほら、シズ。お前も挨拶してっ」

誠司が女の子を突つく。

「はあいつ」

女の子は可愛らしい返事をして、ヨークに向かってニッコリ笑いかけた。

「あたし、静。シズつて呼んでねっ」

「あつ…初めまして…」

ヨークは混乱しながらも、シズのあどけない表情を見てほほ笑みを浮かべた。

「私、桐原ヨークです」

「桐原…ヨーク?」

誠司が不思議な顔をした。まじまじとヨークを見つめている。

「あの、…何か?」

落ち着かない気分になつて、ヨークが尋ねた。

「いえ。なんでもないです」

慌てたように誠司が答えた。

野球部なのだろうか、坊主頭だ。

「圭兄、怪我したの？」

誠司が山川を見て表情を曇らせた。

「ちよつとな。他にも怪我人が沢山いんだよ」

山川がザザと松田を顎で指し示す。

すると、誠司は走って行って松田を背負い上げた。

兄と違ってたくましい体つきの誠司は、軽々と松田をスワンへと運び込む。

ヨーコははっと気付いて、自分も渾身の力でザザを背負った。が、足がふらついてしまう。

「ヨーコちゃん、ムリしちゃダメえー」

シズがヨーコの前に立ちはだかった。

「誠兄がおんぶしてくから。ヨーコちゃんは待っててっ」

「あっ…うん…」

ヨーコは赤くなりながら了解した。

体力に限界があるということ、この女の子はよく分かっている。やがて誠司が戻ってきた。ひょいっとザザを抱き抱え、再びスワンに運んでいく。

「俺たちも行こう」

山川がヨーコに声をかけた。

岩に手をつき、ゆっくりと立ち上がる。

慌ててヨーコが支えようとしたが、山川はそれを手で制した。

…妹を心配させるな。

まるで、そう言っているかのようだった。

「お前は？歩ける？」

山川は逆にヨーコを気遣う。

ヨーコはこくと頷いた。まだ全身が痛み、頭もぼんやりとしているが、まだ少しなら動ける。

「よし。じゃ、行こう」

兄の声に、シズが嬉しそうに駆け出した。

水飛沫が、光る珠となって夕日と炎のオレンジ色を反射する。

その美しさに、ヨーコは自然に笑みをこぼした。

対岸に着くと、そこにはもう一台のスワンが止まっていた。さつき、被疑者の男を捕らえたボートだ。

ボートの中に人影はなく、ただ静かに波に揺れている。

「あれえ？麗兄、どこに行っちゃったのかなあ？」

シズがザブンとスワンから飛び降りながら、辺りを見回した。ここには、まだ炎が迫っていない。

生き残った桜の樹が、そよそよと千の花びらを落とす。

「綺麗……」

呟きながらも、ヨーコは悲しくなった。

井の頭公園の桜は、武蔵野の観光名所。

ヨーコも幼い頃から何度も花見に訪れ、親しんできた。

その桜の殆どが、灰塵と化してしまったのだ。

黒焦げになった公園の中で、ここの数本の桜だけが、儂い花びらを散らせている。

その花の雨の下に、ほっそりした体格の人物が立っていた。

ふわっとカールした、薄い色の髪。

透き通るかのような白い肌。

筋の通った鼻筋、大きな瞳……。

夢の世界から舞い降りたような姿の、高校生。

「麗兄っ！」

シズがはしゃいで、彼の元へ飛んでいった。

彼は桜から目を離し、妹を抱き上げる。

「桜：生きてるよ……」

そう呟いたのが、ヨーコの耳にも届いた。

「あの人も、弟なの？」

山川を見上げる。

「ああ。麗司ってんだ。気を付けろよ」

「え？何に？」

麗司はこちらに気付いたようだった。

「圭司、バカしたな」

大きな瞳が、兄の傷を見つけて止まる。

「心配すんなって」

山川が言ったが、麗司はすっとヨーコに目線を走らせた。

「僕が心配してるのは、あなたです」

「えっ…！」

突然のことに、ヨーコは酷くドギマギしてしまった。「圭司が怪我するなんて、滅多にないことです。貴女は、大丈夫ですか？」とろけるように甘い声だった。

疲れていることさえ忘れさせてくれるような、そんな響き…。

「はっ、はい…！」

思わず、ヨーコは勢いよく返事した。

顔が妙に熱い。

そんな彼女の様子を見つめながら、山川はため息をついた。

女性が麗司に惹かれるのは毎度のこと。

山川は、もう慣れっこになっている。

「おい麗司、被疑者はどうした」

空中にハートを連発しているヨーコを遮るように、山川は弟に聞いた。

「ああ、あそこ」

麗司はふんわり笑うと、桜の樹の根本を示した。

男が、幹に縄でぐるぐると縛り付けられている。

なおも逃げ出そうともがいているが、縄はびくとも動かない。

「さあ」

山川がヨーコの背中をポン、と押した。

「手錠をかける。それがお前の仕事だ」

ヨーコは、山川を見上げた。

夕日に、彼の髪がキラキラと輝いている。

「…いいの？」

ヨークの荒れた唇から、戸惑いの声がもれた。

「私は、この事件で何も出来なかった。全部、あんたに頼りっぱなしだった…」うつむきがちになり、肩が震える。

「私に、手錠をかける資格なんてない…」

その頭を、山川がツン、と押した。

「バーカ。おまえがしないで、誰が逮捕すんだよっ」「でも…」

「お前の熱意はピカイチだっつて」

山川はニヤリ、といったもの笑みを浮かべている。

「言っただろ？普通の刑事は、一般人をこんなことに巻き込んだりしねえよ」

その口調は、優しくかった。「早く」

促され、ヨークはおずおずと被疑者に近づいた。

男は、キツとにらみつけてくる。

それに負けないぐらいの強さで、ヨークは男を見つめた。

「誘拐容疑、及び殺人未遂の現行犯で逮捕します」

バッグから取り出した手錠が、キラリと夕日を反射する。

ガチャ、と音を立てて、手錠は男の手首にはまった。

沢山の人が傷ついた公園は、ただ静かに燃え続けていた。

あの後。

一行は自力で住宅地まで辿り着き、そこで救急車に拾われた。

被疑者は三鷹市から応援に来たパトカーに引き取られ、本町署に移送された。

文春の行方、ユリアとの関係など、もうすぐ明らかになるだろう。

山川の弟妹たちとはその場で別れ、傷ついた刑事3人と泥棒1人は、市内の日赤病院に運ばれた。

ザザはすぐに回復する見込みだったが、松田刑事は集中治療室に運び込まれ、生死の境を彷徨っていた。

ヨーコも診察を受け、「暫く安静にしているように」と指示された。しかし、医者言うことを聞こうとしないのが、山川だった。

「縫わなきゃダメって言われたんでしょう!？」

窓から、真っ暗になった空を眺めていたヨーコは、治療も受けずに戻ってきた山川を見て怒鳴り付けた。

ここは病院の待ち合い室。傷ついた花見客や刑事達、そして彼らの家族たちが、ひっきりなしに出入りしている。

混乱やショックで皆ざわめき、誰もヨーコの怒鳴り声など気にしない。

「ちゃんと治療しなさいよっ！観てもらっただけで帰ってくるなんて、そんな…！」

「平気だつて！」

山川が面倒くさそうにそっぽを向く。

ヨーコは間髪入れずに、山川の消毒し包帯を巻いただけの額に、軽

く触れた。

それだけで、山川の表情が痛みに強ばった。

「どこが平気なのよっ」

ヨーコは更に声のボリュームを大きくした。

山川が怪我していなければ、ひっぱたいてやるところだ。

「手術したら、費用かかるだろ」

山川がため息混じりに言った。

「金ねえんだよ。保険も、死亡保険にしか入ってねえし」

「なっ、何ソレ!？」

ヨーコは啞然とした。

「お金つて…手術費なんて、私だつてないわよ。」

まだ貯金貯まるほど働いてる人なんて、私たちの世代にはいないんじゃない？

緊急なんだし、そういうのは親に頼めばいいのよ」

「親いねえし」

山川が、ぽつと呟いた。「え？」

ヨーコは、瞬きした。

「ど…どうして？」

聞いてしまつてから、しまった、と思つた。

こんな不躰な質問、するものではない。

だが、山川は特に気にしていないようだった。

「俺が中学生の時に、事故で死んだんだ。…親父も、お袋も」

表情一つ変えない。

「遺産なんて殆ど無かつたからな。今も生活費切り詰めてる状態だし」

「…」

「手術費なんて出せるかよ。そんなことしたら、あいつらが…」
言いかけて、山川は口をつぐんだ。

そのまま、窓の外を見つめる。

今夜は、満月。

まだ少し肌寒い空気に、月光が銀色に差し込んでくる。

ヨ一コは、山川の横に並んで、その月を見上げた。
さやさやと風が吹く。

ヨ一コの髪がなびいて、鼻をくすぐった。

「…だから、泥棒してるの？」

月を見つめたまま、呟く。「生活費を、稼ぐために…？」

「…なんか悪いかよ」

山川が言った。

「俺、高校行つてねえから。こんな学歴じゃ、どんなに働いても良い収入にはなんなくて…盗みでもしなきゃ、生きてけねえよ…」

「…」

ヨ一コは、そつと山川に目を移した。

食べ盛りの弟妹の食費。

家賃、光熱費、水道代、教育費。

生活保護を受けていたとしても、これらを山川1人がまかなうのは並大抵のことではないだろう。

でも、だからって犯罪に手を染めなくても生きる方法はあつたかもしれないのに…。

ヨ一コは、再び月を見上げた。

どんな理由があろうと、罪を犯すことは許されない。自分も、いつかまた別の機会に山川がひつたくりをするのを見つけてしまったら、彼を逮捕しなければならぬ。

でも、それをしたら、残された弟妹たちは…。

ヨ一コは自分たちを救ってくれた山川の弟妹を想った。

麗司は高校をやめて社会に出なければならぬし、下の二人は施設に送られるかもしれない。

いずれにせよ、兄妹はバラバラになってしまう。

『俺は、捕まる訳にはいかねえんだよ』

いつか、確かに山川はそう言った。

あれは、こういう意味だったのかも知れない。

ヨーコには、救うことはできない。

どんなに可哀想でも、どんなに力になってあげたくても、それはできない。

できるのは、ただ、捕まえることだけ。

もしかしたら、誰かのささやかな幸せを壊すことだけ…。

「私があんたを捕まえたら」

ヨーコがつぶやき、山川がピクンと動いた。

「もしよ。もし、そんなことになったら…私には正義があるって、言える？」

「…」

「私は、街や人を守りたいって、幸せにしたいって思ったから刑事になったわ。けど…犯人を捕まえることで、悲しむ誰かがいたとしたら…私は、幸せを奪ってるだけ…」

「…ヨーコ」

「幸せを奪うことに、正義はあるの？私のどこに、そんな資格があるの？」

「ヨーコ！」

山川が大きな声を出した。ヨーコはびくと震え、山川を見つめる。彼は、怒ったような、それでいて笑いだしそうな表情で、ヨーコを見下ろしていた。

「バーカ」

山川が言った。優しい、声だった。

「お前のしてることは、正しいよ」

「…」

「大丈夫。お前は誰の幸せも壊さないから」

「…どうして、そう言えるの？」

すねたようにヨーコが唇を尖らせる。

「俺の直感に絶対正しいから」

山川がニツと笑った。

「どうやら、根拠はまったくないらしい。」

それでも、ヨーコは何だかほわん、とあたたかい気持ちになった。

「…ありがとう」

恥ずかしげに下を向いて言う。

すると、山川は面白そうにヨーコを覗き込んだ。

「そういえば、もう文句言わないんだな」

「え？何の文句？」

ヨーコが顔を上げて、首をかしげる。

「名前」

山川が言った。

「さっきヨーコって言ったのに、怒んなかった」

「あ…」

ヨーコははっとした。

そんなこと、全く気にも止めていなかった…。

「悪いな、桐原さん」

山川がヨーコから目を離す。

しかし、ヨーコは急に彼の腕をぎゅっとつかんだ。

怪訝そうに、山川が振り返る。

ヨーコは赤くなりながらも、しっかりと山川を見据えていた。

「もう…いいよ。ヨーコって呼んでも」

「…」

山川が一瞬、驚いた顔をした。

しかし、その表情はすぐに微笑みに変わる。

「お疲れ。ヨーコ刑事っ」

月は、いつまでもそんな二人を見ていた。

「岩波さん……」

角川が、ふらふらしながら呼んだ。

「ああ？」

面倒くさそうな声が、前方から返ってくる。

どうやら、上司はご機嫌斜めだ。

こんな時は、言動に気を付けなければ。

わずかな失言が、岩波の怒りの導線に火をつけてしまう。

角川は、大事をとって「何も言わない」ことに決めた。

重い足を引きずりつつ、上司の後ろをついていく。

ここは、多摩川沿いの遊歩道。

京王多摩川駅で電車を降りた二人は、右手に川を臨みながら、延々と歩き続けていた。

自転車をレンタルすればもっと楽だったかもしれない。

しかし、今の二人には自転車で乗って倒れないようにバランスをとることは出来ないように思われた。

歩くだけで足元がふらつき、大きく左右に身体が揺れてしまう。

そんな状態だった。

ヨーコ達よりもひと足早く井の頭公園を脱出した岩波達は、自力で本町署まで戻ってきた。

マドンナ達が次々に運ばれていると知っても、岩波は病院行きを拒否した。

「文春を一刻も早く助けてやらなきゃならねえんだ。俺たちに休んでる暇なんてねえよ」

岩波がそう決意した時、ペアを組む角川も従った。

勿論彼は病院に行くこともできた。

けれど、そうしなかった。刑事の1人での行動は、時に命取りにな

る。

井の頭公園で二人が助かったのは、お互いに助け合えたから。どちらか一方でも欠けていたら、冷たい水底で死んでいただろう。

それを思うと、角川は身震いした。

だから、岩波に従うことを決めた。

周囲には反対された。

「ザザなどは「ボスと一緒にいるなんて、あんた命が惜しくないの？」とまで言った。

けれど、決心は揺るがなかった。

少しでも、岩波の役にたてたら。

少しでも、事件解決の力になれるなら。

自分は、なんだって出来る。

…それに、角川は今、岩波のことを恐ろしいと思わなくなっている自分に気付いていた。

二人は、川面に映し出される朝の光に目を細めた。

川がこんなに美しいとは、いままで思ってもみなかった。

二人は真つすぐ、ある家を目指していた。

桜の大木の木陰にたたずむ、西洋風の家。

そこが、被疑者の家であるとヨーコから知らされたのは、夜明け前のこと。

一晩中、被疑者の男は黙秘を続けていた。

文春の居場所はおるか、名前すら吐かない。

その時、困惑する刑事達の前に、ヨーコと見知らぬ青年が現れたのだ。

ヨーコが被疑者を逮捕したと知っていながら、岩波は彼女を見て見ぬ振りをした。

気まずい空気がその場に流れる。

角川も気が気ではなかった。

一言くらいヨーコに言ってやって欲しかった。

が、岩波は無言だった。

沈黙を破ったのは、プリン頭の青年だった。

彼は男の顔を凝視し、岩波達にこう告げた。

「こいつは、佐藤ユリアの弟だ」

「誰だ、それは？」

岩波はヨーコを無視しながら山川を睨み付けた。

「それに、お前は……？」

山川は後の問いを完全に無視した。

「ヨーコ……じゃなくて桐原刑事が、この男の住みかを知ってるはず
です」

「？」

今度こそ、岩波はヨーコに目を向けない訳にはいかなかった。
嫌々、といった感じで口を開く。

「……被疑者は、どこに住んでる？」

うつむきがちだったヨーコの表情が、ぱあっと太陽のように明るく
なった。

……その表情を、川辺を歩く今も、角川は忘れることができない。

致命的なミスを犯してから彼女が刑事たちに見せた、初めての笑顔
を。

ヨーコから「天使の館」の所在地を聞き出した岩波は、すぐさま行
動に移った。井の頭線から京王線に乗り換え、ここまでやってきた。
そして二人は、桜の花散る館の、門の前に立った。

*

「おい、お前もつと速度でねえのか?!」

山川が後ろから怒鳴る。

「出ないわよっ!!」

必死にバイクを走らせながら、ヨーコが叫んだ。

免許をとってからのというもの、全くといいほど乗っていなかったバ
イク。

1人で乗るだけでも、事故を起こしてしまいそうぞドキドキするのに、後部座席に山川までもが乗っている。緊張で手のひらには汗をかいていた。

「早くしないと、あの岩波って刑事に手柄取られちまうぞー!!」
再び山川が叫んだ。

風が、声を後ろに吹き飛ばしていく。

「手柄つてー?」

バイクの轟音に負けないように、ヨーコは必死に大声を絞りだした。

「だからあ、」

山川が怒鳴る。

「佐藤コリアを逮捕してえ、文春を救出する手柄だよっ」

ガタン!!

バイクが大きく揺れた。

ヨーコが小さく悲鳴を上げ、山川は思わず彼女の腰に手を回す。

しかし、何事も起こらずにバイクは走り続けた。

「びっくりしたあ……」

ヨーコが浅い息のまま胸を撫で下ろす。

「びっくりしたあ、は俺のセリフだよっ」

山川があわてて腕をヨーコから離れた。

「死ぬかと思っただじゃねーか」

「おおげさなんだからっ」ヨーコがクスツと笑った。「おおげさじ

やねえっ」山川はまだドキドキしているようだ。

「お前といると、殺されかねないっ!!」

「…何よソレ」

バイクは、多摩川のほとりに出た。

そのまま、唸りを上げて突き進む。

「あのねっ!!」

ヨーコが山川をチラッと振り返った。

「あたし、手柄とか、どうでもいいんだ!!」

「まえっ!前見ろって!!」山川は気が気ではない。

あわてて目を前に戻し、ヨーコは続けた。

「早く、文春くんが助かれれば、それで良いの！」

「…！」

山川は、目をパチクリさせた。

ヨーコが、変わった。

彼はそう感じた。

つい昨日まで、自分のミスを帳消しにする、ただそれだけの為に事件を解決しようとしていたのに。

彼女の意識は今、自分の利益から遙か遠くへと向かっている。

被害者を助けること、

事件を終わらせること、

不安な表情を笑顔に変えることへと…。

二人の眼に、ひらひらと舞う一枚の花びらが映ったのは、そのすぐ後のことだった。

*

「佐藤ユリアだな」

玄関が開くなり、岩波は強引に中へ押し入った。

「!?!」

清楚に應對したユリアは、突然のことに棒立ちしている。

それをいいことに、岩波は勝手に家に上がり込んだ。「ちょっと!

何してるんですか!」

ユリアが叫ぶ。

しかし、岩波はそれを無視した。

行く先々で部屋のドアを開け、室内に顔を突っ込んで、文春の気配が無いか確かめていく。

「佐藤ユリアさん、ですね」

後から入ってきた角川が、丁寧にユリアに一礼した。すすけた背広の内側から警察手帳を取り出し、彼女に見せる。

「警察の者です」

「……」

「佐倉文春誘拐・監禁容疑ならびに殺人未遂現行犯で、あなたの弟が逮捕されたのは、もちろんご存知ですね？」

ユリアが、小さく頷いた。「……ニュースで見ました。本町署の刑事の方々が皆お怪我なさったとか」

「ええ」

「でも、この5年弟には会っておりません。」

タケルが逮捕されようと、私には関係の無いことです」

ユリアは早口に言い終えると、岩波を止めようと後を追った。

後ろで、角川が氷柱のような微笑みを見せているとも知らずに……。

「やめて下さい！」

ユリアの手が、岩波の腕を掴んで引き止めた。

岩波は振り払おうとしたが、ユリアは頑として離れない。

「…いくら刑事さんでも、人の家に勝手に上がり込むなんて。失礼にも程があります」

そう言うと、彼女は唇を震わせ、岩波の腕にぎゅっと力を込めた。

岩波はため息をついた。

…面倒くせえ。

彼の判断は素早かった。

ユリアが岩波を離す気配が無いと悟ると、すぐさま角川に向かって頷いてみせ、合図したのだ。

角川は、岩波が何を求めているか、即座に理解した。普段は鈍い角川だが、現場にいるという緊張感が刺激を与えているのだらう、彼の行動はスピーディだった。

ふらつく体で、それでも出来るだけ早くダッシュする。

岩波とユリアをやりすごし、角川は二階へと駆け上がった。

「！」

ユリアの表情が青ざめた。まさか、ここまで強引に家に入り込まれるとは思っていなかったのだらう。

彼女の動揺は、腕を通じて岩波にも伝わってきた。

岩波は、そのチャンスを逃さない。

ふっと力を緩めた彼女の手を振りほどく。

そして、一階でまだ調べていないリビングへと走った。

「やめて!」

ユリアが叫んでいる。

しかし、彼女は追っては来なかった。

二階へ上がるらしい、パタパタという足音が聞こえてくる。どうやら、「調べられては困るもの」は二階にあるらしい。

岩波は息を整え、手短かにリビングを見回した。

…早く二階に向かわなければ。

普段の状態なら、角川だけでもユリア位止められるだろう。しかし、今の角川は傷つき、弱っている。

ユリアが飛び道具でも出してきたら、ひとたまりもない。

岩波は、ササツとリビングを一周した。

大きな窓からは、泣き出してしまっそうな曇り空が見える。

ここには、文春の気配は感じられなかった。

しかし、岩波の目は、あるものに吸い寄せられていた。

…壁に貼られた、数枚の写真。

どこかの美しい海で泳ぐ、魚の大群。

そこに浮かぶ、シヌノーケルをつけた人影。

それが、この事件の容疑者である、ユリアの弟の姿だと、岩波には解った。

今よりも幼い体格だ。

そして、その写真の後ろから、紙のようなものが数ミリはみ出していた。

それを指で挟んで抜き取ってみる。

すると、隠されていたもう一枚の写真が姿を現した。…家族写真だ。海辺に4人家族が立っている。

2人の幼い子供　ユリアと、弟（容疑者）。

その後ろに、両親が立っている。

若い2人は、それぞれ子供の肩に手を置いている。

夏の日差しに照らされながら、みんな幸せそうに笑っていた。

岩波は、その写真から眼が離せなかった。

家族と共に笑う父親の顔に、見覚えがあったからだ。「まさか…」

岩波は呟いた。

…この事件は…。

*

角川は、ゼーゼーと息を切らして、二階の踊り場に倒れこんだ。
調子に乗って、走るんじゃなかった。

この家の螺旋階段は、想像以上に急な作りになっている。

それを登りきった今、弱っていた身体は、もう限界を迎えていた。
トントン、と階段を登る音がした。

次の瞬間、角川の視界に映ったのはユリアだった。

顔に表情は無い。

まるで能面だ。

「！」

何かそら恐ろしいものを感じ、角川の背筋に寒気が走る。
ユリアは何も言わない。

ただ黙って、手に隠し持っていたナイフを振り上げた。

「……」

角川は目を見開いた。

空を切るように、まっすぐナイフの切っ先が迫ってくる。

ぴたりと心臓めがけて…。

*

「うわあああ…！！」

角川の叫び声が響き、ぷつりと途絶えた。

「角川！」

岩波は飛び上がった。
見つめていた写真を握り締めたまま、リビングを飛び出す。
脱兎の如く、きつい傾斜の螺旋階段を登る。
岩波は、唇を噛んだ。

…うかつだった。

早く二階に上がるべきだったのだ。
写真に気をとられている間に、何が起こったのか…。

眩暈がする。

それでも、歯を食い縛って登り続ける。

必死だった。

とにかく必死だった。

角川。

どうしたんだ!?

頼む。

無事でいてくれ…!

登りきった時、岩波の目に映ったのは、予想もしていなかった人物だった。

ユリアの腕は押さえられ、ナイフが角川の胸に刺さる寸前のところで止まっている。

角川は恐怖のあまり、細かく震えていた。

しかし、その表情にゆっくりと、安堵の色がさしてきた。

「桐原さん…」

ヨーコが、ユリアを捻りあげたまま、角川に微笑みかけていた。

「き…きりはら…」

岩波は、思わずその場に硬直した。

その目線はヨーコから、倒れてはいるが生きている角川へと走る。

途端に、身体中の力が抜けていくかのような安堵感が岩波を襲った。

よかった。

角川は、殺されていない。よかった…。

一方で、ヨーコは息をつめてユリアの腕を捻りあげている。

「いやああっ！」

悲鳴を上げ、ユリアがナイフを取り落とした。

ガラン、と乾いた音を立ててナイフが床に転がる。

それを、横に控えていた山川が蹴り落とした。

ガラン、ガラン、ガラン…

ナイフは踊り場の柵から滑り落ち、階下へと見えなくなった。

「岩波さん！」

ヨーコが、ユリアをの腕を捕まえたまま叫んだ。

「逮捕してください！」

「！」

驚いた顔をしたのは、山川だった。

「…おいっ」

「何よ」

ヨーコがイラッと山川をにらみつける。

「なんか文句あるのっ!？」

「大アリだよ!」

山川が呆れた表情で言った。

「ヨーコが捕まえたんだろ。なんで自分で手錠かけねえんだよ」

「そ…そうですよっ」

床に倒れた体勢のまま、角川も声をあげる。

「早く逮捕してくださいっ。その女、また何をしでかすかわかりま

せんよ!」

しかし、ヨーコは動かなかった。

彼女の目は、岩波だけに向けられていた。

「逮捕してください」

彼女は繰り返した。

「岩波さん。あなたじゃなきゃ、ダメなんです」

「バカ!」

山川が怒鳴った。

「しのごの言ってる時じゃねえだろ!」

「黙ってて!」

ヨーコがピシヤッと怒鳴り返す。

同時に、外で雷がゴロゴロと音を立てた。

もうすぐ、嵐がくる。

桜を散らしてしまう、春の嵐が。

「岩波さん」

息を弾ませながら、ヨーコが呼んだ。

「私には、逮捕できません」

岩波の顔が、ピクツと引きつった。

ヨーコは続ける。

「この事件では、岩波さんが一番頑張ってきたんです。夜も寝ないで、怪我しても休みもしないで。」

ずっと被害者の為を思って働いてたんでしょ？

私がミスした時も、私は岩波さんにしか謝らなかつた。でも、岩波さんは真つ先に佐倉長官に謝りに行つたんですよね。昨日、筑摩さんから聞きました」

ヨーコの眼から、涙が一粒こぼれ落ちた。

「私は、岩波さんみたいに被害者のことを一番に考えたり、してま
せんでした。いつも自分のことばかり考えて。」

ミスした時だつてそう。文春さんに危険が及ぶことよりも、私自身の刑事生命の方が大事だつたんです」

山川は、思い出していた。散らかつた部屋の中で、ヨーコが叫んだセリフを。

『もう、私には将来なんかなくなつちやつたの！』

「私は、本当に刑事失格でした」

ヨーコが囁いた。

「そんなヒヨッコの私が、佐藤ユリアまでも捕まえるわけにはい
かないんです。誰よりも被害者のことを考えていた岩波さんが、逮捕
するべきなんです…！」

涙はとめどなくこぼれ、頬を濡らしていった。

遠くで雷が鳴っている。

岩波が、一步ヨーコに歩み寄つた。

ヨーコは岩波を見上げ、その険しい表情を見つめた。

バシーン…！！

岩波の平手が、ヨーコの濡れた頬を直撃した。

「！」

山川も角川も、ユリアまでもが息を呑んだ。

ヨーコは反対側の壁まで吹っ飛び、頬を押さえてうずくまった。

「おいっ！」

山川が岩波に詰め寄った。「何してんだよ！」

怒鳴り声と共に、岩波の胸ぐらをつかむ。

ほっそりした山川だが、それでも十分な威圧のオーラを放っていた。

「お前何様のつもりだよ！」

山川は明らかに怒っていた。物凄い剣幕で岩波に突っかった。

「ヨーコは、自分の手柄をお前に譲ってやろうとしてんだぞ！」

ヨーコがいなかったら、このちんまいのは殺されてた！それなのに、

お前は今何をした？！」

「そうですね！」

角川も、何とか立ち上がった。

山川に「このちんまいの」と呼ばれたので気分は良くないが、それでも岩波に抗議したくてたまらない気持ちだった。

「殴るなんて酷すぎます！」

しかし、岩波はたじろぐことは無かった。

山川を乱暴に突き放す。

「お前は、警察関係者ではないだろうが。え？」

岩波が、逆に山川に詰め寄った。

その手がポケットに滑り込み、手錠を取り出したので、ハラハラしながら見ていたヨーコはギョツとした。「関係ねえ奴が刑事の胸ぐら掴んだりすると、どうなるか知ってるか？」

岩波は、山川の鼻先で手錠をブラつかせる。

眼はギラつき、恐ろしい形相だ。

「公務執行妨害にしてやることだって出来るんだよ。…覚えとけ」

山川の顔は、蒼白だった。岩波への怒りと、逮捕への恐れが入り混じっているかのようだった。

岩波は動けないまま睨み付けている山川を再度突き放し、今度はヨ
ーコの前に立った。

「ヨーコは、震えながらも真つすぐ岩波を見つめた。

岩波は、それを見返した。2人の視線が、すれ違い続けてきた視線
が、正面からぶつかった。

「本当に」

岩波が呟いた。

「本当に被害者のことを考えたいのなら、おまえが逮捕すべきだつ
た」

「……」

「早く文春を見つけてやる為には、早くこの女を捕まえて居場所を
問いたださなきゃならねえ。

お前みたいに、誰が逮捕するとかにこだわってるようじゃ、時間が
いくらあっても足りねえよ」

また、雷が鳴った。

「お前はまだまだ失格刑事だよ」

吐き捨てるように言うと、岩波は呆然としているユリアをヨーコの
前まで引つ張ってきた。

「ヨーコは、涙を拭った。

岩波が乱暴に突き出した手錠を受け取り、立ち上がる。

そして、逃げる気力も無くして棒のように突っ立っているユリアを
見据えた。

「殺人未遂の現行犯で逮捕します」

天使の細く白い手首に、ガシャンと手錠がかけられた。

雷が激しく鳴って、雨が降り出す音がした。

嵐。

雨。濁流。

そんな中、一艘のゴムボートが、葦原の二画に静かに止まった。

天使の館から下流に下ること約4キロ。

そこに、ユリアの供述通り、隠された犬小屋があった。

薄汚い赤い屋根。

泥で汚れた壁。

誰かが棄てて行ったとしか思えない、そんな風貌。

ヨーコはボートから飛び降り、ねちゃねちゃした湿地を小走りした。雨で泥が跳ね、すでにボロボロになったスーツに染みをつけていく。それでも構わず、ヨーコは真つすぐ犬小屋に走り寄った。

犬小屋の丸い扉は、廃材の木で十字に打ち付けられ、引っ張っても開けることはできない。

「俺がやるよ」

ヨーコの後からやってきた山川が進み出た。

*

「…私たち家族は、10年前までオーストラリアで暮らしていました」

ヨーコと山川が、文春を保護するために天使の館を出て行ってしま

うと、俯いたままユリアが話しだした。

岩波は無言でそれを見下ろし、角川が手帳にユリアの言葉を書き留めていく。

「幸せでした。父は商社マンだったので、家も裕福でした。

私と弟のタケルは、父の赴任先であるオーストラリアで生まれ育ち、何不自由なく育ったんです。

その頃は、家族で何度も海に遊びに行ったりしました」

「それは、この写真に映っている海か？」

岩波が、しわくちやになった一枚の写真を差し出した。

先ほど、リビングに貼ってあった写真の裏から見つけたものだ。

砂浜。

幼い姉弟。

微笑む両親。

「…ええ」

ユリアが、かすかに笑みをもらした。

清楚な表情。

「でもこれが、家族で撮った最後の写真でした」

「え？」

角川がメモする手を止め、顔を上げた。

「最後？どうして…」

しかし、その言葉は手を挙げた岩波に遮られた。

「全て、話してくれるな？何故この事件を起こしたのか。すべて」

「はい…」

諦めきつてうなだれたユリアが呟いた。

外では、雷が鳴り響いている。

*

山川がジーンズから取り出したのは、マイナスドライバーだった。廃材の木と、犬小屋の扉の間にできた僅かな隙間にドライバーを差し込み、クルツと回す。

すると、隙間が不思議な程簡単に広がった。

あとは、そこに指を入れて廃材の板を引っ張るだけ。

バターン！

轟音を立てて廃材の板が外れた（はずみで、山川は後向きにひっくり返った）。ヨコは山川に構うことなく、犬小屋に駆け寄り、その扉をパツと開く。

「文春くん！」

こんなに狭い小屋の中で、たった一人で閉じ込められて、どんなに怖かったことだろう。

どんなに心細かったことだろう。

幼い子供が半目を開いてうずくまっているのを見つけたとき、ヨコの目に涙が浮かんだ。

「文春くん！」

呼び掛け、子供を小屋から抱きとるようにして出す。「文春くん、しっかりして！！」

必死に揺するが、文春の反応は無い。

まるで人形のように、揺すられるがままに動く。

「お願い！！目を覚ましてっ、文春くん！」

祈るように、ヨコは叫んだ。

涙はぼろぼろと文春の頬に落ち、雨と交ざって伝っていく。

「文春くん！起きて！」

…ごめんね。

私が、あんなミスをしたばかりに。

もっと早く助けてあげられたかも知れないのに。
ごめんね。ごめんね。

これから、償いの為に何でもするから。

だから、お願い…！

目を開けて…！

「文春くんっ…」

動かない文春を抱き締めたまま、ヨーコは地面に膝をついた。

「…起きて…目を開けて…っ」

ひたすら繰り返す。

山川も、文春の頭の傍にしゃがみこんだ。

泣き崩れるヨーコの背に、そっと腕を回す。

「ごめんね、文春…」

彼の呟きが、幼い子供の上に落ちた。

「ヨーコのミスの原因を作ったのは、俺だ…」

ヨーコが激しく首を横にふった。

雨粒が飛び散る。

「ちがう…私が、いけないのっ…全部、わたしがいけないのおっ…」

「ごめんね、文春っ…」

雷鳴が轟く。

稲妻が、カツと空を走る。「ごめんね…！…」

ヨーコが、文春を更に強く抱き締める。

それと同時に、顔をゆがめながら山川がヨーコの肩を抱いた。

凶暴に吹き荒れる嵐は、おさまりそうにない。

*

「10年前…私が中学三年生の時です」

ユリアが話し始めた。

出張でたまたま日本に帰った時、ユリア達の父親は、突然逮捕された。

吉祥寺のアパートで女子大生が殺された事件の被疑者とされたのだった。

証拠として、アパートから採取された「オーストラリアの海岸の砂」が挙げられた。

『日本とオーストラリアでは、砂の質が違う。』

オーストラリアの砂が見つかったということは、被疑者は最近オーストラリアから帰ってきた人物だ』

と、警察は発表した。

そして、ただそれだけの理由で、ユリアの父親は逮捕された。

知らせを聞いた時、ユリア達家族は愕然とした。

信じられませんでした。

父親は普段から清楚で、きちんとした人物だったからだ。

どんな間違いがあっても女子大生の部屋に押し入ったり、ましてや殺してなどいない。

そうユリア達は信じていた。

勿論、遠く離れた日本で、父親は無罪を主張した。

弁護士も、頑張って父の無罪を証明しようとした。

しかし、裁判は進み、決定的証拠も無いまま、父親は有罪判決を受けた。

ユリア達は、信じられなかった。

…どうして。

どうして、こんなことに。

あわてて帰国した一家を待っていたのは、さらに厳しい現実だった。父親は商社を解雇され、収入がぱったり無くなってしまったのだ。病気を患っていた母親は、無理をおして仕事につかなければならな

かった。

また、ユリアとタケルは、転入した学校で酷い虐めを受けた。「殺人犯の子供だから」という、ただそれだけの理由で。

日々が地獄だった。

住んでいた狭い家には、毎日のように嫌がらせの電話や脅迫状が届いた。

窓ガラスを割られることはしょっちゅうだったし、時にはゴミ捨て場に火を点けられた。

近所の人の目は冷たく、皆が一家を無視した。

まもなく、父は獄中で死んだ。

その知らせを受け取った母も、絶望のあまり卒倒してしまった。

もともと体調がすぐれなかったこともあり、母親も半年も経たないうちに息を引き取った。

姉弟は、たった2人で取り残された。

母の死亡保険金と、父が残してくれた財産があつたので生活には苦勞しなかったが、2人の心はボロボロだった。

嫌がらせを受けても、虐めにあつても、頼ったり甘えたりできる人はいない。

2人は住んでいた狭い家を引き払い、世間の目を逃れるように、この多摩川のほとりに家を建てた。

それが、この「天使の館」。

「辛かったけれど、私たちは何とか大学も卒業できました。

私とタケルで、決めتانです。昔のことは忘れて、前を向いて生きていこうって…それなのに」

ユリアはそこで話を切り、岩波と角川を見つめた。

その眼は。

睨み付けるような、怒りに満ちた光をたたえている。

「先月。許せない出来事が起こったんです……」

稲妻が光った。

それに照らされたユリアの顔は、般若のように殺気に満ちていた。

「許せない出来事が起こったんです…」
話すユリアの顔は、般若に似ていた。

角川の背筋が凍り付いた。美しい顔立ちの人が、こんな表情になるなんて。

それは、怒りの為せる業。ぶつけどころの無い、激しい激しい、怒りの波。

「女子大生殺人事件の真犯人が、自首したんです！」ユリアが、叫ぶように吐き捨てた。

十年も経って、真犯人が自首してきた。

それを知ったユリアとタケルは、愕然とした。

同時に、怒りが沸々とこみあげてきた。

父親は、本当に無罪だったのだ。

それなのに有罪判決を受け、挙句の果てに母親ともども死んでしまった。
つた。

自分たちも、受けなくてもいい嫌がらせを沢山浴びてきた。

それらは、全て警察が犯人を間違えたせい…。

やるせない気持ちだが、全身を沸き立たせる。

警察がミスしなければ、父も母も死なずに済んだのに。

今ごろ4人で、一緒に笑いあっていたかも知れないのに。

警察が、全てを奪った。

佐藤家の幸せを、すべて。

底知れない胸の痛み。

怒り。

悲しみ。

それらが頂点に達したとき、姉弟は決めた。

復讐してやる。

警察に、復讐してやる。

復讐して、自分たちの味わった苦しみを、わからせてやる…。

姉弟はたまたま、近所に警察庁長官が住んでいるのを知っていた。

そこで、ユリアは文春誘拐を企てたのだ。

愛する家族を失う苦しみを、警察関係者に知らしめてやりたい。

ただ、その一心で。

一方、弟のタケルは刑事達を壊滅させる方法を思いついた。

逃げ場の無い場所に刑事を閉じ込め、一気に爆弾で殺す作戦。

これなら、殺される刑事だけでなく、残された全ての警察関係者に
衝撃を与えられる　！

2人は、早速計画を実行に移す。

タケルは、文春がいつも河川敷で野球をしているのを知っていた。

葦の影に隠れたまま、何日も川で待ち伏せし、誘拐の機会を狙った。

三日前、ついに文春がボールを探して川辺に現れる。タケルは、逃げようと必死に暴れる文春をボートに乗せ、下流の犬小屋に閉じ込めた。

あとは、憎い刑事達を誘き寄せ、一挙に殺すだけだった。

タケルは監視カメラに映らないよう、マンホールを使って街を行き来し、脅迫電話を繰り返した。

オーストラリアでのダイビングの経験が、役立ったことになる。

全ては、思い通りだった。すべてが…。

「あの女刑事が来るまでは」
ユリアが呟いた。

桐原ヨーコ。

タケルの留守中に彼女が現れた時、ユリアの中で何かが狂った。

『不審なボートを見かけませんでしたか？』

ヨーコは、そう聞いた。

「！」

ユリアはパニックに陥った。

どうして知っているの？

私が誘拐に使ったトリックを。

まさか、全てバレてしまっているの？

心にやましい事を抱えているとき、人はちょっとしたことにも過敏に反応し、追い詰められたと勘違いしてしまうものだ。

ヨーコと出会ったときのユリアが、まさしくそれだった。

捕まる。

その恐怖は、ユリアを一瞬のうちに、激しく貫いた。

…捕まらないためには、どうすればいい？

パニックを起こしている頭で、ユリアは考えた。

…殺すしかない。この刑事を。

ユリアは「不審な男を見た」と嘘をつき、ヨーコ達を招き入れた。
紅茶に睡眠薬を入れ、ふらついてきたヨーコを殴る。しかし、山川に手を出すことはできなかった。

彼は睡眠薬入りダイジリンを飲まなかったのだ。

覚醒している若い男を、ユリア一人で殺せる筈もなかった。

山川が館を飛び出してから少しして。

ユリアは、とどめを刺そうと、倒れたヨーコのもとに行った。

しかし、そこには既に女刑事の姿はなかった。

窓が開いているところからみると、逃げ出したらしい。

ユリアは、そこでようやくハッと理性を取り戻した。とんでもない過ちを犯したことに気付いたのだ。

これでは刑事達に、自分が犯人であることを教えてしまったようなものだ。

しかし、もうどうすることも出来なかった。

夜のニュースで、井の頭公園での一件と弟の逮捕を知った。

そして先刻、岩波達の訪問を受けたのである。

ユリアは、自分を見失っていた。

そこにあるのは、ただ、憎しみだけ。

一人でも多くの警察関係者を傷つけたい、その思いだけ。

彼女は、角川をも殺そうとした。

しかし、できなかった。

振り下ろしたナイフは、なぜか天窓から侵入してきたヨーコによって止められた…。

「あなた達警察が！」

ユリアが泣き叫んだ。

「私から全てを奪った！家族も、普通の生活も！！」

岩波と角川は、ただユリアを見つめるしかなかった。失われた幸せを憎しみに変えた、女性の姿を。

「私は、あなた達を許さない！！」

これから先も、永遠に……」ユリアが、ぐったりと崩れ落ち、小さく鼻を噉った。

「恨んでください」

角川が言った。

ユリアは、泣きながら床ばかりを見ている。

角川は続けた。

「全て、私たちのせいですから。恨まれて当たり前です」

雷が、遠くで鳴った。

「……ただ。これだけは知っておいてください。

あなたに、人を傷つける権利は無い」

「……」

「佐倉長官も、奥さんを亡くしているんです」

角川の声が淡々と響いた。「唯一の家族である文春くんが誘拐された時、どんなに苦しかったか。

……あなたなら、わかるでしょう？」

「……」

ユリアは、無言だった。

収まりきれない怒りが、唇を青く染め、全身はガタガタと震えている。

「あなたには、復讐よりも果たさなきゃなんねえことがあった筈だ」

岩波が、重い口を開いた。「世間に、冤罪の事実をもっと広く知らしめることだ。そうしたら、第二の佐藤家は生まれなかった。

それに、あの世にいるあなたの父親も救われてたんじゃねえのか？」

「……そんなこと……」

ユリアが低い声で呟き、ゆらつと立ち上がった。

「刑事になんか、言われたくない……」

雨が、窓ガラスを打った。「父を殺したのは、あなたたち刑事なのよ…………」

空が、泣きじゃくっている。強く、激しく、叩きつけるように。
まるで、フロアの天井を叩いているように。

いつの間にか、
空が、風が、
遠ざかっていく。
雷が、黒雲が、
消えていく。

あっという間に過ぎ去った、春の嵐。

「…ママ…？」

ヨーコの腕の中で、小さな声がした。

掻き消されそうな、微かな声。

それでも、その声は真つすぐ2人の耳に届いた。

「あ…」

山川が呟き、ヨーコは涙に濡れた顔を上げた。

きつく力をこめた腕の中。今まで身動き一つしなかった文春が、ぼんやりと2人を見つめていた。

「…ママだよ…？」

必死に呼吸している、小さないのち。

わずかに少年の唇から漏れる、懸命に生きようとする証。

ほんのりとヨーコを暖める体温。

「ふ…ふみはる君…」

ヨーコは、泣き笑いしながら文春を覗き込んだ。半開きだった少年の眼は、今、ぼんやりとヨーコを見上げている。

「ママだあ…」

文春の口元が、きゅっと上がった。

「あいたかった…」

どうやら、少年はヨーコを死んだ母親と錯覚しているらしい。

けれど、そんなことはどうでもよかった。

文春は、生きている。

生きている…！！

その喜びだけが、ヨーコを満たしていく。

母親が子を守るように、ヨーコは少年をしっかりと抱いた。

…誘拐されてから4日もの間、よく我慢してたね。

私がミスさえしなければ、もっと早く助けてあげられたのに…ごめんね…。

これから元気になったら、うんと私を叱ってね。

でも。

よかった。

ほんとに良かった。

文春くんが生きてて、本当に良かった…!!

柔らかく風が吹いた。

「ママも」

彼女は、文春に頬を寄せた。まるで、母親のように。

「ママも、あいたかったよ…文春…」

そんなヨーコを見つめながら、山川も笑みを浮かべていた。

ようやく顔を出した太陽が、葦原を光の色に染めていく。

水面に反射したその色は、舞う花びらのように大気に降り注いだ。

「おひさまが、祝福してるよ」

山川が、2人に優しく声をかけた。

「さあ、帰ろう。ずうっと待ってる人の所へ…」

*

「文春!!」

病院を爆発させてしまうような、金切り声。

その声の主…佐倉長官は、知らせを聞いた途端に飛び上がった。

見舞いに来た部下たちに挨拶もせず、つむじ風のようにバビューンと走り去る。一瞬の出来事だった。

「すげー…」

「速え…」

取り残された部下たちは、の猛烈さに、顎が外れてしまっている。

長官は、病院の廊下を疾走した。

はずみで、点滴を打ったまま歩いている人や、カルテを抱えた看護士を突き飛ばす。

いつもなら丁重に謝るところ。

しかし、今の長官には、それはできない。

長官の頭の中には、愛する息子のことしか頭に無い。

ふみはる。

ふみはる。

ふみはる。

この4日間、呼び続けた名前。

…もうすぐ会える…！

そう思うだけで、憔悴しきっていた身体がピンピンと動きだす。

スライディングするかのように廊下の角を曲がり、面会客たちをバタバタと転倒させた。

あちこちで悲鳴が上がる。

その病室が、真つ正面に見えた。

「ふみはるー！ー！！」

キキーツ。

ブレーキ音を立てたが、間に合わなかった。

ドオン！！

ものすごい轟音とともに、佐倉長官はドアごと病室に突っ込んだ！

「ギヤアアッ！」

岩波と角川が、大声を上げて飛び退く。

その直後、ドアもろとも長官が倒れこんできた。

ドオオオン…

もうもつと埃が舞う。

今まさに角川が座っていた場所は、ドアの下敷きになった。

「ちよ、長官！」

目を皿のように丸くして、角川が叫んだ。

顔がひきつってしまっている。

岩波はと言えば、モアイ像のように石化して壁に貼りついていた。

しかし、長官はそんなこと気にもとめない。

「文春…！！」

長官が、白い子供用ベッドにヨロヨロと歩み寄った。文春が、大きな瞳で父親を見つめている。

一瞬の間。

そして、親子はワッと抱きついた。固く固く、互いの背を抱き締める。息が詰まってしまふ程つよく、激しく。淋しかった時間を、取り戻すように。お互いを安心させるように。もう、二度と、離さないように……。

抱き合うだけで、全てが満たされた。

「ただいま、パパ」
文春が嬉しそうに言った。長官は、息子をひたすら抱き締める。
「おかえり……」

岩波が、床にズルズルと崩れた。ようやく石化が溶けたらしい。しかし、顔はまだモアイそっくりに固まっている。それを見て、角川は思わずクスツと笑った。
「岩波さん、かわいいですよ」
「なんだと！俺にむかって“かわいい”だとお！？」しかし、岩波はそれ以上キレなかった。

ここは、親子の再会の場所。
怒鳴り声のBGMなんて、あつてはならない。

「あとで、覚悟しとけよ角川あ……」
低い声で、一応おどしておいた。

「あのね、パパ」

無邪気に、文春が言った。「僕のことね、ママが助けてくれたの」「え？ママ？」

何かの間違いだろう、と長官は首を傾げる。

それが伝わったのだろう、文春がプウツと膨れた。

「ホントだもん！ママが助けてくれたんだもん！！」「で、でも文春。ママは、お空にいるんだよ？」

長官は困って、苦笑いした。

母親が死んだということは、文春も充分わかってはいるはず。それなのに、どうして今更こんなことを言うのか…

「ママね、言ったんだよ」文春が、ニツコリ笑って父親を見た。

「文春がね、あいたかったって言ったの。」

そしたらね、ママがね、言ったの。

“ママも、あいたかった”って

「…！」

長官は、全てを理解した。桐原刑事。

文春を救ってくれた刑事。彼女が、そう言ってくれたのだろう。

しかし、長官は心のどこかで、亡き妻を思い浮かべていた。死ぬ間際まで、文春のことを思っていた妻。

『文春を、守ってね…あなた…』

…おまえとの最後の約束、守れたよ…。

長官は、零れ落ちそうになる涙をこらえ、強く文春を抱いた。

桐原ヨーコの発した言葉は、亡き妻からの伝言のように、長官には思えたのだった。

春の柔らかな温もりが、病室をふんわりと包み込んでいた。

「冤罪、だったんですね。ユリアさんのお父様」

ヨーコが、つぶやいた。

「ここは、留置場の中。」

薄暗く不気味な空気が漂っている。

防弾ガラス越しに向かい合ったヨーコとユリアの顔は、白く幽霊のように浮かび上がって見えた。

「冤罪が、あなたの家族を壊してしまっただんですね…角川くんから聞きました。だから、あなた達が刑事を皆殺しにしようとしたことも」

「…」

ユリアは、目を上げない。地の底を見ているかのように、彼女の瞳は光を失っていた。

「でも…どんな理由があろうと、あなたが人を傷つけたことに変わりはありません」

ヨーコは、喋り続けた。

「ザザ先輩は回復して、もういつも通りチャキチャキやっています。」

でも、松田さんは未だに立てません。現場復帰には、まだまだかか
るでしょう」

「…」

「ユリアさん。」

私は、あなたに知ってほしいことがあるの」

ヨークは、更に続けた。

「あなたは、こういう風に思ってるんじゃないかしら。」

刑事は、ただ人を捕まえては脅し、傷つける存在だと」

「…」

「確かにそうよ」

ヨークは、俯いた。

「悲しいけど、そうなの。理由なく罪を犯す人は殆どいないのに、
容疑者の動機や感情なんて、汲み取って上げられない。」

「できるのは、捕まえることだけ。」

「ミスをすれば、いろんな人を傷つけるわ」

「…」

「冤罪なんて、その典型。でもね…」

ヨークは、膝の上で、ぎゅっと拳を握り締めた。

「わたしは、あなたと約束したい。」

今はまだ、未熟だけど…、私はいつか、被害者だけじゃなく、容疑
者のことも汲み取れる刑事になりたい。どうして事件を起こしたの

か、なぜ罪に手を染めなきゃいけなかったのか。
私は、それを考えられる刑事になりたい」

ユリアが、顔を上げた。

光の無い眼差しが、ヨーコを捕らえた。

「容疑者の声を真つすぐ聞くことができれば。

そしたら、冤罪なんて起こさなくて済むわ。

きれいごとって笑われるかも知れないけど、でも、私はそういう刑事になる！！約束する！！」

「…どうして、その約束を私としたいの？」

ユリアが、ちよつとだけ笑った。

「あの山川って刑事と約束すればいいのに。
相棒なんでしょ？」

「あの人は、刑事じゃないわ。相棒でもない」

ヨーコが、ユリアに答えるように笑った。

「でも、私はあの人から、大切なことを教わった気がするの。
本人には、言えないけどね…」

ヨーコは、小指を差し出した。

ガラス越し、ユリアの正面に。

「私は、あなたとタケルさんの逮捕を、ムダにはしたくないの。」

お願い。

約束させて。

二度と、こんな悲しい冤罪を起こさないって

ヨーコの瞳は、どこまでも真つすぐだった。

強い光の眼差しは、ユリアを奥底まで貫いた。

「…わかったわ。約束よ」

ユリアが、背筋をのばした。

いつもの清楚な微笑みが、わずかに浮かんでいた。

ガラス越しに、2人の小指が触れ合った。

その時、ユリアの脳裏に蘇ったのは。

あの夏の日の、青い青い海と、幸せいっぱいには笑う家族の写真だった。

Mr. Justice 第一部は、これにて完結です。(^^)
ヨコちゃんと“あの人”との関係は、どうなるのか?!?

引き続き、第二部も連載します。

第二部では、第一部で触れられなかった恋の要素をふんだんに取り入れる予定、です!!

が：私奥山メイは、大学受験のシーズンを迎えてしまいましたw (。O。)w

そのため、第二部連載は三月〜となります。

それまでは番外編のみの連載となりますが、そちらも是非！読んでみてくださいね(宣伝中。笑)

本編より三年前の、切ない恋物語です。

では、本編でまた会う日まで…忘れないで下さいね(笑)!!

「山川さん」

受付で、ナースが呼んでいる。

「はい」

のんびりとした返事。

彼は、読みかけの雑誌を長椅子に置いて、立ち上がった。
これから、全てが始まる。

*

「無事に終わったのかなあ……」

春限定・苺クリームフラペチーノを口にしながら、ヨークが呟いた。

ここは井の頭公園に程近いスターバックスコーヒー。ヨークは、角川と並んで、窓際のカウンターに腰掛けていた。

「大丈夫ですよ、彼は」

角川は呑気にエスプレッソを啜った。

「額に怪我したあとなのに、桐原さんを抱えたまま、天窓から天使の館に侵入する体力の持ち主ですからね。」

手術くらい、なんてことないですよ」

「そうだったらいいんだけど……」

ヨークは表情を曇らせた。

山川が、怪我の手術を受けることになったのは、つい昨日のことだ。
一般人である山川の事件解決への協力を知った佐倉長官が、手術費

用を出すと申し出たのだ。

山川は、最初は丁重に断った。

こんな大金、貰うわけにはいかない、と。

しかし、佐倉長官は引き下がらなかった。

「君は文春の命を救ってくれたんだ。

何か君にお礼をしなければ、私は落ち着けないよ」

「…」

「…費用のことが、そんなに気になるのかい？」

「はい」

山川は口籠もりながら、しかしはつきりと長官を見つめた。

「俺の力じゃ、とてもじゃないけど、こんな大金返せないっす」

長官は苦笑いした。

「返さなくていいんだよ。お礼なんだから」

「…でも…」

山川は、居心地悪そうにモゾモゾした。

今まで、こんな風にお金を貰ったことなど無かった。ましてや、弟妹の養育のためではなく、自分のためのお金。

「そんなに、気になるのかい？」

長官が優しく声をかけた。青年は、小さく頷く。

すると、長官はチラツと横にいたヨーコに目をやり、ほほえんだ。

「じゃあ、ごうしよう。」

もし、また何か桐原くんが悩むような事件があったら…今回のように、君が支えてやってくれないか。

これなら、君も“お金を貰った”という気はしないだろう?」

こう言われてしまうと、山川も拒めない。

ただどしく「ありがとうございます」と告げた。

ヨーコは、安心していった。山川が痛みをこらえてムリしてでも、治療を拒み続けていたのが気に掛かっていたからだ。

けれど、安心すると同時に深い不安も、ヨーコの心を覆っていた。

怪我して以来、ずっと無茶して動いてきた山川。

すぐに治療しなかったせいで、悪化してはいないだろうか。

治らない、ということはないだろうか。

ひよっとして、麻酔をかけられたまま、二度と目を覚まさなかった

ら…!!

そこまで大変な怪我ではないのに、ヨーコの心配はつのるばかりだ。さつきから何度も腕時計に目をやるのも、その気持ちの表れ。

「もう、二時間が経ってる…」

ピンクのルージュをひいた唇で、呟いた。

「そういえば、桐原さん」角川がエスプレッソのマグで手を暖めながら口火を切った。

「…岩波さんのこと。気にしてましたよね。怒ってるんじゃないかって」

「…う、うん…」

いきなり話題が苦手な岩波のことになり、ヨーコはちよっぴりうろたえた。

「やっぱり、怒ってるでしょ…?」

おそろおそろ、訊ねる。

ミスを犯した時、ヨーコを怒鳴り付けた岩波。

天使の館では、怒鳴るばかりではなく、ヨーコの頬を叩いた。

…わたし、岩波さんに嫌われてるのかな…。

事件が終わった今も、そう感じずにはいられない。

しかし、角川は氷柱のような凜とした眼で、ヨーコに笑いかけた。

「大丈夫。岩波さんは、ぶっきらぼうなだけですから。本当は、桐原さんのこと大切に思ってますよ」

「……」

信じられない、という顔で、ヨーコは角川を見つめ返す。

岩波が、ヨーコを大切に思っている？

そんなことが、有り得るんだろうか？

「ウソじゃないですよ！」あわてて、角川が言った。「ホントですって！私、聞いたんですからっ」

「何を？」

ヨーコは、訝しげに角川を見た。

角川が岩波とペラペラ喋るといっただけで、信じがたい話だ。

ヨーコの表情に、角川が言い訳した。

「もちろん、天と地がひっくりかえっても、岩波さんは自分からそんなこと言ったりしませんよ？」

私が聞いたのは、そのう…岩波さんの、うなされ声で

「は、はあ!？」

ヨークは吹き出した。

「何それっ」

しかし、角川は真顔だった。

「井の頭公園で、岩波さんが気を失った時のことです。彼、悪夢でも見てみたいで、すぐくうなされてたんです」

「あらあら。岩波さんでも悪夢って見るのねえ」

「ちゃんと聞いて下さいよおっ！」

角川が膨れた。

「岩波さん、必死に叫んでたんです。」

『桐原、早まるな！桐原、戻ってこい、桐原！！』
つて。

何度も、何度も」

「…」

ヨークはぱちくりと瞬きした。

「本当に嫌いな人の名前を、あんなに必死に呼ぶなんて…ありえませんよ」

角川が言った。

「岩波さんは、桐原さんを嫌ってなんかない。

本人も気付いてないかも知れませんが、大切に思ってるはずですから、一人前の刑事に育てるために、厳しくあたるんですよ」

「…」

ヨークは、ぼんやりと聞いていた。

…今の話は、本当なんだろうか？

角川の思い違いではないのか？

けれど、角川が嘘をついているとも思えない。

第一、彼は上手に嘘をつける人間ではないのだ。

じゃあ、今の話は、真実？

そう考えると、不思議に呼吸が楽になった。

重くのしかかっていた胸のつかえがとれたようだ。

何だか元気が湧いてくるような気さえする。

「…信じるわ」

ヨーコはフツツと笑った。「岩波さん、そんなこと言ったんだ…」

「はい」

角川がニツコリした。

「あ、でもこのことは岩波さんには内緒ですよ？」

「わかってるわよ」

ヨーコがニヤツとした。

その時。

握っていた携帯電話が鳴った。

着メロは、電子音の『ムーン・リヴァー』だ。

ヨーコは、パツと電話に出た。

…一瞬強ばっていた表情が、みるみるうちに輝きだす。

まるで、太陽のごとく。

「山川圭司のバカアッ！」
叫ぶなり、彼女は思わず立ち上がった。

こらえていた涙が、安心と共にあふれでる。

それを拭おうともせず、彼女は泣き笑いしながら怒鳴った。

「ドアホっ！マヌケ！」

許さないからあ！こんなに心配させてえっ！！」

『あれっ、ヨーコが心配してくれてたんだ？意外だなあ』
青年の明るい声が、通話口からもれて角川にも聞こえた。

まるで、ニヤツと笑った顔が思い浮かべられるような、そんな声だった。

Mr・Justice 完

第二部に続く！！

「え？桐原さん、彼氏いるんですか！？」

驚いた角川の声が、ファミレス中に響き渡った。周りの客達が、じろじろとこちらを見てくる。

「んもうつ、角川くんっ！声が大きい」
顔をしかめて、ヨークがたしなめた。

「す、すいませんっ」
あわてて、角川は小さくなる。それが何だか可愛らしくて、ヨークはクスツと笑った。

初夏の日差しが、本町署に程近いファミレスに差し込んでいた。窓越しに、暖かさが伝わってくる。

文春誘拐事件から、早くも三ヶ月。ここ何日か、珍しく何の事件も起こっていない。久しぶりに、多忙な毎日から解放された二人の新人刑事　　ヨークと角川は、向かいあつて席につき、かき氷を口に運んでいるところだった。

ヨークはブルーハワイ、角川は宇治金時。

ちょっとジャリジャリとして固めの氷をすくいとり、口に運ぶ。
ひんやりとした食感は、すぐにハラリとほどけ、溶けて消えていく。

「あたしに彼氏がいるって、そんなにシヨクなの？」

不機嫌そうに、ヨーコはスプーンを氷の山に突き刺した。氷は、ざくつと音をたてて、スプーンを受けとめる。

「どーせ、あたしは色気も何にも無い女ですよ。彼氏がいる可愛い女の子には、見えませんよーだ」

「いえ、そんなつもりじゃないんですよ！」

角川があせあせと弁解した。

「ただ、そのう…普段、桐原さんが全くそつという話をしないので…
てつきり、いないのかと」

「いるわよっ！」

ヨーコは、鼻息も荒く、スプーンをかき氷から引き抜いた。

溶けかかった氷に刺激を与えると、どうなるかというところ…

「あつ、ああーっ!!！」

ヨーコの叫びも虚しく、かき氷の山は無惨に崩れ落ちた。テーブルの上に、氷の白と、ブルーハワイの青いシロップが広がっていく。

「これ使って下さい！」

とつさに、角川は自分のハンカチを差し出した。きちんとアイロ
ンがかけられ、四隅を合わせて折ってある、グレーのハンカチだ。

「え、いいの？」

困惑した顔で、ヨーコが尋ねた。

「シロップなんて拭いたら、ハンカチ台無しだよ？」

「構いませんから。早く」

角川は、ハンカチをヨーコに押しつけた。

「桐原さん、どうせハンカチ持ち歩いてないでしょう?」

「おっ。よく知ってるね」

ヨーコはニッコリしてハンカチを受け取った。そして、シロップをこれ以上広げてしまわないように、そうつと拭き取っていく。

「ハンカチなんて面倒くさいものは無いよ。アイロンかけなきゃいけないしさ」

「面倒くさい、ですか?」

角川は苦笑いした。

「そうかなあ。トイレで手を洗ったとき、ハンカチが無いと困りませんか?」

返ってきたヨーコの答えは、几帳面かつ綺麗好きな角川には、失神してしまうほどシヨックだった。

「手を洗わなきゃいいじゃない?」

桐原さん。

それ…汚い…。

角川は、強ばった表情で、なんとかハハハ…と笑ってみせた。

「それにしても、桐原さんは全然彼氏の話をしないですね。独身かと勘違いしてましたよ」

なんとか、角川は話の流れを元に戻した。
「どんな方なんですか？」

シロップを拭き取りおわったヨーコの手が、一瞬ピクツと動いた。
「うーん…何て言えば良いんだろなあ」
小さく首を傾げ、考えこむ。

「とにかくカッコいいのっ。優しくて、包容力があって、でも強く
て…あっ、顔もイケメンなんだよっ」

「おおっ！」

角川が感嘆して、目を見開いた。

「すごい！まさに、理想の男ですねっ？」

「でしょー？」

ヨーコはニヤツと笑う。そして、グシヨグシヨのシロップまみれ
になってしまったハンカチを手に、立ち上がった。

「ハンカチ洗ってくるねっ」

「あ、どうも…」

角川は律儀に会釈した。

お手洗いに向かうヨーコの背中が、何となく、今までと違って見
えた。

…桐原さんの彼氏、か。 何だか気になるな…。

カッコよくて、優しい男らしい。一度、見てみたいものだ。

そう考えてしまってから、角川はギョツとして瞬きをした。

「な、何を考えてるんだ、僕は。桐原さんの彼氏なんて、僕に何の関係も無いじゃないか…」

自分の不思議な思考回路に驚きながら、彼は口いっぱい宇治金時を詰め込んだ。

が、これが間違いだった。

「くうっ。キーンとするう！」

*

一方、ヨーコはお手洗いでハンカチを水洗いしながら、ボーツとしていた。

水はどンドン流れていくのに、手は全く動いていない。

彼女の頭の中で繰り返し蘇るのは、『あの人』の言葉だけだ。

愛してるよ…。

幻のように、エコーをひく言葉。

夢現で聞いた言葉。

嬉しくて嬉しくて、たまらなかった言葉…。

知らず知らずのうちに、水道水に温かい水滴がポツリと落ちて、
交じっていた。

吉祥寺本町署。

デパートや様々なショップが立ち並ぶ大通りに面した、モダンで小綺麗なビルディングが、それだ。

一階に受付があり、二階フロアには刑事達のデスクが並んでいる。三階には会議室。四階、最上階である六階は、多目的室や留置場が占めていた。

刑事達が暇を持て余していた、ある夏の午後。

事件は、二階フロアで起こった……。

「えええええッ!?!」

フロアを渦巻く、悲鳴にも似た叫び声。刑事達は硬直し、ある者は壁にへばりつき、ある者はヘナヘナと力なくその場に崩れる。

叫び声を上げずに平静を装ったマドンナですら、自分の見た光景を信じられずにいた。

刑事達の視線の先にあつたのは、思いがけないカップル。男が女に寄り添い、手を繋ぎ合って現れた二人は、いかにも幸せそうにフロアの真ん中まで進み出た。まるでピンクのキラキラしたオーラが

漂っているかのようだ。

刑事達はただ見つめることしか出来なかった　意外すぎるカ
ップル、松田とザザの姿を。

「フフ、皆ビツクリしてるよ」

楽しそうにザザが言って、大きく凜々しい瞳で松田を見上げた。

「まっ、当たり前だよ。誰も、あたし達が付き合ってるなんて知らなかったもんね」

「いやいや。男まさりだったザザが女らしくなったから、皆見とれてるんだよ」

松田がニッコリと彼女に微笑み返す。

まさに、そのとおりだった。

「ザザ先輩…!?!」

口をパクパクさせながら叫んだのは、ヨーコだ。

「先輩がスカート履いてるの、初めて見ましたっ」

「どお？似合う？」

少し伸び始めたショートカットの髪を掻き上げ、ザザがその場でクルンと一回転する。すると、パステルブルーのミニスカートが、スタイルの良い彼女の体を覆うように、ふわんと広がった。

ザザは、今までジーンズが大のお気に入りだった。『お堅い行事』の時も、決してスーツに身を包むことなく、ジーンズ姿で現れた。お陰で岩波からこっぴどく叱られたのだが、本人は涼しい顔だった。何事にも動じず、シャキシャキと働く男まさりの刑事。それが、今までのザザのイメージだった。

それなのに、今日の彼女はスカート姿。それも、女性らしいレースをあしらった、可愛いスカートだ。

この突然の変化に、本町署の刑事達が驚かない筈がない。「どっ、どっして…」

男性刑事達は息を呑み、ただただポカーンとしている。

すると、松田が愛しそうにザザの肩を抱き寄せた。そして真面目な表情を作ると、咳払いし、勿体ぶって宣言した。
「えー、皆さん。私・松田孝一と新潮ザザは、このたび婚約致しました!」

一瞬の沈黙。

松田の言葉を理解するまで、皆少し時間がかかった。そして…

「エエエエええ?!」

再び、一同の叫び声が、本町署ビルを揺り動かしたのは言うまでもない。

*

『婚約・シヨック』は暫くの間、大混乱を巻き起こした。暇を持って余っていた刑事達は二人を祝福しつつ、詮索の目を向けていた。いつ二人は付き合いだしたのか、松田の何がザザを変えたのか、などなど。

皆がザザと松田を質問攻めにし、写真まで撮り出したので、二人はマスコミに包囲された芸能人カップルのようになってしまった。

ザザは逃げるように女子トイレに駆け込み、電気を消した。が、甘かった。なぜなら、そこには『スクープ記者』が待ち構えていたから。

「せんぱいつ。いつから松田さんと…?」
瞳を悪戯っぽく輝かせながら個室の一つから忍び出てきたのは、ヨーコだった。暗い中にボウツと白く彼女の顔が浮かび上がっている。

「げっ! なっ、何でこんな所に潜んでるのよ!」
美しい顔を歪め、ザザが逃げ腰になる。

「それに、幽霊みたいに出没しないでっ。気味悪いわよ!」

ザザは、オカルトが大の苦手なのだ。以前、ホラー映画『ゴング』を観に行ったことがあるが、ザザはヨーコにしがみついたまま、スクリーンに眼を向けることすら出来なかった。

「いいじゃないですか、先輩。女同士で恋のお話に花を咲かせましようよっ」

ヨーコはニヤリと笑い、パツと懐中電灯で自分の顔を照らす。不気味に、彼女の笑顔がザザに迫った。

「ぎゃああ!!」

悲鳴を上げるや否や、ザザは物凄い勢いでトイレから駆け出していった。パステルブルーのスカートが起こした僅かな風だけが、ヨーコの周囲に残る。

「…まったく。先輩ったら、つまんないのー」

苦笑いしながら、ヨーコはトイレの電気を点けた。

「でも…うらやましいな。婚約、かあ…」

眩いた一瞬、彼女の瞳が切なげに伏せられたことを…誰も、知らない。

「ザザと恋仲になったのは、僕が入院していた時からなんだ」
刑事達に取り囲まれ、恥ずかしさに顔を赤らめながら、松田が話
しだした。その横には、トイレから逃げ出てきたザザが寄り添っ
ている。

春、井の頭公園で起きた事件に巻き込まれた松田は、ザザを庇っ
て大怪我をした。一時は、生死の境を彷徨ったほどだ。

「ザザが、毎日僕のところに通ってくれてさ。それで、こういう仲
になったんだ」

松田が優しくザザの肩を抱きながら言う。

長髪の高橋刑事が、怪訝そうな顔をした。

「…ということは、二人はまだ恋仲になって三ヶ月位でしょう？婚
約するには、まだ早くありませんか？」

「そうよ」

マドンナも口を挟む。

「もう少し時間をかけて付き合ってみるのも手よ。スピード結婚し
たカップルって、大抵がスピード離婚するんだから」

しかし、松田は首を横に振った。

「いや、これでいいんです。僕は、ザザを選んだことに間違いはな
いと確信していますからね」

周りの刑事達が、感嘆の声をあげた。

「それにねっ」

「ザザも話しました。」

「あたし達、こういう職業でしょ。ちよつと大げさだけど、いつ死んでもおかしくないじゃない？だから、好きな人とはすぐに結婚しておきたかったのよ」

なかなか重々しく、説得力のある説明だ。刑事達は、再び感嘆の声を洩らした。

*

… 婚約、か。

松田とザザの話を聞きながら、角川は某つとしていた。

真面目に勉強一筋で生きてきた彼には、恋愛経験というものが全く無い。高校時代、周囲で恋の話が持ち上がったのはいたが、角川はバカにして、そんな話に加わろうとはしなかった。

しかし、二十代を迎えた今になると、流石の角川にも恋愛に対する“意識”が芽生えてくる。

… そろそろ、自分も考えた方が良くないだろうか？結婚について

て
…。

そう思っではいるものの、どうしたら具体的な行動に移せるのか
すら分からない。そんな角川にとって、松田とザザのスピード婚約
は、驚異的な出来事なのだ。

「そういえば、高橋くんはお相手がいるのよね？」
マドンナが、話を高橋にふった。

「はい。25歳の時からなので、もう5年7ヶ月と21日になりま
す」

高橋刑事は、細かい日付をサラリと答える。

「しかし、まだ婚約はしていませんね」

「高橋、もう三十路だろ？」

周りの刑事達が騒ぎだした。

「そろそろ踏み切った方がいいぞっ」

しかし、高橋は静かに笑うだけだった。

「急がば回れ、というじゃありませんか。結婚のような人生の節目
には、焦りは禁物です…ああ、松田くん達の決断にケチをつけてい
る訳ではありませんよ。善は急げ、ともいいますからね」

そして、彼は再び長髪を掻き上げた。品の良いコロンの匂いが霞
のように漂ったが、すぐに彼方に消え去った。

「じゃあ、角川くんは？彼女、いるでしょう？」

ザザが話を角川にふる。

「えっ?!わ、私ですか…?」

いきなりのことに、角川は慌てた。

「いえつ、私は、その、まだ20歳ですので…そんな、結婚なんて…」

「もしかして、彼女いないんじゃないのお？」

「ザザは猫のように目を細め、ニヤリと後輩を見つめる。」

「角川くん、すごく慌ててない？」

「そ…そんなことありませんよっ…!!」

「角川は、とつさに大きな声で反論した。」

「私にだって、彼女くらいいいます…!!」

「勿論、これは嘘だ。見栄とプライドがとつさに生み出してしまった、真つ赤な嘘。」

「しかし、角川の剣幕に驚いたためか、刑事たちは妙に納得してしまった。」

「へえつ。角川くんの彼女、かぁ。どんな人なの？年上？」

「興味津々、といった感じでザザが聞いてくる。」

「え、えーと…同い年です」

「角川は口をパクパクさせながら、必死に答えた。」

「美人ではないですけど…可愛い感じで…明るい女性です」

「あら」

「マドンナが瞬きした。」

「角川くん、可愛い系が好みなのね。意外だわ」

「そ、そうですね…？」

「ハハ、と角川は弱々しく笑った。どうかこの嘘がバレませんように、と祈りながら。」

「出前でーす」

フロアの入り口から大きな声がして、蕎麦屋の配達人が姿を現した。刑事たちの結婚談義は、ここでひとまず終わりを迎える。

蕎麦を注文していた松田が、料金を払うためによつこらしよ、と腰を上げた。それと共に刑事たちは座っていた椅子をクルリと回転させ、自分の席に戻る。

「ふう……」

角川は安心して、息をついた。あれ以上追及されたら、いつしか『嘘』にも限界がきてしまうように感じていたからだ。

……恋のことなんて、考えたことも無かったな ……。

フツとそう思い、角川は目を細める。

……もし、付き合つたら。さっき言ってしまったとおり、可愛らしくて、明るくて、元気な女性がいいな……。桐原さんのように ……。

ビクン！！

急に、角川は震えた。

「私は…今、何を考えた…？」

誰にも聞こえないような小さな声で呟く。彼は、自分自身に驚き、激しく動揺した。たった今、無意識のうちに、ヨーコを恋愛対象とみなしてしまった自分に…。

… 私は…桐原さんのことを…?!

半ば信じられない思いで、角川は両手で顔を覆った。とんでもない方向にいきなり動きだした自分の感情を、力ずくで押さえ込む。

… ダメだぞ。桐原さんには、もう相手がいるんだ…。

つい先ほどの、ファミリーレストランでのヨーコの言葉が蘇る。

『とにかくカッコいいのつ。優しくて、包容力があって、でも強くて…あつ、顔もイケメンなんだよっ』

「ダメだぞ…」

角川は再び、自分自身に呟きかけた。

「いいか、彼女はダメなんだぞ…」

その苦悩の言葉に、ザザが耳を澄ませていたことを。角川は知らない。

*

「月見そばをご注文のお客様」

出前を届けに来た男が、声を上げる。蕎麦屋だというのに、ピザ屋のような格好をしていた。キャップを目深に被っているので、よく顔が見えない。

「あ、僕です」

松田は財布を片手に、男の前に進み出た。

「いくらでしたっけ」

「580円になります」

静かに男が答える。

松田は千円札をポン、と男の手に押しつけた。

「悪いね。今、ちょうど小銭がないんだよ」

「かしこまりました」

男が軽く頭を下げる。

「420円のお返しになります」

ちよつと乱暴にお釣を返すと、彼は再び声を張り上げた。

「デラックス天井をご注文のお客様」

刑事たちは、一瞬ざわめいた。この蕎麦屋の『デラックス天井』は超巨大サイズ。海老の天ぷらが4本もついており、ご飯の量も通

常の3倍ほどある。真つ昏間からそんな食事をとる者がいるなんて…。

しかし、真新しいシヤネルの財布を手に進み出た人物を見て、刑事たちは納得のため息をつく。

「おいくらですかー？」

威勢よくニツコリ笑ったのは、桐原ヨーコだった。

*

その時まだヨーコは、蕎麦屋の口元が微かにニヤリとしたことに、気付いていなかった…。

蕎麦屋の男の口元が、微かに上がった。

それは、冷たい笑みだった。誰もをゾクツとさせる、氷のような笑い方。

しかし、署の刑事たちは、男の表情になど全く気付いていなかった。空腹をようやく満たすことができる喜びに、彼らは危険など感じることはできなかったのだ。

男の正面にいたヨーコですら、デラックス天井に眼を奪われていた。

だから、刑事たちは気付くのが遅れてしまった。男が蕎麦湯用のジャーから、どす黒い液体を撒き散らし始めたことに……。

ツンとした刺激臭が鼻腔を襲って、ヨーコはようやく異変に気が付き、顔を上げた。そして、男がライターを投げたのを見た。

「あっ！」

叫んだが、もう遅い。

ライターの火は、床に撒かれた液体の上を瞬時に滑った。そして、あっという間にメラメラと炎が立ち上がった。

「なんだ!？」

刑事たちは、一斉に立ち上がる。角川が青ざめ、ヨーコの元に走ろうとした。

「桐原さん!」

炎は、ヨーコの目の前で燃え上がっていた。瞬時に、火柱は人の背丈程になる。今にも彼女に燃え移ってしまいそうな勢いだ。しかし、ヨーコの背後にあるのは刑事たちのデスクの列。逃げることも、できそうにない。

「桐原さあん!」

角川は、ヨーコを炎から守ろうと必死に声を張り上げる。しかし、デスク越しなので彼女に触れることすらままならない。

「桐原さんっ!」

火災警報機がけたたましく鳴り響く。

しかし、ヨーコは落ち着いていた。クルッと角川を振り返ると、鋭い目をして叫ぶ。

「消火器を!早く!」

「しよ…しよ…うかき…?」

角川は一瞬ボカンとした。ヨークを助けることしか考えていなかった彼の頭は、その単語になかなか反応しなかったのだ。

代わりに、素早くマドンナが動く。

「桐原さん！伏せて！」

合図と共に、マドンナが手にした消火器から、細かい泡が勢いよく吹き出た。しかし、強い炎の力に、泡はみるみる吸い込まれていく。

「これじゃ足りないわ！」

マドンナが声を上げるか上げないかのうちに、二本目の消火器が泡を吹いた。刑事たちによって次から次へと、フロアに設置していた全ての消火器が栓を抜かれていく。

「わわっ！」

角川は、ザザが放った泡の直撃を受けて尻餅をついた。しかし、誰もそんなことに気をとめない。皆、火を消すことに全神経を注いでいる。

そんな中、ヨークは、煙の向こうに走っていく。「蕎麦屋の男」

の姿を捉えた。

「待ちなさい！」

叫ぶが、煙や火に阻まれ、追いかけることはできない。

男の姿は、サツとヨーコの視界から消えていった。

「待ちなさい　　！！！」

ヨーコの声だけが、虚しく煙の向こうへと飛んでいく…。

間もなく、フロアの火は完全に消火され、静寂が訪れた。くすぶっている灰色のカーペットだけが、騒動の大きさを物語っている。

「とんだ災難だったわね」

マドンナがため息をついた。

「被害がカーペットだけだっただけでも、感謝しなくちゃいけないわ」

「そうですね…」

長髪の高橋刑事が、やれやれと首を振る。

「まさか、署内でこんな事件が起こるとは。早く被疑者を捕まえなければ、警察の恥を世間にさらしてしまうことになりますね」

「もつともだ」

松田が答えた。

「こんな事件の被疑者も捕まえられないんじゃないじゃ、市民になんて揶揄されるか」

「大体ね、最近私たち狙われすぎなのよ」

イライラと呟いたのは、ザザだ。

「みんな覚えてるでしょ？四月の事件」

一同、頷いた。

「四月の事件」と言えば、本町署の人間なら誰でもわかる。警察庁長官の息子・文春が何者かに誘拐されたのだ。犯人は警察に恨みを持つ姉弟で、井の頭公園を丸ごと爆破するという凶行にまで及んだ。

「今度の被疑者も、私たちに恨みがあるんじゃないかしら？」

ザザが面倒臭そうに言った。

「そうだな……」

松田が考えこむ。

刑事たちの大半が、ザザの意見に賛同する声を次々に上げた。

しかし、ヨーコが小さく否定の声を上げたことで、そのざわめきもサツと消え去る。

「これ見て……」

ヨーコは、静かにデラックス天井を掲げた。火災騒動の最中も、実はしっかり天井を守っていたのだ。あんな騒ぎの中でも自分の食料を確保しようとする辺り、流石ヨーコである…。

が、今ヨーコが刑事たちに見せたいのは「天井」ではなかった。

天井の蓋に挿まれていた、一枚の紙切れを見つけたのだ。天井が発する水蒸気で湿ったその表面には、おどろおどろしい赤い文字が踊っている。

「それは…何？」

恐々とマドンナが尋ねる。

「読み上げます」

ヨーコが、厳しい表情で答えた。

「…明日の夜9時、吉祥寺本町総合病院を爆破する。これは、戦いだ。敗戦者は死をもって償え… 要するに、犯行予告です」

229

「なんだって!？」

刑事たちが騒めいた。署に火を放った者が、犯行予告をしていたなんて。更なる事件の予感に、彼らは皆緊張をみなぎらせていた。

「…早く、総合病院の方に連絡をとらないと。患者を避難させなくては」

高橋が言った。

すると、マドンナが刃物のような視線を刑事たちに向けた。

「岩波さんに連絡をとって。彼は今、総合病院にいるはずよ」

吉祥寺本町総合病院。

最先端の医療技術を取り入れた、都内でも有数の大病院だ。

6階建ての建物で、3階部分までが全面的にガラス張りになっている。そのモダンな外観は、テレビドラマの撮影にも何度か用いられた。

今、その病院に向かってトボトボと歩く男がいる。中肉中背で、いかにも真面目そうな雰囲気を漂わせているのだが、メガネが僅かに傾き、背中も少し曲がり気味だ。

「はーあ……」

その男 角川は、深い深いため息をついた。

火災が起きたとき。ヨークを守りたかったのに、逆に足を引っ張ってしまった……。

その思いが、彼をションボリとさせる。

…… 桐原さんは、私のことをどう思ったんだろうな

…

考えれば考えるほど、自分が情けなく感じられた。しかし、いつまでも憂鬱な気分である訳にはいかない。角川は、「犯行予告」の内容を病院に伝えるためにやってきたのだから。

病院のエントランスへと足を進める。

そこは、空港を連想させるような、解放感溢れる巨大なフロアだった。看護師や医者が忙しそうに行き交い、点滴を刺した患者達がのどかに談笑している。

生死の境を彷徨う急患も受け入れている救急病院だが、昼下がりの穏やかな空気が満ちていた。

角川はマドンナに教えられたとおり、エレベーターで真っすぐ五階に向かう。その一室に岩波がいる、と言われたのだ。病院内なので携帯の電源は切っているだろう、ということで角川が出向くことになった。

「岩波さん、体調でも悪いのかな？…いや、それはないか」

誰もいないエレベーターの中で、角川は呟いた。いつも現場にいる鬼上司・岩波が、病院にいるとは珍しい。それに、彼は体調を崩すような男ではなかった。

「ってことは…誰かのお見舞い、かな？」

エレベーターが緩やかに止まり、ゆっくりと扉が左右に開く。

五階に降り立った角川は、病室が等間隔で並ぶ廊下をキョロキョロと見回した。マドンナに渡されたメモを頼りに、一番奥のドアまで歩いていく。

509号室。

その部屋の前まで来た時、突然中から岩波の低い声がした。角川は、ドアに伸ばしかけていた手をピクツと止め、思わず立ちすくむ。

「じゃあな。…また明日にでも来るから。待ってるよ」

岩波の声は、ぶつきらぼうだが、とても穏やかだった。いつもの怒鳴りっぱなしの彼とは全く違う。今の声には、どこか優しさが滲み出ていた。

… 岩波さん!?

角川は驚きに口をポカンと開ける。だから、病室内から岩波本人が出てきた時、反応が遅れた。

ゴツッ！

角川は、思いつきり岩波と正面衝突してしまったのだ。

「うわっ！危ねえな、ドアの前なんか立ちやがって！」

岩波が苛立った声を上げる一方、角川はぶつけた頭を抱えてヨロヨロする。

岩波は石頭だ。ぶつかっても涼しい顔をしている。

「おい角川、何でお前がここにいる」

「マ、マドンナさんに頼まれて……」

角川はズキズキ痛む頭を抱えて呻きながら答えた。

「麗奈が？」

岩波が顔をしかめる。

「……あいつ、お前に何もかも喋ったのか？」

「え？」

角川は涙目になりながら岩波を見た。

「何もかも、ってどういうことですか？」

しかし、岩波は答えなかった。少し角川から眼を背ける。

「……知らないなら、それでいい」

角川にとっては、何だか腑に落ちない言葉だった。「実はね…」と切り出されたのに「やっぱり何でもないよ」と言われた時の感覚に似ている。

しかし、これ以上追及すると岩波の雷が落ちそうだったので、角川は仕方なく話題を変えた。

「ここに、岩波さんの知り合いが入院してらっしゃるんですか？」

その途端。

ほんの僅かだが、岩波の目蓋が確かにピクツと動いた。

だが、彼は答えず、そのまま角川に背を向けて歩きだす。その歩き方は、どこことなく乱暴だ。

「あ！ちょっと待ってくださいよ、岩波さんっ」

慌てて角川が後を追った。どうやら、岩波が病院にいた理由は聞き出せそうにない…。

*

「犯行予告…?」

角川の報告を受け、岩波は顔をしかめた。

「随分と大胆なことをするヤツがいるもんだな」

「まったくです」

シロップをたっぷり入れたアイステイーを啜りながら、角川が頷く。

「ここは、病院内のカフェテリアだ。ガラス張りの窓から、さんと陽光が降り注いでくる。」

岩波は仏頂面のままエスプレッソをグイッと飲んだ。そして、再び口を開く。

「…つまり…万が一に備えて患者を移動させた方がいい、と言いたいんだな?」

「はい。その通りです」

角川が頷く。

「マドンナさんも、そう言っていました」

「だがな、それはムリだぜ」

岩波はにべもなく言った。

「え…な、なんで…ですか?」

角川は眼をパチクリさせながら上司を見る。患者を救う最善策だというのに、どうして否定されなければならないのだろうか。

「バーカ。考えが単純すぎるんだよっ」

岩波はふうつと息をつく。

「患者の中にはな、生命維持装置で生きてるヤツもいるんだよ。それを一朝一夕で安全に外して、他の病院に移すなんて不可能だ」

「は…はあ」

角川は再び瞬きした。岩波の言葉に、妙な熱っぽさを感じたのだ。だが、それは気のせいだったかもしれない。

岩波が静かに続けた。

「俺たちにできることは…犯行の前に、被疑者を捕まえることだ」

犯行が予告された当日を迎えた。

まだ夜も明けない午前3時。

病院の周辺を、かなりの数のパトカーが取り囲み始めた。どの車両も、一見普通のどこにでもある一般車に見える。しかし、中に乗っているのは私服を着た警官たちだ。

犯人に悟られないよう、警官たちは一般人のふりをしている。

一方、何台もの救急車がひっきりなしに病院を出入りしていた。できるだけ多くの患者を、安全な病院に搬送するためだ。

他の病院には、あまりベッドの空きはない。何しろ、救急患者の「たらい回し」が頻発するご時世だ。しかし、「犯人を捕まえるまで」という期限を条件としたところ、患者の受け入れを何とか承諾してくれる病院もあった。

殆どの患者は移送先が決められ、ある程度回復している患者は、一時帰宅してもらうことになった。

こうして病院には、移送することもままならないような重体患者のみが残されたのだ。

刑事たちの役目は、これらの患者を守り切ること。そして、被疑者を犯行の前に捕まえることだ。

「桐原さんと角川くんは、ここに張り込んでちょうだい」
刑事たちをエントランスに円形に集め、マドンナが指示し始めた。

「入院患者の家族以外は、一切中に入れちゃダメよ。それから、高橋くんは監視カメラのモニターチェックをお願いね。不審者を見つけたら、すぐ連絡して」

「はい！」

ヨーコ・角川・高橋が返事する。

∴ やった！

角川は、密かにガッツポーズをした。

∴ 桐原さんと一緒の持ち場だ！ラッキーだなあ！

たったそれだけのことなのに、角川は踊りだしたくなってしまった。

「松田さんと新潮さんは4階、岩波さんは5階に張り込んでね。それぞれの階に4人ずつ、移送できなかった患者がいるわ」

マドンナが指示を進めていく。

「今回の事件では、患者の命を守ることが最優先よ。本町署以外にも応援を要請したわ」

マドンナは言葉を切り、刑事たちの円の外から見守っていた一人の男に目を向けた。

「本庁の、竹内翔さんよ」

刑事たちは、揃ってその男に視線を注ぐ。

すらっとした長身。黒く、糊の効いた上品なスーツ。短めに揃えた黒髪。切れ長の、涼やかな目元……

「ああっ！」

突然、ヨーコが悲鳴を上げ、飛び上がった。

「どうした？」

岩波が不審そうに彼女を見つめる。

ヨーコは、慌てて首を振った。

「なっ、何でもないです。つい…すみませんっ」

「なんだ、こんな時に」

岩波がイライラとヨーコを睨み付ける。

ヨーコは深呼吸をしながらも、まだ落ち着くことができずいた。

なぜなら。

紹介されたその男は、知り合いの泥棒
山川圭二に瓜二つ
だったからだ。

ヨーコは、「その男」を食い入るように見つめ続けた。知り合
いの泥棒によく似た、警視庁の男を。

「初めまして」

その男が軽く頭を下げる。流麗な動きだ。

「竹内翔と申します」

そして、本町署の刑事たちをぐるりと見渡すと、こう続けた。

「：今回の事件では、第一に患者の安全を守らなくてはなりません。
いざという時に備えて、本庁の警官も張り込んでいます。私はその
代表として、挨拶申し上げます」

ヨーコは、竹内翔から目を離すことが出来なかった。見れば見
るほど、彼が山川圭二と瓜二つに思えたのだ。涼やかな切れ長の目
元も、体型も。ただ、歳は10ほど違うかもしれない。竹内には、
どこか貫禄が漂っている。

「よろしく願います」

竹内が再び軽く頭を下げると、刑事たちも恐る恐る会釈を返し
た。刑事たちは、普段は本庁の人間と付き合い合うことなど殆どない。
だから、どう付き合い合っていけばいいかわからずに、誰もが少々惑
い気味だ。

しかし、竹内はそんなことなど全く気にしていないようだった。リラックスした様子で再度刑事たちを見回す。すると、ヨークと竹内の視線がピッタリと重なった。

「初めまして。桐原さんですよね」

竹内が微笑んだ。

「え……」

ヨークはうろたえた。

「どうして……」

「どうして私が貴女のことを知っているか、聞きたいのでしょうか？」

竹内はサラッと言う。

243

「そ、そうです」

何とか気持ちを落ち着かせ、ヨークは答えた。

「あの…どこかでお会いしましたっけ？」

「ええ。貴女は気付いていなかったかも知れませんがね。また後で、ゆっくりお話ししましょう。お茶でもしながら、ね」

竹内は、落ち着いていた様子で笑う。

「は、はいっ」

ヨークは慌てて頷いた。

その様子を見ていて、面白くなかったのは角川だ。ゆつたりとヨ
ーコを誘う竹内が、なぜか憎たらしく感じられたのだ。しかも、二
人は以前会ったことがあるという。角川は、焦りにも似た感覚を覚
えて、密かにギュツと拳を握った。

「では、皆さん。職務に当たってください」

竹内の声と共に、刑事たちは持ち場へと散っていった。

*

「…麗奈」

他の刑事たちが離れていってしまつと、岩波がひっそりとマドンナ
に近づいた。

「俺の張り込み場所は、五階だったよな？」

二人は、本町署の中では一目おかれるベテラン刑事だ。同期と
いうこともあり、互いのことをよくわかりあっている。マドンナの
ことを本名で「麗奈」と呼ぶのも、岩波だけだ。だが、その分喧嘩
もたえないのだが…。

「ええ、そうよ。岩波さんは五階」

マドンナが、書類をクリップボードにまとめながら答えた。

「…それで良かったでしょ？岩波さんの手で、“あの子”を守って
あげられるから…」

「 ああ 」

岩波が頷いた。

「 ……ありがとう、麗奈 」

「 やめてよ、もう。岩波さんがお礼を言うなんて気味悪いわ 」

マドンナが苦笑しながら肩をすくめる。

「 ほら、さっさと持ち場に行って 」

彼女の言葉は、照れ隠しだった。

「 ……」

岩波は無言で小さく口元に笑みを浮かべると、その場をゆつたりと去っていった。

「 ……バカね、私ったら 」

マドンナはため息をついて、岩波の後ろ姿を見送った。

その頬は、本当に微かに赤く染まっていた。恐らく、このことに岩波は気付かなかっただろう…。

見張りというのは、これほど暇なものか…と、角川は思った。

外の暑く気だるい空気の中で、蝉が元気いっぱいに鳴いているのが聞こえるだけ。閑散とした朝のエントランスは、差し込み始めた陽光で薄い金色に輝き始めていた。

「誰も来ませんねえ…」

角川はふわふわと欠伸を噛み殺す。

「張り込みだしてから4時間経ちますけど、何も起こらないし…」

「そうねえ…」

ヨーコもかなり眠そうだ。目蓋が重い。のどかな夏の空気に、意識が溶け込んでいってしまいそうになる。だが、意識を眠りの中に解き放とうとする瞬間、彼女の理性がヨーコを押し止めるのだ。「職務中に居眠りするなんて、許されると思ってるの?」と。

「何か起こらないかしらねえ…」

何か目覚ましになるような刺激を求めて、ヨーコはエントランスの外に目を向けた。

二人は、エントランスで長椅子に並んで腰掛け、来院者がこない

か待ち続けていた。患者の家族に紛れ込んで、被疑者が姿を現すかもしれないからだ。ヨーコと角川は、来院者すべての身元を調べあげる気でいた。うまくいけば、エントランスで被疑者を捕まえられるかも知れない。

しかし、肝心の来院者が一人もやってこないのだ。最初は緊張と興奮でワクワクしていたヨーコと角川も、時が経つにつれて眠気に支配されていった。

「ふあ……」

角川は再び欠伸を噛み殺した。昨夜寝ていないこともあり、身体に力が入らない。それでも彼が何とか起きていられるのは、隣にヨーコが座っているからだ。たったそれだけのことなのに、角川の心臓はトクトクと早鐘を打つ。

…桐原さん。私は、どうしたらいいですか…？

苦しい想いが、角川の胸の底で渦巻き始めていた。

恋は、一度自覚してしまうと、まるで病のように人を蝕んでいく。激しく恋に突き動かされる者もあれば、じわじわと攻め立てられる者もある。角川は、まさに後者だった。

…桐原さんには、立派な相手がいるんだ。そんな人に、ときめい

てはいけない。絶対に、いけないんだ。

角川は閉じかかる目蓋を押し上げながら、自分を戒めた。

…私は、忘れなくてはいけない。こんな一瞬の胸の高鳴りなどは…。

ふいに、外を見つめていたヨーコが角川に視線を向けた。

「角川くん。大丈夫う？」

角川は、彼女の声でようやく物思いから覚める。

「…えっ？…あ、はっ、はい！大丈夫です！」

慌ててピシッと背筋を伸ばすと、ヨーコがクスクス笑った。

「どうしたの？なんかヘンだよ、今日の角川くん」

「へ…ヘン…ですか？」

何気ないヨーコの言葉に、彼はドキツとした。もしか、自分の想いに気付かれてしまったのではないかと思ったのだ。

「角川くん、暑くて溶けちゃってるんじゃない？」

ヨーコはニツと角川を見た。

「あたし、その自販機でジュース買ってくるよ。冷たいもの飲ん

でシャキツとしなきゃねっ」

「あ…ありがとうございます」

角川が答えるか答えないかのうちに、ヨーコは勢いよく長椅子から立ち上がった。

ヨーコが脇を通り抜けたとき、ふわっと優しい風が角川を包み込んだ。

爽やかな香がした。

…桐原さん。

角川は思わずヨーコの後ろ姿を目で追う。

「私は、あなたに溶けてしまいそうなんですよ…」

…私の気持ちは、きっとあなたに届かない。

私は、どうすればいいですか？この苦しさを…

4メートルほど先の壁ぎわに、自販機はあった。ヨーコがレモンウォーターのペットボトルを二本手にして戻ってくる。

「はい、角川くん」

ヨーコが、ボーツとしている角川にレモンウォーターを渡したときだった。

「あれ？ヨーコじゃん」

突然、能天気な声があった。

「…ああ、そうか。張り込みしてるんだっけな」

ヨーコは、その聞き覚えのある声に思わず硬直する。

まさか。

まさか…

振り返ると、そこにはエプロン姿の青年が立っていた。

しばらく染めなおしていないせいか、プリンのようになってしまうたボサボサの茶髪。切れ長の瞳。すっと通った鼻。ひよろつとした身体つき…。

「よっ。久しぶりー」

彼は、へらつと右手を上げてみせた。

「ヨークは唾然として、グツと大きく目を見開いたまま、動けない。山川圭…!!な、なんでアンタがここに!?!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2675i/>

Mr.Justice ~ 真実と現実

2010年12月5日09時09分発行